

Oracle8

for Intel UNIX (DG/UX Intel, NCR MP-RAS, SCO UnixWare, Solaris Intel)
インストール・ガイド

リリース 8.0.6

1999 年 9 月

部品番号 : J00620-01

おもなトピック :

[要件および機能](#)

[環境設定](#)

[インストールのタスク](#)

[Oracle8 システムの構成](#)

[アップグレードおよび移行](#)

[Oracle Installer の使用](#)

[Oracle8 をインストールするための UNIX 基礎知識](#)

[各国語サポート](#)

ORACLE™

Oracle8 for Intel UNIX (DG/UX Intel, NCR MP-RAS, SCO UnixWare, Solaris Intel) インストール・ガイド リリース 8.0.6

部品番号 : J00620-01

原本名 : Oracle8 Installation Guide, Release 8.0.6 for Intel UNIX (DG/UX Intel, NCR MP-RAS, SCO UnixWare, Solaris Intel)

原本部品番号 : A73222-01

原本著者 : Julie Laffrenzen, Louis Dobrozensky, Lynn Robinson.

Copyright © 1999 Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラムの使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当ソフトウェア（プログラム）のリバース・エンジニアリングは禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負い兼ねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Legend が適用されます。

Restricted Rights Legend

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication and disclosure of the Programs shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-14, Rights in Data -- General, including Alternate III (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
------------	---

1 要件および機能

インストールの概要	1-2
インストールのシステム要件	1-3
ハードウェア要件	1-3
ソフトウェア要件	1-6
その他の製品固有の要件	1-10
ディスク領域およびメモリーの要件	1-24
オペレーティング・システムおよびインストールに固有の問題点および制限事項	1-25
リリース 8.0.6 の新製品および機能	1-26
Oracle7 からの製品の変更	1-28
Oracle7 からの製品の削除	1-29

2 環境設定

UNIX 環境の設定	2-2
root ユーザーで行うタスク	2-4
oracle ユーザーで行うタスク	2-18
個々の Oracle 製品の設定タスク	2-23
サーバー	2-23
カートリッジおよびオプション	2-23
Tools 製品およびブリコンパイラ	2-25
ネットワーク製品およびシステム管理製品	2-26

3 インストレーションのタスク

Installer の起動	3-2
Installer のプロンプト	3-4
データベース作成プロンプト	3-8
Oracle Parallel Server のプロンプト	3-11
ドキュメントのインストール	3-12
ドキュメントのインストール方法	3-12
Installer セッション後のタスク	3-13

4 Oracle8 システムの構成

root ユーザーで行うタスク	4-2
oracle ユーザーで行うタスク	4-12
個々の Oracle 製品のインストール後のタスク	4-16
インストールしたドキュメントの表示	4-29
Oracle Information Navigator	4-29
Text Viewer	4-30

5 アップグレードおよび移行

アップグレード方法の選択	5-2
定義	5-2
制限事項およびその他の考慮事項	5-4
アップグレード前のタスク	5-6
Oracle Server のアップグレード	5-11
アップグレード後のタスク	5-23

A Oracle Installer の使用

データベース・オブジェクトの作成	A-2
Installer によって作成されるデータベース・オブジェクト	A-2
デフォルトおよびリピート・インストール	A-3
デフォルト・インストール・パス	A-3
Silent Mode (リピート・インストールの場合)	A-4
アップグレードおよびパッチ・セット・インストール	A-6
パッチ・セット	A-6
Installer のその他の機能	A-8
クライアント共有ライブラリの再構築および再リンク	A-8

製品の削除	A-9
ステージ領域の作成	A-9
トラブルシューティング	A-10
表示上の問題	A-10
不十分なディスク領域	A-10
再リンク時のエラー・メッセージ	A-11
ステージ領域の問題	A-12
ユーザー・エラー	A-12

B Oracle8 をインストールするための UNIX 基礎知識

UNIX 概念のポイント	B-2
大文字と小文字の区別	B-2
実行スクリプト	B-2
ワイルド・カード	B-2
シンボル	B-3
基礎的な UNIX コマンドの概要	B-4
第 1 章「要件および機能」で使用する基礎的な UNIX コマンド	B-4
第 2 章「環境設定」で使用する基礎的な UNIX コマンド	B-4
第 3 章「インストレーションのタスク」で使用する基礎的な UNIX コマンド	B-8
第 4 章「Oracle8 システムの構成」で使用する基礎的な UNIX コマンド	B-8
Oracle8 をインストールするための基礎的な UNIX コマンド	B-9
基礎的な UNIX の構文と説明	B-10

C 各国語サポート

サポートしているソート順	C-2
サポートしているキャラクタ・セット	C-3
サポートしている言語および地域	C-6

索引

はじめに

用途

このマニュアルは、Data General (DG)、NCR、SCO および Sun Microsystems から提供される Intel チップベースの UNIX プラットフォーム上に、Oracle8 Server をインストールおよび構成する方法を記載しています。このマニュアルは、Oracle8 マニュアル・セットの内容を補足しています。

対象読者

このマニュアルは、Intel UNIX システムに Oracle8 Server をインストールする方を対象としています。

Oracle8 および Oracle8 Enterprise Edition

特に指示がない限り、このマニュアルで説明している特長や機能は、Oracle8 および Oracle8 Enterprise Edition に共通です。

このマニュアルで使用する表記規則

クーリエ体	クーリエ体は、UNIX コマンド、ディレクトリ名、パス名およびファイル名を表します。
大カッコ []	大カッコで囲まれた語は、キーの名前を表します（たとえば、[Return] を押す）。ただし、コマンド構文で大カッコを使用する場合は意味が異なります。
イタリック体	イタリック体は、変数（ファイル名の中で変化する部分を含む）を表します。
大文字	大文字は、SQL コマンド、初期化パラメータまたは環境変数を表します。

UNIX では大文字と小文字が区別されるため、このマニュアルの表記規則は、他の Oracle 製品のマニュアルで使用されている表記規則と多少異なります。

コマンドの構文

コマンドの構文は、クーリエ体で表します。コマンドの構文の表記規則は次のとおりです。

バックスラッシュ \	バックスラッシュは、1 行にコマンドが入りきらない場合に使用します。このマニュアルで記載しているとおりに入力する（バックスラッシュを付ける）か、またはバックスラッシュを付けずに 1 行で入力します。 <pre>dd if=/dev/rdsk/c0t1d0s6 of=/dev/rst0 bs=10b \ count=10000</pre>
中カッコ { }	中カッコは、必ず選択する項目を表します。 <pre>.DEFINE {macro1}</pre>
大カッコ []	大カッコは、任意に選択する項目を表します。 <pre>cvtcrt termname [outfile]</pre> <p>ただし、本文で大カッコを使用する場合は意味が異なります。</p>
省略記号 ...	省略記号は、同じ項目を任意の回数だけ繰り返すことを表します。 <pre>CHKVAL fieldname value1 value2 ... valueN</pre>
イタリック体	イタリック体は、変数を表します。変数の箇所を適切な値に置き換えてください。 <pre>library_name</pre>
縦棒線	縦棒線は、中カッコまたは大カッコで囲まれている選択項目を表します。 <pre>SIZE filesize [K M]</pre>

カスタマ・サポート・センターの連絡先

オラクル社カスタマ・サポート・センターへは、次の電話番号におかけください（営業時間は、各地域のカスタマ・サポート・センターにお問い合わせください）。

- アメリカ合衆国：+1.650.506.1500
- ヨーロッパ：+44.1344.860160
- アジア：+81.3.5717.1860

詳細は、<http://www.oracle.com/support> にアクセスしてください。

参照ドキュメント

前回のリリースの Oracle Server からの移行およびアップグレードの詳細は、『Oracle8 Server 移行ガイド』を参照してください。

本番データベース・システム用のシステム管理およびチューニングの詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle8 for Intel UNIX (DG/UX Intel, NCR MP-RAS, SCO UnixWare, Solaris Intel) 管理者リファレンス』
- 『Oracle8 Server チューニング』
- 『Oracle8 Server 管理者ガイド』
- 『Oracle Net8 管理者ガイド』

リレーショナル・データベース管理システム関連の概念または用語に慣れていない場合は、インストレーションを始める前に、『Oracle8 Server 概要』の第 1 章をお読みください。

要件および機能

インストールを短時間で正常に終了するためには、Oracle ソフトウェアをインストールするためのソフトウェアの依存関係および領域要件を、ローカル・システムが満たしている必要があります。この章では、Oracle8 Server for Intel UNIX リリース 8.0.6 をインストールする場合の要件を説明します。インストールを始める前に、この章で説明する要件をシステムが満たしていることを確認してください。

- [インストールの概要](#)
- [インストールのシステム要件](#)
- [オペレーティング・システムおよびインストールに固有の問題点および制限事項](#)
- [リリース 8.0.6 の新製品および機能](#)

インストールの概要

Oracle8 Server をインストールする手順は、次のとおりです。

1. 前提条件を満たす : ハードウェア、ソフトウェア、メモリーおよびディスク領域が、インストールする製品の要件を満たしていることを確認します。詳細は、この章を参照してください。既存のシステムをアップグレードする場合は、[第 5 章「アップグレードおよび移行」](#)を参照してください。
2. UNIX 環境を確認する : インストールする製品用に UNIX 環境が正しく設定されていることを確認します。詳細は、[第 2 章「環境設定」](#)を参照してください。
3. インストールする : Installer を使用して、Oracle ソフトウェアをインストールします。詳細は、[第 3 章「インストールのタスク」](#)を参照してください。
4. インストール後のタスクを行う : データベース・オブジェクトを作成してユーザー環境を構築し、インストールした Oracle 製品をローカル・システム用に構成します。詳細は、[第 4 章「Oracle8 システムの構成」](#)を参照してください。
5. クライアント・インストールを行う : Oracle Tools 製品、アプリケーションおよびクライアント・インタフェースを、それぞれのインストール・ガイドに従ってインストールします。

インストールのシステム要件

Oracle8 Server をインストールする前に、システムが次の要件を満たしていることを確認してください。

ハードウェア要件

次に、Oracle8 Server の今回のリリースでの DG AViiON、NCR MP-RAS、SCO UnixWare および Solaris Intel のハードウェア要件を示します。

表 1-1 DG AViiON のハードウェア要件

ハードウェア項目	DG AViiON の要件
CPU	Intel チップ・セット・ベースの DG AViiON Server。
メモリー	64MB 以上の RAM。ConText Cartridge を使用する場合は、128MB が必要です。
スワップ領域	通常は、RAM の 3 倍の領域が必要。
ディスク領域	Oracle8 Server のソフトウェアをすべてインストールする場合は、750MB 以上のディスク領域が必要。ただし、製品のサブセットのみをインストールする場合、必要な領域は小さくなります。OFA 準拠のモデルを使用する場合は、4 つ以上のデバイスが必要です。Oracle ソフトウェアのインストール用に 1 つ、OFA 準拠のデータベース作成用に 3 つ以上必要です。 注意： パフォーマンスおよびフォルト・トレラントを向上させるために、ディスク領域を、少数の大きなドライブではなく、多数の小さなドライブに分散することをお勧めします。
CD-ROM 装置	High Sierra-RockRidge 形式を読み込める装置が必要。

表 1-2 NCR MP-RAS のハードウェア要件

ハードウェア項目	NCR MP-RAS の要件
CPU	NCR UNIX システム S40、3000、4000、4300 または 5000 クラスのマシンが必要。
メモリー	64MB 以上の RAM。ConText Cartridge を使用する場合は、128MB 必要です。
スワップ領域	通常は、RAM の 3 倍の領域が必要。
ディスク領域	Oracle8 Server のソフトウェアをすべてインストールする場合は、750MB 以上のディスク領域が必要。ただし、製品のサブセットのみをインストールする場合、必要な領域は小さくなります。OFA 準拠のモデルを使用する場合は、4 つ以上のデバイスが必要です。Oracle ソフトウェアのインストール用に 1 つ、OFA 準拠のデータベース作成用に 3 つ以上必要です。 注意： パフォーマンスおよびフォルト・トレラントを向上させるために、ディスク領域を、少数の大きなドライブではなく、多数の小さなドライブに分散することをお勧めします。
CD-ROM 装置	High Sierra-RockRidge 形式を読み込める装置が必要。
Ethernet Controller	今回のリリースで提供されている Net8 製品を Ethernet ネットワーク上で使用する場合は、NCR Ethernet Controller/MC が必要。 サポートされている Ethernet カードについては、NCR カスタマ・サポート・センターで確認することをお勧めします。

表 1-3 SCO UnixWare のハードウェア要件

ハードウェア	SCO UnixWare の要件
CPU	Intel ベースのシステム。サポートされているハードウェア・システムについては、UnixWare のドキュメントを参照してください。
メモリー	64MB 以上の RAM。ConText Cartridge を使用する場合は、128MB が必要です。
スワップ領域	通常は、RAM の 3 倍の領域が必要。
ディスク領域	<p>Oracle8 Server のソフトウェアをすべてインストールする場合は、750MB 以上のディスク領域が必要。ただし、製品のサブセットのみをインストールする場合、必要な領域は小さくなります。OFA 準拠のモデルを使用する場合は、4 つ以上のデバイスが必要です。Oracle ソフトウェアのインストール用に 1 つ、OFA 準拠のデータベース作成用に 3 つ以上必要です。</p> <p>注意：パフォーマンスおよびフォルト・トレラントを向上させるために、ディスク領域を、少数の大きなドライブではなく、多数の小さなドライブに分散することをお勧めします。</p>
CD-ROM 装置	UnixWare がサポートしている RockRidge 形式の CD-ROM ドライブが必要。
Ethernet Controller	UnixWare がサポートしている Ethernet カードが必要。

表 1-4 Solaris Intel のハードウェア要件

ハードウェア	Solaris Intel の要件
CPU	Intel ベースのシステム。サポートされているハードウェア・システムについては、Solaris Intel のドキュメントを参照してください。
メモリー	64MB 以上の RAM。ConText Cartridge を使用する場合は、128MB が必要です。
ディスク領域	Oracle8 Server のソフトウェアをすべてインストールする場合は、750MB 以上のディスク領域が必要。ただし、製品のサブセットのみをインストールする場合、必要な領域は小さくなります。OFA 準拠のモデルを使用する場合は、4 つ以上のデバイスが必要です。Oracle ソフトウェアのインストール用に 1 つ、OFA 準拠のデータベース作成用に 3 つ以上必要です。 注意: パフォーマンスおよびフォルト・トレラントを向上させるために、ディスク領域を、少数の大きなドライブではなく、多数の小さなドライブに分散することをお薦めします。
CD-ROM 装置	Solaris Intel がサポートしている RockRidge 形式の CD-ROM ドライブが必要。
Ethernet Controller	Solaris Intel がサポートしている Ethernet カードが必要。

ソフトウェア要件

表 1-5 に、Oracle8 Server の今回のリリースでの DG AViiON、NCR MP-RAS、SCO UnixWare および Solaris Intel のソフトウェア要件を示します。

表 1-5 DG AViiON のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア	DG AViiON の要件
オペレーティング・システム	SDK および ACO オプションが付いている DG/UX リリース 4.20 MU04。
オペレーティング・システム・パッチ	dgux_R4.20 MU04_ix86.p04 dgux_R4.20 MU04_ix86.p23 dgux_R4.20 MU04_ix86.p28
GUI	現行システムのリリースの X11R5 が必要。
クラスタ・パッケージ	Oracle Parallel Server オプションを使用するには、DG Cluster1.23 から分散ロック・マネージャをインストールする必要があります。
UNIX カーネル・パラメータ	DG UNIX カーネル・パラメータの推奨値は、第 2 章の「 DG/UX Intel 用の UNIX カーネル・パラメータ 」を参照してください。

表 1-6 NCR MP-RAS のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア	NCR MP-RAS の要件
オペレーティング・システム	<p>Oracle8 Server の今回のリリースが正しく動作するには、NCR MP-RAS バージョン 3.0.2 が必要です。</p> <p>オペレーティング・システムのリリース番号は、<code>/etc/.relid</code> ファイルで確認してください。</p> <p>注意： Oracle8 Server をインストールする前に、NCR ネットワーク・パッケージおよび TCP/IP パッケージ（オペレーティング・システムに添付されているもの）もインストールしてください。</p>
GUI	<p>GUI ツールのすべてをインストールするには、少なくとも <code>xwin</code> および <code>xwindev X11</code> パッケージのバージョン 5.04.03.06、<code>motif</code> および <code>motifdev</code> の Motif パッケージがシステムにインストールされている必要があります。</p>
ULIMIT 値	<p>カーネルの ULIMIT パラメータの値がご使用のシステムに適切な値に設定されていないと、いくつかのファイルが使用できなくなるか、または破損してしまうことがあります。一般的に、ULIMIT は最も大きいデータベース・ファイルよりも大きくなければいけません。</p> <p><code>/etc/default/login</code> ファイルの ULIMIT 値は、インストール用に 2113674 ブロック以上に設定してください。このパラメータ値の設定方法については、ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。</p>
DBT パッケージ	<p>NCR MP-RAS システムでは、<code>dbt</code> パッケージが必要。</p> <p><code>/etc/conf/sdevice.d/dbt</code> ファイルの 2 番目のフィールドに "Y" が設定されていれば、このパッケージは有効です。パッケージが有効になっていない場合は、<code>/etc/conf/sdevice.d/dbt</code> ファイルの 2 番目のフィールドを "Y" に変更し、UNIX カーネルを再リンクします。その後、システムを再起動します。システムのインスタンスごとに、<code>LISTIO_MAX_CNT</code> が 2048 に設定されていることを確認してください。</p> <p>警告： <code>dbt</code> パッケージが有効になっていない場合は、Oracle を実行できません。</p>
非同期 I/O パッケージ	非同期 I/O パッケージ（NCR MP-RAS カーネルに添付）が必要。
XENIX 互換パッケージ	XENIX 互換パッケージ（NCR MP-RAS に添付）が必要。
UNIX カーネル・パラメータ	NCR MP-RAS カーネル・パラメータの推奨値は、第 2 章の「 NCR MP-RAS 用の UNIX カーネル・パラメータ 」を参照してください。
LifeKeeper DLM クラスタ・パッケージ	Oracle Parallel Server オプションを使用するには、LifeKeeper DLM バージョン 1.03.04.02 をインストールする必要があります。

表 1-7 SCO UnixWare のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア	SCO UnixWare の要件
オペレーティング・システム	UnixWare7 Server 7.1。Optimizing C Compilation system が必要です。
オペレーティング・システム・パッチ	ptf7129a、ptf7401b、ptf7406b、ptf7414a および ptf7420a
GUI	現行システムのリリースの X11R6 が必要。
UNIX カーネル・パラメータ	UnixWare UNIX カーネル・パラメータの推奨値は、第 2 章の「SCO UnixWare での UNIX カーネル・パラメータ」を参照してください。
ULIMIT 値	/etc/default/login ファイルの ULIMIT パラメータは、ご使用のデータベースの中で、最大データベース・ファイル以上であることを確認してください。カーネルの ULIMIT パラメータの値がご使用のシステムに適切な値に設定されていないと、いくつかのファイルが使用できなくなるか、または破損してしまうことがあります。ULIMIT 値は、インストール用に 2113674 ブロック以上に設定してください。このパラメータ値の設定方法については、ご使用のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。
非同期 I/O パッケージ	非同期 I/O パッケージ (UnixWare カーネルに添付) が必要。UnixWare7 の場合は、/dev/async 上の oracle 所有者に書き込み権限があることを確認します。それによって、/etc/conf/node.d/async ファイルを変更してください (man モードを参照) 。

表 1-8 Solaris Intel のオペレーティング・システム要件

ソフトウェア項目	Solaris Intel の要件
オペレーティング・システム	Solaris7 for Intel が必要。C コンパイラはインストールに必須ではありませんが、C のデモ・プログラムをコンパイルするのに必要です。
オペレーティング・システム・パッチ	パッチ 106328-04 パッチ 107440-01
ULIMIT 値の削除	Oracle8 Server をインストールする前に、 <code>/etc/default/login</code> ファイルから ULIMIT の値を含む行を削除する必要があります。 <code>/etc/default/login</code> の ULIMIT のデフォルト値では、Solaris7 をインストールできません。
GUI	Solaris にバンドルされている Motif ランタイム・キットのパッケージ SUNWmfrun が必要。
UNIX カーネル・パラメータの再構成	Oracle8 Server をインストールする前に、UNIX カーネルを再構成する必要があります。UNIX カーネルのデフォルトでは、Oracle8 Server をインストールできません。Solaris Intel カーネル・パラメータの推奨値は、第 2 章の「 Solaris Intel での UNIX カーネル・パラメータ 」を参照してください。

インストールされているオペレーティング・システム・パッケージおよびシステム・パッチを確認するには、次のコマンドを入力します。

DG/UX Intel の場合

```
$ /usr/sbin/dg_sysreport -g dgux
```

SCO UnixWare の場合

```
$ pkginfo
```

NCR MP-RAS および Solaris Intel の場合

```
$ pkginfo -i [package_name]
```

Solaris Intel でオペレーティング・システムに適用されているパッチを表示するには、次のコマンドを入力します。

```
$ showrev -p
```

その他の製品固有の要件

この項では、前項で記述されているハードウェアおよびソフトウェア要件以外の製品固有の情報を説明します。

表 1-9 サーバー、オプションおよびカートリッジの制限事項、要件およびインストールに必要なタスク (DG AViiON の場合)

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle8 Server 8.0.6	なし	インストール前、インストールおよびインストール後のすべてのタスクの実行。
Oracle8 Objects Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Parallel Server Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。 Oracle8 Parallel Server オプションでは DG Cluster 1.23 が必要。	第 2 章の「Oracle Parallel Server オプションのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Oracle Parallel Server オプションのインストール後のタスク」の実行。 注意：移行およびアップグレードの要件は、第 5 章の「アップグレード前のタスクを行う」を参照してください。
Oracle8 Partitioning Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 ConText Cartridge 2.4.6	Oracle8 データベースのインストールが必要。	第 4 章の「Oracle ConText Cartridge のインストール後のタスク」の実行。 注意：移行およびアップグレードの要件は、第 5 章の「アップグレード前のタスクを行う」を参照してください。
Oracle8 Spatial Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Time Series Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	第 4 章の「Oracle8 Time Series Cartridge のインストール後のタスク」の実行。
Oracle8 Image Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Visual Information Retrieval Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。Oracle8 Image Cartridge が必要。	なし
PL/SQL 8.0.6	なし	なし

**表 1-10 サーバー、オプションおよびカートリッジの制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(NCR MP-RAS の場合)**

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle8 Server 8.0.6	なし	インストール前、インストールおよびインストール後のすべてのタスクの実行。
Oracle8 Objects Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Parallel Server Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。 LifeKeeper DLM バージョン 1.03.04.02 が必要。	第 2 章の「Oracle Parallel Server オプションのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Oracle Parallel Server オプションのインストール後のタスク」の実行。 注意：移行およびアップグレードの要件は、第 5 章の「アップグレード前のタスクを行う」を参照してください。
Oracle8 Partitioning Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 ConText Cartridge 2.4.6	Oracle8 データベースのインストールが必要。	第 4 章の「Oracle ConText Cartridge のインストール後のタスク」の実行。 注意：移行およびアップグレードの要件は、第 5 章の「アップグレード前のタスクを行う」を参照してください。
Oracle8 Spatial Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Time Series Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	第 4 章の「Oracle8 Time Series Cartridge のインストール後のタスク」の実行。
Oracle8 Image Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Visual Information Retrieval Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。Oracle8 Image Cartridge が必要。	なし
PL/SQL 8.0.6	なし	なし

**表 1-11 サーバー、オプションおよびカートリッジの制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(SCO UnixWare の場合)**

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle8 Server 8.0.6	なし	インストール前、インストールおよびインストール後のすべてのタスクの実行。
Oracle8 Objects Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Partitioning Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 ConText Cartridge 2.4.6	Oracle8 データベースのインストールが必要。	第 4 章の「 Oracle ConText Cartridge のインストール後のタスク 」の実行。 注意：移行およびアップグレードの要件は、第 5 章の「 アップグレード前のタスクを行う 」を参照してください。
Oracle8 Spatial Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Time Series Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	第 4 章の「 Oracle8 Time Series Cartridge のインストール後のタスク 」の実行。
Oracle8 Image Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Visual Information Retrieval Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。Oracle8 Image Cartridge が必要。	なし
PL/SQL 8.0.6	なし	なし

表 1-12 サーバー、オプションおよびカートリッジの制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(Solaris Intel の場合)

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle8 Server 8.0.6	なし	インストール前、インストールおよびインストール後のすべてのタスクの実行。
Oracle8 Objects Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Partitioning Option 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 ConText Cartridge 2.4.6	Oracle8 データベースのインストールが必要。	第 4 章の「 Oracle ConText Cartridge のインストール後のタスク 」の実行。 注意： 移行およびアップグレードの要件は、第 5 章の「 アップグレード前のタスクを行う 」を参照してください。
Oracle8 Spatial Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Time Series Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	第 4 章の「 Oracle8 Time Series Cartridge のインストール後のタスク 」の実行。
Oracle8 Image Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。	なし
Oracle8 Visual Information Retrieval Cartridge 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。Oracle8 Image Cartridge が必要。	なし
PL/SQL 8.0.6	なし	なし

**表 1-13 Tools 製品およびプリコンパイラ製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(DG AViiON の場合)**

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Java Database Connect (JDBC) 8.0.6 (JDBC OCI Driver および JDBC Thin Driver を含む)	JDK リリース 1.1.7.1 および JDK パッチ jdk_1.1.7.1.p03 が必要。	第 4 章の「JDBC のインストール後のタスク」の実行。
Migration Utility (Oracle7 to Oracle8) 8.0.6	なし	なし
Object Type Translator 8.0.6	なし	なし
Oracle Installer 4.0.3	なし 注意：テンポラリ・ステージ領域はサポートされていません。	なし
Oracle Online Text Viewer 1.0.1	なし	なし
Oracle Server Manager: Line Mode 3.0.6	なし	なし
Pro*COBOL 8.0.6	Micro Focus COBOL 4.1	第 2 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
Pro*COBOL 1.8.28	Micro Focus COBOL 4.1	第 2 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
Pro*C/C++ 8.0.6	ご使用のオペレーティング・システムで提供される C コンパイラ、および EPC C++ バージョン 5.0.1	第 4 章の「Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
Pro*FORTRAN 1.8.28	Edinburgh Portable Compilers' FORTRAN 77 コンパイラ、バージョン 2.7.1	第 4 章の「Pro*FORTRAN プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
SQL*Plus 8.0.6	なし	なし

表 1-14 Tools 製品およびプリコンパイラ製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(NCR MP-RAS の場合)

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Migration Utility (Oracle7 to Oracle8) 8.0.6	なし	なし
Object Type Translator 8.0.6	なし	なし
Oracle Installer 4.0.3	なし 注意：テンポラリ・ステージ領域はサポートされていません。	なし
Oracle Online Text Viewer 1.0.1	なし	なし
Oracle Server Manager: Line Mode 3.0.6	なし	なし
Pro*COBOL 8.0.6	NCR Micro Focus COBOL 4.1 (NCR 3000 シリーズの場合)	第 2 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
Pro*COBOL 1.8.28	Micro Focus COBOL 4.1 (NCR3000 シリーズの場合) 注意：NCR MP-RAS では、LPI COBOL コンパイラで Pro*COBOL 1.8.28 が正常に動作することは保証されていません。	第 2 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
Pro*C/C++ 8.0.6	NCR C/C++ Development Toolkit、SCDE バージョン 3.03	第 4 章の「Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
SQL*Plus 8.0.6	なし	なし

**表 1-15 Tools 製品およびプリコンパイラ製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(SCO UnixWare の場合)**

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Java Database Connect (JDBC) 8.0.6 (JDBC OCI Driver および JDBC Thin Driver を含む)	JDK リリース 1.1.7 が必要	第 4 章の「JDBC のインストール後のタスク」の実行。
Migration Utility (Oracle7 to Oracle8) 8.0.6	なし	なし
Object Type Translator 8.0.6	なし	なし
Oracle Installer 4.0.3	なし 注意：テンポラリ・ステージ領域はサポートされていません。	なし
Oracle Online Text Viewer 1.0.1	なし	なし
Oracle Server Manager: Line Mode 3.0.4	なし	なし
Pro*COBOL 8.0.6	Micro Focus COBOL 4.1	第 2 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
Pro*COBOL 1.8.28	Micro Focus COBOL 4.1	第 2 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Pro*COBOL プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
Pro*C/C++ 8.0.6	UDK Optimizing C Compilation system 7 および UDK C++ Compilation system 7.1.0	第 2 章の「Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール前のタスク」の実行。 第 4 章の「Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
SQL*Plus 8.0.6	なし	なし

表 1-16 Tools 製品およびプリコンパイラ製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(Solaris Intel の場合)

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Java Database Connect (JDBC) 8.0.6 (JDBC OCI Driver および JDBC Thin Driver を含む)	JDK リリース 1.0.2、1.1.1 または 1.1.7	第 4 章の「JDBC のインストール後のタスク」の実行。
Migration Utility (Oracle7 to Oracle8) 8.0.6	なし	なし
Object Type Translator 8.0.6	なし	なし
Oracle Installer 4.0.3	なし 注意：テンポラリ・ステージ領域はサポートされていません。	なし
Oracle Online Text Viewer 1.0.1	なし	なし
Oracle Server Manager: Line Mode 3.0.6	なし	なし
Pro*C/C++ 8.0.6	Solaris Intel Workshop 5.0 からの C コンパイラ・システムおよび Solaris Intel Workshop 4.2 からの C++ コンパイラ・システム	第 4 章の「Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール後のタスク」の実行。
SQL*Plus 8.0.6	なし	なし

**表 1-17 ネットワークおよびシステム管理製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(DG AViiON の場合)**

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle8 Advanced Networking Option: Security - Export Version 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。 ANO 認証アダプタの要件については、 表 1-21 を参照してください。	第 2 章の「Advanced Networking Option (ANO) のインストール前のタスク」 の実行。
Oracle8 Data Gatherer 8.0.6	Oracle Intelligent Agent が必要。	詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。
Oracle8 Parallel Server Management Components 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。 Oracle8 Parallel Server オプションが必要。	第 2 章の「Oracle Parallel Server オプションのインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Parallel Server オプションのインストール後のタスク」 の実行。 詳細は、『Oracle Parallel Server Management for UNIX 構成ガイド』を参照。
Oracle Intelligent Agent 8.0.6	PEER Networks マスター・エージェントおよびカプセル化プログラム (Encapsulator)・エージェント (今回のリリースに含まれている)。	第 4 章の「Oracle Intelligent Agent のインストール後のタスク」 の実行。
Oracle Names Server 8.0.6	なし	第 2 章の「Oracle Names Server のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Names Server のインストール後のタスク (オプション)」 の実行。
Oracle Net8 8.0.6	Net8 Assistant を使用するには、JDK 1.1.7.1 および JDK パッチ jdk_1.1.7.1.p03 が必要。	第 2 章の「Oracle Net8 のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Net8 のインストール後のタスク」 の実行。 注意: 移行およびアップグレードの要件は、 第 5 章の「アップグレード前のタスクを行う」 を参照してください。

表 1-17 ネットワークおよびシステム管理製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(DG AViiON の場合)

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle SPX/IPX Protocol Adapter 8.0.6	<p>ソフトウェア : AViiON システム R3.0 の場合 Netware Transport、DG/UX R4.20 の場合 Netware 3.10 が必要。</p> <p>AViiON システム R3.0 の場合 Netware サービス (オプション) が必要。</p>	第 4 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク」の実行。
Oracle TCP/IP Protocol Adapter 8.0.6	<p>ハードウェア : Ethernet または トークン・リング。</p> <p>ソフトウェア : DG/UX に添付されている TCP/IP ソフトウェア。</p>	<p>第 2 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール前のタスク」の実行。</p> <p>第 4 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク」の実行。</p>

**表 1-18 ネットワークおよびシステム管理製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(NCR MP-RAS の場合)**

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle8 Advanced Networking Option: Security - Export Version 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。 ANO 認証アダプタの要件については、 表 1-21 を参照してください。	第 2 章の「Advanced Networking Option (ANO) のインストール前のタスク」 の実行。
Oracle8 Parallel Server Management Components 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。 Oracle8 Parallel Server オプションが必要。	第 2 章の「Oracle Parallel Server オプションのインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Parallel Server オプションのインストール後のタスク」 の実行。 詳細は、『Oracle Parallel Server Management for UNIX 構成ガイド』を参照。
Oracle Intelligent Agent 8.0.6	なし	第 4 章の「Oracle Intelligent Agent のインストール後のタスク」 の実行。
Oracle Names Server 8.0.6	なし	第 2 章の「Oracle Names Server のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Names Server のインストール後のタスク (オプション)」 の実行。
Oracle Net8 8.0.6	なし 注意: Net8 Assistant は、今回のリリースの NCR MP-RAS ではサポートされていません。	第 2 章の「Oracle Net8 のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Net8 のインストール後のタスク」 の実行。 注意: 移行およびアップグレードの要件は、 第 5 章の「アップグレード前のタスクを行う」 を参照してください。
Oracle TCP/IP Protocol Adapter 8.0.6	ハードウェア: Ethernet またはトークン・リング。 ソフトウェア: MP-RAS バージョン 6.02 の場合 STREAMWARE TCP。	第 2 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク」 の実行。

**表 1-19 ネットワークおよびシステム管理製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(SCO UnixWare の場合)**

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle8 Advanced Networking Option: Security - Export Version 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。 ANO 認証アダプタの要件については、 表 1-21 を参照してください。	第 2 章の「Advanced Networking Option (ANO) のインストール前のタスク」 の実行。
Oracle Intelligent Agent 8.0.6	Peer Networks マスター・エージェントおよびカプセル化プログラム (Encapsulator)・エージェント (今回のリリースに含まれている)。	第 4 章の「Oracle Intelligent Agent のインストール後のタスク」 の実行。
Oracle Names Server 8.0.6	なし	第 2 章の「Oracle Names Server のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Names Server のインストール後のタスク (オプション)」 の実行。
Oracle Net8 8.0.6	Net8 Assistant を使用するには、JRE 1.1.7 が必要。	第 2 章の「Oracle Net8 のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Net8 のインストール後のタスク」 の実行。 注意: 移行およびアップグレードの要件は、 第 5 章の「アップグレード前のタスクを行う」 を参照してください。
Oracle SPX/IPX Protocol Adapter 8.0.6	ハードウェア: Ethernet 接続。 ソフトウェア: UnixWare 7.1.0 の場合 Netware。	第 4 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク」 の実行。
Oracle TCP/IP Protocol Adapter, 8.0.6	ハードウェア: Ethernet または トークン・リンク。 ソフトウェア: UnixWare からの TCP/IP ソフトウェア。	第 2 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク」 の実行。

**表 1-20 ネットワークおよびシステム管理製品の制限事項、要件およびインストールに必要なタスク
(Solaris Intel の場合)**

製品名	制限事項および要件	インストールに必要なタスク
Oracle8 Advanced Networking Option: Security - Export Version 8.0.6	Oracle8 Enterprise Edition のみで使用可能。 ANO 認証アダプタの要件については、 表 1-21 を参照してください。	第 2 章の「Advanced Networking Option (ANO) のインストール前のタスク」 の実行。
Oracle Intelligent Agent 8.0.6	なし	第 4 章の「Oracle Intelligent Agent のインストール後のタスク」 の実行。
Oracle Names Server 8.0.6	なし	第 2 章の「Oracle Names Server のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Names Server のインストール後のタスク (オプション) 」 の実行。
Oracle Net8 8.0.6	Net8 Assistant を使用するには、JDK リリース 1.1.7 が必要。	第 2 章の「Oracle Net8 のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Net8 のインストール後のタスク」 の実行。 注意： 移行およびアップグレードの要件は、 第 5 章の「アップグレード前のタスクを行う」 を参照してください。
Oracle SPX/IPX Protocol Adapter 8.0.6	ハードウェア : Ethernet 接続。 ソフトウェア : Solaris7 の場合 TotalNET Advanced Server5.2。	第 4 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク」 の実行。
Oracle TCP/IP Protocol Adapter 8.0.6	ハードウェア : Ethernet 接続。 ソフトウェア : Solaris Intel からの TCP/IP ソフトウェア。	第 2 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール前のタスク」 の実行。 第 4 章の「Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク」 の実行。

ネットワーク製品のソフトウェア要件

すべてのネットワーク・アダプタには、サポートされたネットワークの基盤となるソフトウェアおよびオペレーティング・システム・ライブラリが必要です。Oracle Net8 製品をインストールする前に、ネットワーク・ソフトウェアをインストールおよび実行してください。詳細は、オペレーティング・システムおよび他社のネットワーク製品のドキュメントを参照してください。Oracle Net8 製品には、今回のリリースで提供される特定リリースの Oracle8 Server および Oracle Net8 が必要です。

表 1-21 に、Advanced Networking Option (ANO) がサポートしている認証アダプタの要件を示します。

表 1-21 ANO がサポートしている認証アダプタの要件

アダプタ	要件
Kerberos	Kerberos リリース 5.4.2 以上。
SecurID	ACE/Server リリース 1.2.4 以上、または Security Dynamics の SecurID カード。
Identix	作成した指紋表とともに、Oracle データベース上で動作する Oracle Biometrix Authentication Server が必要。

その他の認証アダプタのソフトウェアに、Oracle 製品を再リンクする必要はありません。ただし、Oracle は Kerberos または SecurID の認証サーバーを提供していません。そのため、有効な認証サーバーを個別にインストールおよび構成する必要があります。

ディスク領域およびメモリーの要件

インストールする Oracle8 Server の合計サイズは、約 750MB です。単一のマウント・ポイント下にこの容量以上のディスク領域があれば、Oracle8 Server をインストールできます。

今回リリースされた製品を実行するには、64MB 以上の RAM が必要です。システムでこのサイズ以上のメモリーが使用可能であれば、今回リリースされた製品を実行できます。

注意： 750MB のディスク領域には、データベースのサイズは含まれていません。また、64MB の RAM は、今回のリリースの製品を実行するために最低限必要な量です。多数のユーザーをサポートする本番 RDBMS では、これ以上のディスク領域およびメモリーが必要です。

サーバー・マシン上に他の Oracle 製品（たとえば、Developer/2000 や Oracle Application）をインストールする場合、各製品のディスク領域およびメモリーの要件も考慮する必要があります。これらのディスク領域およびメモリーの要件の詳細は、各製品のインストール・ガイドを参照してください。

オペレーティング・システムおよびインストールに固有の問題点および制限事項

Intel UNIX に Oracle8 Server をインストールして使用する場合、次の問題点および制限事項があります。Oracle8 Server リリース 8.0.6 を使用する前に、今回のリリースに付属のリリース・ノートおよび \$ORACLE_HOME/rdbms/doc にある README ファイルを参照してください。Oracle8 Server 配布に含まれる他の製品の README ファイルは、各製品の doc または admin/doc ディレクトリに保存されています。

ファイル・システム

Oracle Server は、ファイルがディスクに書き込まれたことを確認できなければなりません。この確認機能がサポートされていないファイル・システム（UDP プロトコルを基盤とする NFS など）は、Oracle では使用できません。

シングルタスク・プログラムのリンク

シングルタスク・システムでは、ユーザー・プログラム、Oracle カーネルおよびプログラム・インタフェースが同じプロセスの一部として実行されます。このため、ユーザーはシステム・グローバル領域（SGA）にアクセスできるようになり、その領域を破壊する可能性があります。UNIX システムは、1 つのプロセスの中で、ユーザー・プログラムと Oracle プログラムを区別できません。

シングルタスク・プログラムをリンクする場合は、setuid コマンドを使用して実行権を設定しておく、実行時に oracle アカウントのユーザー ID とみなされます。このような場合は、ソース・コードを調べて、データの整合性を確認してください。また、アプリケーションのソース・コードも調べて、セキュリティ面で危険がないことを確認してください。

Oracle7 からの移行

今回のリリースには、Migration Utility が含まれています。Migration Utility を使用すると、Oracle7 Server リリース 7.1.4 以上から Oracle8 Server へ移行できます。リリース 7.0 のデータベースから Oracle8 へ移行する場合は、この Migration Utility を使用できません。

最適フレキシブル・アーキテクチャ

Installer を使用して新規のインストールおよびデータベースの作成を行う場合、たとえば Installer が ORACLE_BASE 値の入力を要求するなど、最適フレキシブル・アーキテクチャ（OFA）の基準に従って実行されます。OFA 以外の構造を作成する必要がある場合、ユーザーは ORACLE_BASE に ORACLE_HOME と同じ値を指定できます。

参照： OFA の詳細は、『Oracle8 for Intel UNIX (DG/UX Intel , NCR MP-RAS , SCO UnixWare , Solaris Intel) 管理者リファレンス』の第 1 章を参照してください。

サイズが大きなファイル

Oracle8 では、2GB を超える大きなサイズのファイルが扱えます。

リリース 8.0.6 の新製品および機能

Oracle Information Navigator

Oracle Information Navigator は、Oracle ドキュメント CD-ROM で提供される Java ベースの検索およびナビゲーション・ユーティリティです。Java が使用できるブラウザを使用すれば、`index.htm` ファイルをオープンすると、Information Navigator が自動的に起動されます。Information Navigator は、CD-ROM から参照するか、インストールしたファイルから参照するかに関わらず、Oracle 製品ドキュメントで使用できます。オペレーティング・システム固有のドキュメントは、オペレーティング・システム固有のドキュメントおよび製品ドキュメントの両方がインストールされている場合にのみ、Information Navigator からアクセスできます。

Oracle8 JDBC ドライバ

Oracle8 Java Database Connectivity (JDBC) ドライバは、JavaSoft で定義された標準の JDBC インタフェースを実現します。Oracle は、JDBC ドライバの 2 つのカテゴリを提供しています。Java アプレットおよびアプリケーションには JDBC Thin、Java アプリケーションには JDBC OCI です。詳細は、『Oracle8 JDBC Drivers』を参照してください。JDBC ドライバの使用法の詳細は、`$ORACLE_HOME/jdbc/doc/README.doc` を参照してください。

Oracle8 Object Option

Oracle8 Object Option を使用すると、データを表示、アクセスおよび処理したり、業務オブジェクトとして保存したりできます。

Oracle8 Partitioning Option

Oracle8 Partitioning Option を使用すると、パーティション、表および索引を定義できます。

Oracle8 Time Series Cartridge

Oracle8 Time Series Cartridge は、Oracle8 Enterprise Edition の拡張機能です。Oracle8 Time Series Cartridge を使用すると、連続した時間のデータを特定のカートリッジの作成者も含めて、Oracle データベースに保存、検索および処理できます。

Oracle8 Visual Information Retrieval Cartridge

Oracle8 Visual Information Retrieval Cartridge は、Oracle8 Enterprise Edition の拡張機能です。Oracle8 Visual Information Retrieval Cartridge を使用すると、イメージ・データを特定のイメージ・カートリッジの作成者も含めて、Oracle データベースに保存、検索および処理できます。

DG AViiON システムでの新パフォーマンス機能

間接データベースのバッファ機能によって、Oracle SGA は、シングル・プロセスのメモリ制限に関係なくサイズを増やせます。詳細は、『Oracle8 for Intel UNIX (DG/UX Intel , NCR MP-RAS , SCO UnixWare , Solaris Intel) 管理者リファレンス』の第 3 章の「間接データベースのバッファ (DG/UX Intel および SCO UnixWare の場合)」を参照してください。

Oracle Data Gatherer は、Oracle Intelligent Agent の一部として提供されます。Oracle Data Gatherer は、Oracle Enterprise Manager のコンソールで実行する Oracle Diagnostic Pack に必要なサーバー側のコンポーネントを提供します。

次に、リリース 8.0.6 で DG NUMA システムのパフォーマンスを向上させるための改善点を示します。

- DG NUMA システムでは、Oracle Parallel Server オプションがサポートされています。
- データベースのパフォーマンスを最適化するために、すべての NUMA ブロックにデータベース・バッファの垂直ストライプ化が行われます。
- データベースのパフォーマンスを最適化するために、Oracle SGA (データベース・バッファを除く) の水平ストライプ化が行われます。
- ホストベースのアプリケーションのパフォーマンスを最適化するために、同一の NUMA ブロックに対してクライアントおよびサーバーが関連付けられます。

Oracle7 からの製品の変更

Oracle8 Server で配布されたすべての製品は、リリース 7.3 から変更されたものです。次に、インストールに関連する変更について示します。

ConText オプション

Oracle ConText オプションは、Oracle ConText Cartridge に変更されました。

Oracle Parallel Server

分散ロック・マネージャ (DLM) は、Oracle Parallel Server の一部になりました。他社からは提供されません。

Oracle8 Server

Oracle8 Server には、次のサーバー・オプションの機能が含まれています。

- Advanced Replication
- 分散データベース
- Parallel Query

これらのサーバー・オプションは、Oracle8 Server とともにインストールされます。これらの製品のライセンスについては、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

オンライン・ドキュメント

オンライン・ドキュメントは、HTML 形式で提供されます。Oracle*Book 形式では提供されていません。システムにブラウザをインストールしていない場合、今回のリリースに含まれているブラウザの 1 つを使用することができます (キャラクタ・モードおよび Motif モードの両方を提供)。

Spatial Data オプション

Spatial Data オプションは、Spatial Data Cartridge に変更されました。

SQL*Net

SQL*Net ファミリは、Oracle Net8 に変更されました。バージョン番号は、Oracle8 Server のリリース・レベルに合わせて 8.0.6 です。

Oracle7 からの製品の削除

次の製品は、Oracle Server にバンドルされていません。そのため、削除する必要はありません。

Enterprise Backup Utility

バックアップおよびリカバリ機能は、Recovery Manager として Oracle8 Server へ統合されています。

Multi-Protocol Interchange

Multi-Protocol Interchange の機能は、Oracle Net8 の一部としてインストールされた Oracle Connection Manager に含まれています。

Network Manager

Network Manager は、Oracle Server 配布では提供されていません。Oracle Net8 は、JAVA ベースの構成ツールである Net8 Assistant を含んでいます。

注意：Net8 Assistant は、現在、NCR MP-RAS システムでは使用できません。NCR MP-RAS システムの場合は、NT システムから Net8 Assistant を実行する必要があります。

Oracle*XA Library

Oracle*XA Library の機能は、分散データベース・オプション (Oracle8 Server とともにインストールされている) に含まれています。

Oracle SPX/IPX V2 Adapter

SQL*Net SPX/IPX V2 Adapter は、NCR MP-RAS では提供されていません。

Pro* Precompilers

次のプリコンパイラは、Oracle8 Server 配布には含まれていません。

- Pro*Ada

Server Manager (Motif モード)

Server Manager は、Motif モードで提供されていません。ライン・モードで提供されていません。

SQL*Module for Ada

SQL*Module for Ada は、提供されていません。

SQL*Module for C

SQL*Module for C は、提供されていません。

環境設定

この章では、Oracle8 Server をインストールする環境設定について説明します。環境設定を始める前に、第 1 章「要件および機能」で説明した要件がシステムが満たしていることを確認してください。

- UNIX 環境の設定
- root ユーザーで行うタスク
- oracle ユーザーで行うタスク
- 個々の Oracle 製品の設定タスク

注意： Oracle Server がすでにインストールされている場合は、第 5 章「アップグレードおよび移行」に進んでください。

UNIX 環境の設定

表 2-1 に、Oracle8 Server のインストールに必要な環境設定の要件を示します。ご使用のシステムの環境が、記載されている要件のいずれかを満たさない場合は、必要に応じて 2-4 ~ 2-17 ページに記載されているタスクを行ってください。

表 2-1 UNIX 環境設定の要件

環境設定項目	要件
UNIX カーネル・パラメータ	詳細は、表 2-2 ~ 2-9 を参照してください。
マウント・ポイント (記憶デバイス)	ディレクトリ構造の同一レベルにある、4 つ以上のマウント・ポイント。ソフトウェア用に 1 つ、OFA 準拠のデータベース用に 3 つ以上必要です。
Oracle ロール用の UNIX グループ	OSDBA ロール用に 1 つの UNIX グループが必要です。UNIX グループ名は、通常 dba です。OSOPER ロールは、OSDBA と同一のグループですが、異なるグループに属していることもあります。
UNIX アカウント	Oracle システムのインストールおよびアップグレード専用、1 つの UNIX アカウントが必要です。このアカウントは、OSDBA のグループのメンバーである必要があります。
ローカル bin ディレクトリ	oracle ユーザー間で所有するソフトウェア用のディレクトリ。このディレクトリのデフォルトは、次のとおりです。 DG/UX Intel の場合 : /usr/bin NCR MP-RAS の場合 : /opt/bin SCO UnixWare の場合 : /opt/bin Solaris Intel の場合 : /usr/bin
oratab ファイル	Oracle インスタンスの情報。
ファイル作成の権限	umask を 022 に設定します。
DISPLAY	サーバー・マシンに接続するマシン名およびステーションのモニターを設定します。
LD_LIBRARY_PATH	共有ライブラリを使用する Oracle 製品に必要です。必ず次の行を含めてください。 DG/UX Intel の場合 : \$ORACLE_HOME/lib NCR MP-RAS の場合 : \$ORACLE_HOME/lib:/usr/ccs/lib SCO UnixWare の場合 : \$ORACLE_HOME/lib Solaris Intel の場合 : \$ORACLE_HOME/lib

表 2-1 UNIX 環境設定の要件

環境設定項目	要件
ORACLE_BASE	必須ではありませんが、OFA 準拠のインストールの一部として設定することをお勧めします。詳細は、2-19 ページを参照してください。
ORACLE_HOME	Oracle ソフトウェアがインストールされるディレクトリを設定します。
ORACLE_SID	Oracle Server のインスタンス名または <i>sid</i> を指定します。同じマシンで実行される複数の Oracle インスタンスについては、一意でなければなりません。4 文字以内の英数字で指定することをお勧めします。
ORACLE_TERM	キャラクタ・モードおよび Motif モードの Oracle 製品すべてを使用する場合に必要です。許容値の詳細は、表 2-11 を参照してください。
ORA_NLS33	US7ASCII 以外のキャラクタ・セットでデータベースを作成するときに必要。 \$ORACLE_HOME/ocommon/nls/admin/data を設定します。
PATH	検索パスには次のすべてを設定してください。 \$ORACLE_HOME/bin、/bin、/opt/bin、/usr/bin、 /usr/ccs/bin 注意： 検索パスに /usr/ucb を入れる場合は、/usr/ccs/bin の後に指定してください。
SRCHOME	Installer の実行時には未定義でなければなりません。SRCHOME を設定すると、Installer はデフォルトでそのディレクトリからソフトウェアをインストールします。
TWO_TASK	Oracle8 Server のインストール時には未定義でなければなりません。詳細は、2-21 ページを参照してください。
TMPDIR	oracle アカウントに書き込み権限があり、100MB 以上の空き領域があるディレクトリ。このディレクトリのデフォルトは、次のとおりです。 DG/UX Intel の場合 : /tmp NCR MP-RAS の場合 : /var/tmp SCO Unixware の場合 : /var/tmp Solaris Intel の場合 : /var/tmp

root ユーザーで行うタスク

Oracle8 Server 用の環境を設定するには、root ユーザーでログインして、次のタスクを行います。

- ❑ Oracle 用に UNIX カーネルを構成する
- ❑ マウント・ポイントを作成する
- ❑ データベース管理者用の UNIX グループを作成する
- ❑ oracle ソフトウェア所有者の UNIX アカウントを作成する
- ❑ ローカル bin ディレクトリを作成する
- ❑ oratab ファイルを作成する

▶▶ Oracle 用に UNIX カーネルを構成する

UNIX カーネル・パラメータが Oracle データベースの要件を満たすように構成します。さまざまなサブシステムに対応するカーネル・パラメータ（プロセス・マネージメント、プロセス間通信および入出力を含む）は、Oracle データベースが正常に動作するようにチューニングする必要があります。

DG/UX Intel 用の UNIX カーネル・パラメータ

1. カーネル・パラメータを、ご使用のシステムの適切な構成ファイルに設定します。表 2-2 および表 2-3 に示すパラメータは、Oracle データベースが正常に動作するようにチューニングする必要があります。この値は、できるだけ大きく設定することをお薦めします。

表 2-2 DG/UX Intel 用の UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
SHAMAX	8 MB	共有メモリー・セグメントの最大サイズ
SHMMNI	SYSTEM DEFAULT	共有メモリーの識別子の数。
SHMSEG	SYSTEM DEFAULT	プロセスによって割り当てられる共有メモリー・セグメントの最大数。
SEMMNI	SYSTEM DEFAULT	システムのセマフォ・セット識別子の数。 SEMMNI は、同時作成されるセマフォ・セットの数を定義します。
NPROC	$20 + (8 \times \text{MAXUSERS})$ 最大値は 21845	プロセスの最大数。 $20 + (8 \times \text{MAXUSERS})$ の式で最大 21845 まで設定できます。
PERCENTBUF	SYSTEM DEFAULT	データファイル（プログラム以外のファイル）が占める物理メモリーの割合の最大値。 注意： ファイルシステムベースの大規模データベース・ファイルをご使用の場合は、このパラメータの値を大きく設定することによって、パフォーマンスが向上することがあります。
SDESLIM	$50 + (\text{データベース・ファイルの総数})$	1 つのプロセスで同時に使用できる記述子の数。
PERCENT-LOCKABLE	SYSTEM DEFAULT	ユーザー・プロセスがロックできる物理メモリーの割合の最大値。 注意： Fast Path I/O 機能を使用する場合は、このパラメータの値を大きく設定してください。

表 2-3 DG/UX Intel での UNIX カーネルの共有メモリー・パラメータ

パラメータ	システム・メモリー構成						
	64MB	128MB	256MB	512MB	1024MB	2048MB	4096MB
SHMMAX	16MB	32MB	64MB	128MB	256MB	512MB	512MB

注意： Oracle Parallel Server をインストールするには、SHMMAX の値を 32MB 以上に設定してください。

initsid.ora ファイルのパラメータ LOG_BUFFER および DB_BLOCK_BUFFERS に設定した値が大きすぎると、SGA が PERCENTLOCKABLE に設定した値より大きくなります。この場合、次のエラー・メッセージが表示されます。

DBWR: MC_LOCK error on segment: x, error: 11,
Resource temporarily unavailable
Cannot MC_LOCK SGA pages. Process aborted - exiting

このエラー・メッセージが表示された場合は、PERCENTLOCKABLE の値を大きく設定してください。

注意： システム管理ユーティリティ sysadm の「System」オプションから、Kernel、Build を選択してください。DG/UX システム・モデルの詳細は、DG カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

- 2. ご使用のシステムの構成、およびデータベースの使用計画によっては、他にもパラメータを設定する必要があります。
- 3. カーネル・パラメータを構成した後、システムを再起動します。

NCR MP-RAS 用の UNIX カーネル・パラメータ

1. カーネル・パラメータを、ご使用のシステムの適切な構成ファイルに設定します。表 2-4 および表 2-5 に示すパラメータは、Oracle データベースが正常に動作するようにチューニングする必要があります。この値は、できるだけ大きく設定することをお勧めします。

表 2-4 NCR MP-RAS 用の UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
パラメータ・ファイル： /etc/conf/cf.d/stune		
ARG_MAX	32768	あるプログラムのコマンド行の最大長を指定します。デフォルトは 5KB です。 Oracle アプリケーションでは、このパラメータに大きい値を設定する必要があります。
NPROC	4096	システム全体で作成することができるプロセスの最大数。システムの利用者が新しいプロセスを実行できない場合は、この値を大きくします。
NPBUF	4000	指定したときにアクティブにできる RAW I/O 要求の最大数。
MAXUP	256	指定したユーザーが作成することができるプロセス数の制限。リモート・クライアントが、Net8 を使用してデータベース・サーバーに接続する場合、このパラメータには、予想される同時接続の最大数より大きい値を設定します。
NAIOSYS	各インスタンスに 512	/etc/conf/cf.d/mtune ファイルに設定されている NAIOSYS の制限値は、現在、非常に小さい値に設定されています。 stune の値を大きくできるように、mtune の値を増やす必要があります。NCR MP-RAS システム・モデルの詳細は、NCR カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。
SDATLIM	0x7FFFFFFF	各プロセスのヒープ・サイズ。ヒープ領域とは、すべてのランタイム・メモリーが置かれている場所です。ヒープ領域は、Oracle カーネルとその他の実行ファイルをリンクできるように大きくする必要があります。

表 2-4 NCR MP-RAS 用の UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
HDATLIM	0x7FFFFFFF	SDATLIM と同じ。
SVMMLIM	0x7FFFFFFF	ファイルをメモリーにマップするために割り当てられるメモリーの量。Oracle 実行ファイルを再リンクするために、このパラメータには 0x7FFFFFFF を設定してください。
HVMMLIM	0x7FFFFFFF	SVMMLIM と同じ。
SFSZLIM	0x7FFFFFFF	ファイル・サイズの制限。ファイル・システムでデータベース・ファイルを作成する場合は、必ずこのパラメータには 0x7FFFFFFF を設定してください。
HFSZLIM	0x7FFFFFFF	SFSZLIM と同じ。
STRTHRESH	0x500000	Stream の場合。
HFNOLIM	0X400	プロセスで指定できるファイル記述子 (オープン・ファイル) の最大数。
SFNOLIM	0X400	プロセスで指定できるファイル記述子 (オープン・ファイル) の最大数。
SEMMAP	1024	後述の注意を参照。
SEMMSL	10 以上	1 つのセマフォ・セット内のセマフォの最大数。
SEMMNS	1024	後述の注意を参照。
SEMMNU	1024	後述の注意を参照。
SEMMNI	1024	後述の注意を参照。
SHMSEG	15	プロセスによって割り当てられる共有メモリー・セグメントの最大数。
SHMMIN	1	1 つの共有メモリー・セグメントの最小サイズ (バイト単位)。
SHMMNI	100	システム内で常にアクティブになっている共有メモリー識別子の最大数。

表 2-4 NCR MP-RAS 用の UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
パラメータ・ファイル： /etc/default/login		
ULIMIT	制限なし	デフォルトのログイン・ファイル (/etc/default/login) で、ULIMIT の値を、作成する必要がある最も大きいデータベース・ファイル・サイズ (単位はバイト) より大きい値に設定するか、またはすべての値の設定を解除します。

注意： Oracle では、パフォーマンスを改善するために、セットごとに単一セマフォ方式を実現しました。SEMMAP、SEMMNI、SEMMNS および SEMMNU が、セマフォの動作に影響します。これらすべての値を 1024 以上に設定してください。Oracle インスタンスの起動時に、作成したセマフォ・セットの数が `initSID.ora` ファイルの PROCESSES パラメータによって決まります。ただし、その値が 1024 を超えることはありません。複数の Oracle インスタンスを実行中の場合は、次の式を使用して、SEMAP、SEMMNI、SEMMNS および SEMMNU に設定する値を計算します。

$$100 + (\text{initSID.ora ファイルにある各インスタンスの PROCESSES パラメータの値 (最大 1024) の合計})$$

NCR MP-RAS システムで Oracle データベースを実行中に `ipcs -s` コマンドを実行すると、複数のアクティブ・セマフォ・セットが表示されます。

表 2-5 NCR MP-RAS での UNIX カーネルの共有メモリー・パラメータ

パラメータ	システム・メモリー構成						
	64MB	128MB	256MB	512MB	1024MB	2048MB	4096MB
SHMMAX	16MB	32MB	64MB	128MB	256MB	512MB	512MB

注意： NCR MP-RAS では、`/etc/conf/cf.d/stune` ファイルを編集して、UNIX カーネル・パラメータのデフォルト値を変更する必要があります。

警告： 指定したパラメータが取り得る値の最大値が
/etc/conf/cf.d/stune ファイルで指定する値より小さい場合は、
/etc/conf/cf.d/mtune ファイルを変更してください。NCR MP-RAS
システム・モデルの詳細は、NCR カスタマ・サポート・センターにお問
い合ってください。

- 2. ご使用のシステムの構成、およびデータベースの使用計画によっては、他にもパラメータを設定する必要があります。
- 3. カーネル・パラメータを構成した後、システムを再起動します。

SCO UnixWare での UNIX カーネル・パラメータ

- 1. カーネル・パラメータを、ご使用のシステムの適切な構成ファイルに設定します。表 2-6 および表 2-7 に示すパラメータは、Oracle データベースが正常に動作するようにチューニングする必要があります。この値は、できるだけ大きく設定することをお勧めします。

表 2-6 SCO UnixWare での UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
SHMMAX	2147483647	1 つの共有メモリー・セグメントの最大サイズ（バイト単位）。パフォーマンスを最大限に向上させるには、SGA 全体が収まるほどの大きさに設定します。
SHMMNI	100	共有メモリーの識別子の数。
SHMSEG	15	プロセスによって割り当てられる共有メモリー・セグメントの最大数。
SEMMNI	100	セマフォ・セット識別子の数。SEMMNI は、同時作成されるセマフォ・セットの数を定義します。
SEMMSL	150	1 つのセマフォ・セット内のセマフォの最大数。Oracle プロセスの最大数以上に設定します。

表 2-6 SCO UnixWare での UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
SCORLIM	0X7FFFFFFF	コア・ダンプ・サイズのソフト制限。
HCORLIM	0X7FFFFFFF	コア・ダンプ・サイズのハード制限。ご使用のシステムで設定できる最大値を設定します。
SDATLIM	0X7FFFFFFF	プロセスのヒープ領域。このパラメータには、設定できる最大値を設定します。
HDATLIM	0X7FFFFFFF	SDATLIM と同じ。
SVMMLIM	0X7FFFFFFF	プロセスの仮想メモリー・サイズ。このパラメータには、設定できる最大値を設定します。
DEDICATED_MEMORY	なし	特定の共有メモリー・セグメントに予約されている 4K ページの物理メモリーの数。ご使用のシステムが、大きな物理メモリーを使用している場合に設定します。
HVMMLIM	0X7FFFFFFF	SVMMLIM と同じ。
SFSZLIM	0X7FFFFFFF	プロセスで指定できるファイル・サイズの最大値。このパラメータには、設定できる最大値を設定します。
HFSZLIM	0X7FFFFFFF	SFSZLIM と同じ。
HFNOLIM	2048	プロセスで指定できるファイル記述子 (オープン・ファイル) の最大数。
SFNOLIM	1024	プロセスで指定できるファイル記述子 (オープン・ファイル) の最大数。
NPROC	20 + (8 × MAXUSERS) 最大値は 12500	プロセスの最大数。 20 + (8 × MAXUSERS)。最大値は 12500。
ARG_MAX	1,048,576	あるプログラムのコマンド行の最大長を指定します。デフォルトは、5KB です。Oracle アプリケーションでは、このパラメータに大きい値を設定する必要があります。
NPBUF	100	指定したときにアクティブにできる RAW I/O 要求の最大数。
MAXUP	1000	指定したユーザーが作成することができるプロセス数の制限。リモート・クライアントが、SQL*Net V2 を使用してデータベース・サーバーに接続する場合、このパラメータには、予想される同時接続の最大数より大きい値を設定します。

表 2-6 SCO UnixWare での UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
STRTHRESH	0x500000	Stream リソースの場合に、システムに割り当てられるバイトの最大値。
ULIMIT	制限なし	デフォルトのログイン・ファイル (/etc/default/login) で、ULIMIT の値を、作成する必要がある最も大きいデータベース・ファイル・サイズ (単位はバイト) より大きい値に設定するか、またはすべての値の設定を解除します。

表 2-7 SCO UnixWare での UNIX カーネルの共有メモリー・パラメータ

パラメータ	システム・メモリー構成						
	64 MB	128 MB	256 MB	512 MB	1024 MB	2048 MB	4096 MB
SHMMAX	16 MB	32 MB	64 MB	128 MB	256 MB	512 MB	512 MB

init_{sid}.ora ファイルのパラメータ LOG_BUFFER および DB_BLOCK_BUFFERS に設定した値が大きすぎると、SGA が PERCENTLOCKABLE に設定した値より大きくなります。この場合、次のエラー・メッセージが表示されます。

DBWR: MC_LOCK error on segment: x, error: 11,
Resource temporarily unavailable
Cannot MC_LOCK SGA pages. Process aborted - exiting

注意： このエラー・メッセージが表示された場合は、PERCENTLOCKABLE の値を大きく設定してください。

- 2. ご使用のシステムの構成、およびデータベースの使用計画によっては、他にもパラメータを設定する必要があります。

3. カーネル・パラメータを構成した後、システムを再起動します。

注意： SCO UnixWare では、`id tune` コマンドを使用して、`/etc/conf/cf.d/stune` ファイルを編集して、UNIX カーネル・パラメータのデフォルト値を変更する必要があります。`id build(1M)` を使用して、カーネルを再構成します。

警告： 指定したパラメータが取り得る値の最大値が `/etc/conf/cf.d/stune` ファイルで指定する値より小さい場合は、`/etc/conf/cf.d/mtune` ファイルを変更してください。すべてのパラメータが `mtune` で変更できるわけではありません。たとえば、`SHMMAX` を変更すると、システムに問題が起きます。詳細は、オペレーティング・システムのカスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

Solaris Intel での UNIX カーネル・パラメータ

1. カーネル・パラメータを、ご使用のシステムの適切な構成ファイルに設定します。表 2-8 および表 2-9 に示すパラメータは、Oracle データベースが正常に動作するようにチューニングする必要があります。この値は、できるだけ大きく設定することをお勧めします。

表 2-8 Solaris Intel での UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
SHMMAX	33,554,432	1 つの共有メモリー・セグメントの最大サイズ（バイト単位）。パフォーマンスを最大限に向上させるには、SGA 全体が収まるほどの大きさに設定します。
SHMMNI	100	共有メモリーの識別子の数。
SHMSEG	10	プロセスによって割り当てられる共有メモリー・セグメントの最大数。
SEMMNI	70	セマフォ・セット識別子の数。
SEMMNS	1750	システムのセマフォ数。Oracle プロセスの最大数以上に設定します。

表 2-8 Solaris Intel での UNIX カーネル・パラメータ

パラメータ	推奨値	説明
ULIMIT	制限なし	512 バイトのブロック内で設定できるファイル・サイズ。どのデータベース・ファイルよりも大きい値を設定します。
SCORLIM	0X7FFFFFFF	コア・ダンプ・サイズのソフト制限。
HCORLIM	0X7FFFFFFF	コア・ダンプ・サイズのハード制限。ご使用のシステムで設定できる最大値を設定します。
SEMMSL	25	1 つのセマフォ・セット内のセマフォの最大数。Oracle プロセスの最大数と等しい値に設定します。
NPROC	20 + (8 × MAXUSERS) 最大値は 21845	プロセスの最大数。 20 + (8 × MAXUSERS)。最大値は 21845。

表 2-9 Solaris Intel での UNIX カーネルの共有メモリー・パラメータ

パラメータ	システム・メモリー構成						
	64MB	128MB	256MB	512MB	1024MB	2048MB	4096MB
SHMMAX	16MB	32MB	64MB	128MB	256MB	512MB	512MB

- 2. ご使用のシステムの構成、およびデータベースの使用計画によっては、他にもパラメータを設定する必要があります。
- 3. `/etc/system` を編集して UNIX カーネル・パラメータのデフォルト値を変更し、マシンを再起動します。

■ マウント・ポイントを作成する

OFA 準拠のインストールを行う場合、Oracle8 Server では 4 つ以上（ソフトウェア用に 1 つ、データベース・ファイル用に 3 つ以上）のマウント・ポイントが必要です。

Oracle で使用するすべてのソフトウェアおよびデータベースのマウント・ポイント名は、/pm という形式で設定します。この場合、p は文字列定数、m は複数のマウント・ポイントを区別するための固定長キーです。表 2-10 に、ネーミング計画の例を示します。

表 2-10 マウント・ポイント・ネーミング計画の例

ソフトウェアのマウント・ポイント	データベースのマウント・ポイント
/u01	/u02
	/u03
	/u04

参照：OFA の詳細は、『Oracle8 for Intel UNIX (DG/UX Intel , NCR MP-RAS , SCO UnixWare , Solaris Intel) 管理者リファレンス』の第 1 章を参照してください。

■ データベース管理者用の UNIX グループを作成する

Installer は、インストール時に Oracle DBA 権限および OPERATOR 権限を UNIX グループに割り当てます。Oracle のドキュメントでは、これらの UNIX グループを OSDBA グループおよび OSOPER グループと呼びます。これらのグループのメンバーは、UNIX グループのメンバーになっていることによって、Oracle システム上での DBA 権限または OPERATOR 権限が与えられます。これらのロールを持つグループは、Installer を起動する前に作成しておく必要があります。

Intel UNIX では、dba というグループを作成するユーティリティは、プラットフォーム固有です。

DG/UX Intel の場合 : sysadm ユーティリティ

NCR MP-RAS の場合 : groupadd ユーティリティ

SCO UnixWare の場合 : scoadmin ユーティリティ

Solaris Intel の場合 : admintool ユーティリティ

グループ名は dba 以外にすることもできますが、その場合、Installer は Oracle 実行ファイルを再リンクします。OSOPER グループ用に別のグループを指定する場合は、そのグループも作成しておく必要があります。

OSDBA として指定するグループは、OSOPER グループのデフォルトになります。このデフォルトを指定した場合、OPERATOR ロールの権限はすでにグループに割り当てられた DBA 権限に含まれているため、事実上 OPERATOR ロールは存在しません。

▶ oracle ソフトウェア所有者の UNIX アカウントを作成する

oracle アカウントは、Oracle を所有する UNIX アカウントです。Installer は、このアカウントで実行する必要があります。

Intel UNIX では、oracle アカウントを作成するために使用するオペレーティング・システム管理ユーティリティは、プラットフォーム固有です。

DG/UX Intel の場合 : sysadm ユーティリティ

NCR MP-RAS の場合 : useradd ユーティリティ

SCO UnixWare の場合 : scoadmin ユーティリティ

Solaris Intel の場合 : admintool ユーティリティ

次のプロパティを含める必要があります。

ログイン名	任意。このドキュメントでは oracle とします。
デフォルト GID	OSDBA グループに対応する GID を設定します。
ホーム・ディレクトリ	他のユーザーのホーム・ディレクトリとの間で一貫性のあるホーム・ディレクトリを選択します。oracle アカウントのホーム・ディレクトリは、ORACLE_HOME ディレクトリと同一である必要はありません。
ログイン・シェル	デフォルトは /bin/sh、/bin/csh または /bin/ksh のいずれかです。ただし、このドキュメントの例では Bourne シェル (/bin/sh) を想定しています。

注意： oracle アカウントを使用するのは、Oracle ソフトウェアをインストールおよびメンテナンスする場合のみです。Oracle Server と関係ない目的では使用しないでください。oracle (UNIX) アカウントを使用する場合は、データベース・ユーザーとしてログインしないでください。

複数の Oracle Server が存在するサイトでは、同一の oracle アカウント、または別々の oracle アカウントで Oracle Server をインストールできます。複数のインストールが oracle アカウントを共有する場合、各インストールの DBA は、他のインストールにもアクセスできます。これによってセキュリティの問題が発生する場合は、各 Oracle システムを別々の oracle アカウントでインストールしてください。

» ローカル bin ディレクトリを作成する

複数の oracle ユーザーが環境を共有すると、システム管理が非常に簡単になります。環境を共有するためには、ORACLE_HOME ディレクトリ以外に、共有ソフトウェア用のローカル bin ディレクトリを作成します。

1. ローカル bin ディレクトリ（たとえば /usr/bin）を作成します。
2. 各ユーザーの PATH にこのディレクトリが設定され、ユーザーがディレクトリに対して実行権限を持っていることを確認します。

Installer は、\$ORACLE_HOME/bin に oraenv（C シェルの場合は coraenv）および dbhome スクリプトを作成します。インストール後、root.sh スクリプトはこれらのファイルを /usr/bin ディレクトリにコピーします。root ユーザーで Installer を実行してはいけないため、Installer はファイルを直接 /usr/bin ディレクトリに置くことができません。

oraenv（coraenv）および dbhome をローカル bin ディレクトリにコピーすると、検索パスが別の ORACLE_HOME ディレクトリを指すように変更されても、共有環境が確保できます。

他のソフトウェアにすべてのユーザーがアクセスできるようにする場合も、そのソフトウェアをローカル bin ディレクトリに置きます。

» oratab ファイルを作成する

Oracle インスタンスの情報は、NCR MP-RAS、SCO UnixWare および Solaris Intel の場合、/var/opt/oracle/oratab ファイルに格納されます。oratab ファイルを作成するには、root でログインします。ただし、oracle ユーザーは、oratab ファイルを所有している必要があります。cdrom_mount_point/orainst/oratab.sh スクリプトを実行して、/var/opt/oracle ディレクトリに oratab ファイルの権限を作成または設定します。

DG/UX Intel の場合は、/etc ディレクトリに oratab ファイルを作成します。

oracle ユーザーで行うタスク

oracle アカウントでログインして、次のタスクを行います。

- ❑ ファイル作成の権限を設定する
- ❑ 環境変数を設定する
- ❑ 現行セッションの環境を更新する

❧ ファイル作成の権限を設定する

Installer が作成するファイルに対して、グループおよびその他のユーザーには読み権限および実行権限のみを与え、書き込み権限を与えないように、umask を 022 に設定します。

1. umask コマンドを実行して、現在の設定を確認します。
2. umask コマンドが 022 を返さない場合は、oracle アカウントの .profile または .login ファイルに次のように記述します。

```
umask 022
```

❧ 環境変数を設定する

Installer を起動する前に、oracle アカウントの .profile または .login ファイルに次の環境変数を設定します。環境変数を設定する構文は次のとおりです。

Bourne シェルの場合は、次のように入力します。

```
variable_name=value; export variable_name
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
setenv variable_name value
```

注意： 環境変数名には、Oracle プロセスで使用される名前（たとえば、CKPT、PMON、DBWR）と異なる名前を定義してください。

LD_LIBRARY_PATH

共有ライブラリを使用する Oracle 製品を使用する場合に必要です。LD_LIBRARY_PATH には、\$ORACLE_HOME/lib、および Motif ライブラリが格納されているディレクトリを設定してください。Motif ライブラリのデフォルトは、/usr/lib です。

LD_LIBRARY_PATH には、/usr/ucb/lib を含めないことをお勧めします。
/usr/ucb/lib を LD_LIBRARY_PATH に入れる場合は、/usr/ccs/lib の後に指定してください。

ORACLE_BASE

Oracle ソフトウェアおよび管理ファイル構造の一番上にあるディレクトリを指定します。
OFA 推奨値は、*software_mount_point/app/oracle* です。

例: /u01/app/oracle

ORACLE_HOME

特定の Oracle Server リリースの Oracle ソフトウェアをインストールするディレクトリを指定します。OFA 推奨値は、\$ORACLE_BASE/product/release です。

例: /u01/app/oracle/product/8.0.6

ORACLE_SID

Oracle システム識別子、または *sid* (Oracle Server インスタンスの名前) を指定します。*sid* は多くのファイルのファイル名の一部として使用されるので、他のシステムでファイル名の問題が起きるのを回避するために、4 文字以内で設定してください。

ORACLE_TERM

Installer や他の Oracle 製品とともに使用する端末定義リソース・ファイルを指定します。表 2-11 に、各端末タイプおよびそれに対応する ORACLE_TERM の設定を示します。

表 2-11 ORACLE_TERM の設定

端末タイプ	ORACLE_TERM の設定
SCO 用の ANSI 端末	ansi
AT386 コンソール	386
AT386 xterm	386x
UnixWare 端末	386u
Solaris x86 xterm	386s
Data General 200	dgd2
Data General 400	dgd4
IBM 高機能端末および aixterm (カラー)	hftc
IBM 高機能端末および aixterm (モノクロ)	hft
hpterm 端末および HP 700/9x 端末	hpterm
IBM 3151 端末	3151
vt220 端末を使用する NCD X 端末	ncd220
Sun Type 4 キーボードを使用する cmdtool/shelltool	sun
Sun Type 5 キーボードを使用する cmdtool/shelltool	sun5
vt100 端末	vt100
vt220 端末	vt220
Wyse 50 端末または Wyse 60 端末	wy50
Wyse 150 端末	wy150
Sun Type 4 キーボードを使用する xterm	xsun
Sun Type 5 キーボードを使用する xterm	xsun5

ORA_NLS33

US7ASCII 以外の格納キャラクタ・セットでデータベースを作成する場合に必要です。Installer の起動またはデータベースを作成する前に、ORA_NLS33 を \$ORACLE_HOME/ocommon/nls/admin/data に設定してください。

PATH

検索パスに、次のすべてが設定されていることを確認してください。

- \$ORACLE_HOME/bin、/bin、/usr/bin

注意： Solaris Intel では、SUN C コンパイラが存在する場合に、検索パスに /usr/ccs/bin および /opt/SUNWsprow/bin も含まれていることを確認してください。

注意： 検索パスに /usr/ucb を入れる場合は、/usr/ccs/bin の後に指定してください。

- ユーザーが作成したローカル bin ディレクトリ (2-17 ページを参照)

SRCHOME

Installer の実行時には未定義でなければなりません。SRCHOME を設定すると、Installer はデフォルトでそのディレクトリからソフトウェアをインストールします。

TMPDIR

Installer に書き込み権限があり、100MB 以上の空き領域があるディレクトリを指定する必要があります。デフォルトの設定は、次のとおりです。

DG/UX Intel の場合 : /tmp

NCR MP-RAS の場合 : /var/tmp

SCO UnixWare の場合 : /var/tmp

Solaris Intel の場合 : /var/tmp

TWO_TASK

Oracle Server ソフトウェアのインストール時には未定義でなければなりません。

TWO_TASK が定義されている場合にデータベース・オブジェクトを作成すると、Installer は、TWO_TASK が指定するデータベース内にオブジェクトを作成しようとします。

▮ 現行セッションの環境を更新する

oracle アカウントの `.profile` または `.login` ファイルで環境変数を設定した後、現行のシェル・セッションの環境を更新します。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
$ . .profile
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
$ source .login
```

個々の Oracle 製品の設定タスク

インストールに必要なタスクを行います。インストール前のタスクが必要な製品については、[表 1-9](#) ~ [1-20](#) を参照してください。

サーバー

RAW デバイスを使用する際は、次のファイル要件に従ってください。

ファイル・サイズ Installer からファイル・サイズを指定するプロンプトが表示されたら、RAW デバイスのサイズより 8KB 以上小さい値を指定します。サイズを MB 単位で指定する場合は、デバイス・サイズより 1MB 小さい値を指定します。

制御ファイル・サイズは、Oracle8 Server によって決まります。最小サイズは 220KB です。制御ファイルの RAW ボリュームは、最低でもこのサイズにしてください。

カートリッジおよびオプション

▶▶ Oracle ConText Cartridge のインストール前のタスク

ConText Cartridge のインストール前のタスクはありません。ただし、Oracle8 Server をインストールしてデータベースを作成するまで、ConText Cartridge はインストールできないので注意してください。ConText Cartridge のインストール手順については、第 4 章を参照してください。

▶▶ Oracle Parallel Server オプションのインストール前のタスク

Oracle Parallel Server システムを構築する際、Installer は、まず、1 つのノードに Oracle 製品をインストールします。次に、インストールした各製品の必須ファイル・セットを、クラスタ内のその他のノードにコピーします。インストール終了後、すべてのノードは同じ状態になります。

Oracle Parallel Server インストールの設定を行う際は、次のファイル要件に従ってください。

格納タイプ すべての制御ファイル、ログ・ファイルおよびデータベース・ファイルには、RAW デバイスを使用します。

Parallel Server オプションをインストールする前に、次のタスクを実行してください。

root ユーザーで行うタスク

1. クラスタ内のすべてのノード上で、OSDBA グループが `/etc/group` ファイルに定義されていることを確認します。OSDBA グループ名およびグループ番号（インストール中に指定する場合は、OSOPER グループも）は、1 つのデータベースにアクセスできる UNIX クラスタのすべてのノード上で共通である必要があります。OSDBA および OSOPER グループの UNIX グループ名のデフォルトは、`dba` です。
2. 次の条件を満たす `oracle` アカウントを、クラスタの各ノードに作成します。
 - OSDBA グループのメンバーである
 - Oracle ソフトウェアをインストールおよび更新するためのみに使用する
 - リモート・ディレクトリへの書き込み権限がある
3. Oracle ソフトウェア・ディレクトリ構造の最上位ディレクトリとなるように、次の条件を満たすマウント・ポイント・ディレクトリを各ノードに作成します。
 - 各ノードのマウント・ポイント名が第 1 ノードのマウント・ポイント名と同一である
 - `oracle` アカウントには、読み込み、書き込みおよび実行権限がある

参照： Oracle マウント・ポイントのネーミング規則の詳細は、2-15 ページを参照してください。

4. RAW ボリュームを作成します。

Oracle Parallel Server データベースに関連するすべてのファイルは、クラスタ内のすべてのノードからアクセスできるように、RAW ボリュームに格納する必要があります。制御ファイルおよびデータ・ファイルは、すべてのインスタンスに共有されます。インスタンスごとに個別のログ・ファイルがありますが、インスタンスの回復時に、すべてのインスタンスにすべてのログ・ファイルのアクセス権がなければなりません。

5. クラスタ内のその他のノードに関するエントリを `oracle` アカウントの `.rhosts` ファイルまたは `/etc/hosts.equiv` ファイルに追加して、ユーザー等価を設定します。

`root` アカウントを終了します。

oracle アカウントで行うタスク

1. クラスタ内の各ノードにリモート・ログイン (rlogin) して、oracle アカウントのユーザー等価を確認します。パスワードを入力するプロンプトが表示される場合、oracle アカウントの属性は、すべてのノード上で同一ではありません。ユーザー等価が設定されていないと、Installer は、`rcp` コマンドを使用してリモート・ディレクトリに Oracle 製品をコピーできません。

ユーザー等価を設定していない場合は、前項の「[root ユーザーで行うタスク](#)」の手順 5 を行ってください。

Tools 製品およびプリコンパイラ

次のプリコンパイラのインストール前のタスクを行います。

» Pro*COBOL プリコンパイラのインストール前のタスク

1. COBOL コンパイラの実行ファイルが、PATH に設定されているディレクトリにあることを確認します。
2. `$COBLIB` が `LD_LIBRARY_PATH` にあることを確認します。
3. 環境変数 `COBDIR` を、COBOL コンパイラがインストールされているディレクトリに設定します。

» Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール前のタスク

C コンパイラの実行ファイルが、PATH に設定されているディレクトリにあることを確認します。

ネットワーク製品およびシステム管理製品

Oracle Network を構成するための Network Manager は提供されなくなりました。適用される制限もありますが、SQL*Net バージョン 2 の構成ファイルは Oracle Net8 と互換性があります。ネットワーク製品の README ファイルは、CD-ROM の network/doc ディレクトリにあります。README ファイルには、Net8 の問題点および制限事項が記載されています。

▶▶ Advanced Networking Option (ANO) のインストール前タスク

表 2-12 に、サポートされる認証アダプタを使用するためのシステム要件を示します。

表 2-12 サポートされる認証アダプタと要件

アダプタ	要件
Kerberos	Kerberos リリース 5.4.2 以上。
SecurID	ACE/Server リリース 1.2.4 以上。 または Security Dynamics の SecurID カード。
Identix	作成した指紋表とともに、Oracle データベース上で動作する Oracle Biometrix Authentication Server が必要。

その他の認証アダプタのソフトウェアに、Oracle 製品を再リンクする必要はありません。ただし、Oracle は Kerberos または SecurID の認証サーバーを提供していません。適切な認証サーバーを個別にインストールして構成する必要があります。

クライアント専用のマシンへの ANO のインストール

クライアント専用のマシンにデータベースなしで ANO をインストールする場合は、インストール前に環境変数 TWO_TASK を設定します。環境変数 TWO_TASK は、サーバー・マシン上のデータベースの別名を示し、これによって、ユーザーはクライアント専用のマシンに ANO をインストールできます。

参照： 環境変数 TWO-TASK の詳細は、『Oracle8 Server 管理者ガイド』を参照してください。

▶▶ Oracle Net8 のインストール前タスク

Net8 をインストールする前に、マシン上のすべての SQL*Net および Net8 リスナーを停止します。

» Oracle Names Server のインストール前のタスク

既存の Names Server を使用する場合は、`/etc/hosts` ファイルにマシンのホスト名の別名を作成し、`oramesrvr[0-4]` に設定します。次に例を示します。

```
128.128.44.123  ncrl.eng  oramesrvr0
128.128.44.124  dgl.eng   oramesrvr1
```

また、ネットワーク内のすべてのサーバーおよびクライアント・マシン上で、既存の Names Server の別名を作成する必要があります（既存の Names Server とは、クライアントが個々に構成されていなくてもネットワーク上で見つけられるようにデフォルト名を使用している Names Server です）。

参照： Names Server および既存の Names Server の詳細は、『Oracle Net8 管理者ガイド』を参照してください。

» Oracle Protocol Adapter のインストール前のタスク

Oracle Protocol Adapter をインストールする前に、基盤となるネットワーク・プロトコルが機能し、正しく構成されていることを確認します。

SPX/IPX（DG/UX Intel、SCO Unixware および Solaris Intel の場合）

Oracle SPX/IPX Protocol Adapter をインストールする前に、次のタスクを行います。

1. すべてのパケット・タイプがネットワーク上で認識されるように、システムを構成します。このタスクについては、以降の項で説明します。詳細は、ベンダーから提供されているドキュメントを参照してください。

パケット・タイプのサポート（DG/UX Intel の場合）

ブリッジおよび Ethernet パケットを使用して DG/UX Intel で SPX/IPX 用のパケット・タイプを構成するために、サポートされている Ethernet パケットを習熟しておく必要があります。

参照： パケット・タイプの詳細は、DG/UX SPX/IPX および Novell のドキュメントを参照してください。

注意： DG/UX Intel では、両方の Ethernet パケットをサポートしています。

Oracle SPX/IPX Protocol Adapter をインストールする前に、パケット・タイプを検討します。Novell 社では、パケット・タイプが異なるシステムは、物理的に同一の LAN ケーブルに接続されている場合でも、論理的に別々の LAN 上に置くことを検討します。LAN 上のノードは、同一のパケットを使用します。そうでない場合は、Novell Router を使用して、接続先のパケット・タイプに適合するようにパケットを変換します。

- Ethernet パケットを使用するために、Novell LAN を構成します。詳細は、次の「Ethernet パケット用の Netware LAN の構成」を参照してください。
- Ethernet および Novell パケットを使用するために、Novell ファイル・サーバーを構成します。この場合、Novell パケット・タイプを使用するクライアントは、Ethernet パケット・タイプを使用するサーバーと通信できます。これは、Novell サーバーがパケットを変換するためです。

このオプションの欠点は、パケットを変換するために 2 度転送する必要があることです。これによって、パフォーマンスが低下します。このオプションの詳細は、2-31 ページの「両方のパケット・タイプをサポートするためのサーバーの構成」を参照してください。

Ethernet パケット用の Netware LAN の構成

Ethernet パケット用の Netware LAN の構成の正確な手順は、LAN システムのソフトウェアの使用方法によって異なります。この項では、次に示す LAN 構成のタイプに基づいた 3 つの手順について説明します。

- Novell Netware 286 ファイル用の Novell ファイル・サーバー
- Novell Netware 386 ファイル用の Novell ファイル・サーバー
- DOS ワークステーション・シェル

Novell Netware 286 ファイル用の Novell ファイル・サーバー上の場合 : Netware 286 にサポートされている各パケット・タイプに対して 1 つの Ethernet ボードが必要です。Netware 286 下でパケット変換をサポートするには、Ethernet ボードが同一の LAN に接続されている必要があります。Netware 286 は、内部または外部のブリッジとして構成する必要があります。

次に示す手順で実行します。

1. ファイル・サーバー上のシステム・ディレクトリの中にある NETSOS.EXE ファイルを書き込めるようにします。
 - スーパー・バイザーで、ファイル・サーバーへログインします。SYSTEM ディレクトリから FILER を実行します。
 - メニューからファイル情報を選択します。
 - メニューから NETSOS.EXE のファイルを選択します。
 - メニューから属性を選択します。

- NET\$OS.EXE ファイルに書き込めるようにします。属性に「Read Only」を選択し、[Delete] キーを押します。プロンプトが表示されたら、選択されていることを確認します。
- メニューおよび FILER プログラムを終了するには、[Esc] キーを数回押します。

2. NET\$OS.EXE を変換するには、ECONFIG を使用します。

```
$ ECONFIG NET$OS.EXE a:e 8137
```

ファイル・サーバーが 2 つ以上のネットワークに接続する場合は、フィールドを UNIX サーバーが接続している LAN 用の LAN 識別子と置き替えます。

注意： フロッピー・ドライブでは、ECONFIG.EXE ファイルはクライアントのハード・ディスクまたはファイル・サーバーのハード・ディスクのどちらかにあります。ファイル・サーバーの PUBLIC ディレクトリへ ECONFIG.EXE をコピーできます。

3. [Ctrl] キー、[Alt] キーおよび [Delete] キーを同時に押して、ファイル・サーバーを再起動します。

Novell Netware 386 用の Novell ファイル・サーバーの場合：LOAD LAN DRIVER コマンドはサポートされたパケット・タイプを指定します。デフォルトでは、Novell パケットがサポートされています。Ethernet パッケージをサポートするには、次に示すような FRAME= のフィールドを追加するか、または変更して LOAD LAN DRIVER コマンドを編集します。

```
FRAME=Ethernet_II
```

DOS ワークステーション・シェルの場合：Novell Netware 配布製品とともに ECONFIG ユーティリティが含まれています。ECONFIG ユーティリティは、パケット・タイプを変更できます。シェルのフロッピー・ディスクの方法で作成している場合、ECONFIG は診断ディスク上にあります。ハード・ディスクの方法で作成している場合は、ECONFIG は DIAG ディレクトリの中にあります。IPX.COM ファイルは、ハード・ディスク（またはディスク）上の SHGEN-2 ディレクトリにあります。

1. Ethernet II パケットを使用するため、DOS システムを変換します。

```
DOS> ECONFIG IPX.COM shell:e 8137
```

2. 変換後、新しい IPX.COM を使用して新しい DOS クライアント・ディスクを作成します。すべてのワークステーションを再起動して、新しい IPX.COM をロードします。
3. ECONFIGIG というプログラムを使用して、ファイル・サーバー・オペレーティング・システムのファイル NET\$OS.EXE の変換準備をします。NET\$OS.EXE は、ファイル・サーバー上の SYSTEM ディレクトリの中にあります。ファイル・サーバーの PUBLIC ディレクトリへ ECONFIG.EXE をコピーできます。

4. NET\$OS.EXE ファイルを書き込めるようにします。
 - スーパー・バイザーで、ファイル・サーバーへログインします。SYSTEM ディレクトリから FILER を実行します。
 - メニューからファイル情報を選択します。
 - メニューから NET\$OS.EXE のファイルを選択します。
 - メニューから属性を選択します。
 - NET\$OS.EXE ファイルに書き込めるようにします。属性に「Read Only」を選択し、[Delete] キーを押します。プロンプトが表示されたら、選択されていることを確認します。
 - メニューおよび FILER プログラムを終了するには、[Esc] キーを数回押します。
5. NET\$OS.EXE を変換するには、ECONFIG を使用します。

```
$ ECONFIG NET$OS.EXE a:e 8137
```

ファイル・サーバーが2つ以上のネットワークに接続する場合は、フィールドを UNIX サーバーが接続している LAN 用の LAN 識別子と置き換えます。

6. [Ctrl] キー、[Alt] キーおよび [Delete] キーを同時に押してファイル・サーバーを再起動します。

Novell パケットをサポートするための DG/UX ファイル・サーバーの構成

Novell パケット・タイプをサポートするために DG/UX ファイル・サーバーを構成するには、次の操作を行います。

1. /usr/opt/netware/etc/NP\$Config ファイルで次のように入力して、必須パラメータを設定します。

```
lan_1_adapter=/dev/dpen0
lan_1_adapter_type=ETHERNET_DLPI
lan_1_frame_type=ETHERNET_II
lan_1_module=PAD
```

注意： これらの設定値は、ネットワーク・ハードウェアによって異なります。

2. llc デバイスが構成されたことを確認します。
3. lldc デーモンが実行中であることを確認します。

両方のパケット・タイプをサポートするためのサーバーの構成

注意： この情報は、DG/UX Intel システムのみに適用します。

Netware 286 は、Ethernet および Novell パケットの両方をサポートしています。

Netware 386 は、同一の Ethernet ボード上で 2 つ以上のパケット・タイプをサポートします。Netware 386 の LOAD LAN DRIVER コマンドは、サポートしているパケット・タイプごとに 1 回 LAN ドライバをロードします。LOAD LAN DRIVER コマンドの詳細は、『Netware 386 システム管理者ガイド』を参照してください（コマンドのテキストは、FRAME= の部分の除いて各パケット・タイプに対して同一である必要があります）。

Oracle SPX/IPX Protocol Adapter のユーザーは、Ethernet II および Ethernet 802.3 パケット・タイプをサポートします。Netware 386 では、ドライバがパケット・タイプごとに 1 回ロードされる場合、Novell のクライアントは、デフォルトのパケット・タイプで UNIX ベースのオペレーティング・システム下の SPX サービスに接続できます。

SCO UnixWare 用の SPX/IPX

SCO UnixWare に Oracle SPX/IPX Protocol Adapter をインストールする前に、すべてのパケット・タイプがネットワーク上で認識されるように、システムを構成します。詳細は、ベンダーから提供されているドキュメントを参照してください。

TCP/IP

TCP/IP Protocol Adapter は、すべての Oracle8 Server のインストールで自動的にインストールされます。

1. ftp ユーティリティを使用してテスト・ファイルを転送し、ネットワークが正しく機能していることを確認します。

```
$ ftp remote_server_name
ftp> put test_filename
ftp> get test_filename
```

■ Oracle Security Server (OSS) のインストール前のタスク

OSS のホストになるマシンは、物理的に安全性の高い位置に置く必要があります。

インストールのタスク

この章では、Installer の起動および新規の Oracle8 Server のインストールについて説明します。

- [Installer の起動](#)
- [Installer のプロンプト](#)
- [ドキュメントのインストール](#)
- [Installer セッション後のタスク](#)

この章では、新規のインストール以外のタスク（パッチのインストール、実行ファイルの再リンクなど）で Installer を使用方法については説明していません。インストール以外で Installer を使用する場合は指示、およびインストールのトラブルシューティングの詳細は、[付録 A 「Oracle Installer の使用」](#)を参照してください。

Installer の起動

Installer を実行するには、次のタスクを行います。

- ❑ 製品インストール用の CD-ROM をマウントする
- ❑ Installer を起動する

▶ 製品インストール用の CD-ROM をマウントする

```
$ su root
# mkdir /cdrom
# chmod 777 /cdrom
```

DG/UX Intel の場合

```
# /etc/mount -t cdrom '/dev/pdsk/device_name' /cdrom
```

NCR MP-RAS の場合

```
# /etc/mount -F cdfs -o ro ncrm,dperm=555,fperm=555 \
/dev/cdrom/cdrom1 /cdrom
```

SCO UnixWare の場合

```
# mount -F cdfs -oro /dev/cdrom/c0b0t410 /cdrom
```

Solaris Intel の場合

Solaris Intel では、Solaris Volume Manager を実行していると、CD-ROM は通常 /cdrom に自動的にマウントされます。Solaris Volume Manager を実行していない場合は、次のように入力して、CD-ROM をマウントできます。

```
# /etc/mount -F hsfs -r /dev/dsk/c0t6d0p0 /cdrom
```

▶ Installer を起動する

oracle ソフトウェア所有者で、以前にマウントした orainst ディレクトリに移動します。

```
$ cd /cdrom/orainst
```

Installer は、Motif モードまたはキャラクタ・モードのいずれかで実行できます。次のいずれかのコマンドを実行して、Installer を起動します。

```
./orainst /m (Motif モードの場合)
```

```
./orainst /c (キャラクタ・モードの場合)
```

警告： root ユーザーで Installer を実行しないでください。

非問合せモードでのインストール

Installer を使用すると、1 回のインストール・セッションの応答を記録し、それらの記録を使用して、その後のインストールを行うことができます。これを「Silent Mode」といい、同様のインストールを何度も行う場合に有効です。詳細は、[A-3 ページ](#)の「デフォルトおよびリピート・インストール」を参照してください。

Installer のプロンプト

Installer セッションは、一連のプロンプトです。各プロンプトは、独自のウィンドウに表示されます。

初回の Installer プロンプト

実行中のタスクまたはインストールする製品に関係なく、初回の Installer プロンプトは Installer セッションごとに表示されます。デフォルト・インストレーションまたはカスタム・インストレーションのいずれかを選択できます。

注意： Oracle 製品の各国語サポートを選択するには、カスタム・インストレーション・オプションを選択する必要があります。Installer セッションの後半で、使用したい言語を選択します。Installer では、アメリカ英語のみが使用できます。

デフォルト・インストレーションでデータベースを作成する場合、Installer は、事前に作成しておいたデータ・ファイルを、指定したマウント・ポイントにコピーします。これによって、CD-ROM に保存されているデータ・ファイルを再度使用し、自動的にデータベースおよび新しい制御ファイルが作成されます。その結果、データ・ディクショナリ作成スクリプトのロード時間を節約できます。

注意： 事前に作成しておいたデータ・ファイルが使用できるのは、デフォルト・インストレーションを行う場合のみです。

インストレーション・タイプ/README ファイル

Installer では、カスタム・インストレーションまたはデフォルト・インストレーションのいずれかを選択できます。デフォルト・パスを指定すると、インストレーションで使用する設定が表示され、設定内容の確認が求められます。

インストレーション・アクティビティの選択

Installer を使用するためのアクティビティを指定します。

- Install, Upgrade, or De-Install Software
- Create/Upgrade Database Objects
- Perform Administrative Tasks

インストール・オプション

ソフトウェアをインストールする場合、Installer には「Install New Product」(データベース・オブジェクトを作成するかどうかを指定) および「Add/Upgrade Software」の2つの基本的なオプションがあります。どちらのオプションを使用しても、Oracle8 Server をインストールできます。

「Install New Product」オプションを選択すると、OFA 準拠のディレクトリ構造が作成されます。「Add/Upgrade Software」オプションは OFA に準拠していないので、データベース・オブジェクトは同一の Installer セッションでは作成することができません。

oratab ファイルへのアクセス不可

このプロンプトは、Installer が次のファイルにアクセスできない場合のみ表示されます。

DG/UX Intel の場合: /etc/oratab

NCR MP-RAS の場合: /var/opt/oracle/oratab

SCO UnixWare の場合: /var/opt/oracle/oratab

Solaris Intel の場合: /var/opt/oracle/oratab

oratab ファイル作成の詳細は、第2章の「root ユーザーで行うタスク」を参照してください。

インストール位置

環境に ORACLE_BASE が設定されている場合、ORACLE_BASE および ORACLE_HOME の設定を確認するプロンプトが表示されます。ORACLE_BASE が設定されていない場合は、ソフトウェアのマウント・ポイントを入力するプロンプト、続いて ORACLE_HOME ディレクトリのフルパス名を入力するプロンプトが表示されます。

環境変数 ORACLE_SID は、Oracle のシステム識別子で、Oracle Server のインスタンス名です。

インストール・ログ・ファイル

Installer は、Installer セッションのレコードとして、4つのログ・ファイル(オペレーティング・システム、Installer、SQL および Make ファイル用に1つずつ)を作成します。インストール・ログ・ファイルのデフォルト位置は、\$ORACLE_HOME/orainst ディレクトリ下です。すでにインストール・ログ・ファイルが存在する場合、Installer はそれらのログ・ファイルを *filename.old* として保存します。

インストール・ソース

CD-ROM またはステージ領域のどちらからインストールするかを指定します。ステージ領域からインストールする場合は、テンポラリまたは永続ステージ領域を指定するプロンプトが表示されます。Installer は、インストールの途中でテンポラリ・ステージ領域を削除します（ステージ領域の詳細は、[付録 A](#) を参照）。

各国語サポート

各国語サポート（NLS）では、Oracle 製品のメッセージ表示に使用する言語を指定します。これはデフォルト言語のみです。ユーザーおよびクライアント・アプリケーションでは、セッション・レベルでメッセージを表示するときに使用する言語も設定できます。Installer のプロンプトおよびメッセージは、常にアメリカ英語で表示されます。

参照： 使用可能なキャラクタ・セットについては、[付録 C「各国語サポート」](#)を参照してください。

root.sh スクリプトの位置

Installer は、root.sh スクリプトを、\$ORACLE_HOME/orainst ディレクトリに作成します。このスクリプトは、インストールに続いて、root ユーザーが実行する必要があります。root.sh スクリプトがすでに存在する場合、Installer は、それに新規アクションを追加するか、または新規スクリプトを作成するかを問い合せてきます。特別な理由がない限り、通常は、新規スクリプトを作成してください。

Software Asset Manager 「Software Asset Manager」画面では、選択した製品のサイズおよびそれらの格納先ディレクトリ（ORACLE_HOME ディレクトリ）の使用可能な領域を調べることができます。インストールする製品を「Available Products」ウィンドウから選択し、「Install」ボタンを押します。選択した製品によっては、この章で説明していない Installer プロンプトが表示されることもあります。

「Software Asset Manager」画面内の一部の製品は、「Protocol Adapters」、「Precompilers」などのカテゴリごとにグループ化されています。カテゴリは、名前の左にあるプラス記号（+）によって示されます。カテゴリ内の構成製品を表示するには、カテゴリ名をダブルクリックします（キャラクタ・モードでは、カテゴリ名を選択して [Return] を押します）。

注意： カテゴリ名のみを選択しても、カテゴリ内の製品はインストールされません。個々の構成製品を選択する必要があります。

「Software Asset Manager」画面の詳細は、[付録 A](#) を参照してください。

OSDBA グループ

Installer は、DBA 権限を割り当てる選択可能なユーザー・グループを表示します。デフォルトは、`oracle` アカウントのプライマリ・グループです。このグループに `dba` 以外の名前が付いている場合、Installer はインストール後に Oracle 実行ファイルを再リンクします。

OSOPER グループ

Oracle に限定された OPERATOR 権限を、別の UNIX グループに与えることができます。Installer では、このグループを OSOPER グループと呼びます。デフォルトは OSDBA グループとして指定したグループで、別のユーザー・グループが OPERATOR 権限を与えられることはありません。`dba` 以外のグループを選択すると、Installer は Oracle 実行ファイルを再リンクします。

第 2 章「環境設定」で OPERATOR 権限用のグループを作成した場合は、プロンプトに対してそのグループ名を入力します。作成していない場合は、デフォルト値を設定してください。

インスタンス名

インスタンス名または `sid` は、4 文字以内の一意の識別子である必要があります。インスタンス名は、環境変数 `ORACLE_SID` で指定します。単一インスタンス・インストールでは、通常、`DB_NAME` 初期化パラメータの値と同じです。

Oracle Parallel Server : Parallel Server クラスタ内の各インスタンスの `sid` は一意で、操作対象のデータベース名を含んでいる必要があります。たとえば、データベース `PRO` のインスタンス名は、`PRO1`、`PRO2`、`PRO3` などです。

データベース作成プロンプト

Installer でデータベースを作成する場合は、次のプロンプトが表示されます。

格納タイプ: ファイル・システムまたは RAW デバイス

RAW デバイスまたはファイル・システムのどちらに格納するかを指定します。単一インスタンス・インストールではどちらも使用できますが、Oracle Parallel Server では、RAW デバイスが必須です。

マウント・ポイントの数

Oracle8 Server (RDBMS) をインストールする場合、OFA 規則に従って、3 つのマウント・ポイントにデータベース・オブジェクトを分散させるかどうかを指定します。1 つのマウント・ポイントを指定したり、同じドライブに 3 つのマウント・ポイントを指定したりできますが、別々のデバイスの少なくとも 3 つのマウント・ポイントにデータベースを分散することをお薦めします。このプロンプトに値を指定すると、制御ファイルおよび REDO ログ・ファイルは、指定したマウント・ポイントに分散されます。

マウント・ポイントの位置

このプロンプトで指定するデータベースのマウント・ポイントは、初回の Installer プロンプトで指定したソフトウェアのマウント・ポイントとは異なるものを指定することをお薦めします (詳細は、[3-4 ページ](#)を参照)。

[表 3-1](#) に、Installer が作成するデータベースのデフォルトのサイズおよび位置を示します。このデータベースは、サンプル・データベースです。インストール時には、REDO ログ・ファイルまたはデータベース・ファイルのサイズと同様に、ファイルの位置をカスタマイズできますが、環境に合わせてデータベースが最適化されることはありません。このデータベースは、本番データベースではありません。

表 3-1 デフォルト・データベース・ファイル

ファイル	デフォルトの サイズ	最小サイズ	デフォルトの位置 (ファイル・システムに基づく)
制御ファイル (3 つ)	50KB	データベース に依存	<code>db_mount_point[1-3]/oradata/db_name/control0[1-3].ctl</code>
REDO ログ・ ファイル (3 つ)	500KB	100KB	<code>db_mount_point[1-3]/oradata/db_name/redosid0[1-3].log</code>
SYSTEM	80MB	5MB	<code>db_mount_point1/oradata/db_name/system01.dbf</code>
ROLLBACK	15MB	1MB	<code>db_mount_point1/oradata/db_name/rbs01.dbf</code>
TEMP	550KB	260KB	<code>db_mount_point1/oradata/db_name/temp01.dbf</code>
USERS	1MB	200KB	<code>db_mount_point1/oradata/db_name/users01.dbf</code>
TOOLS	25MB	1MB	<code>db_mount_point1/oradata/db_name/tools01.dbf</code>

注意: `db_name` は、Installer セッション中に Installer がインスタンス名から作成する初期化パラメータ `DB_NAME` の値です。

キャラクタ・セット

データベースの格納キャラクタ・セットを指定します。デフォルトは、US7ASCII です。インストール前に環境変数 `ORA_NLS33` を設定していない場合は、デフォルトのキャラクタ・セットを指定してください。

指定した格納キャラクタ・セットは、データベースを再び作成しない限り変更できません。ただし、Oracle NLS は、格納キャラクタ・セットとは異なるキャラクタ・セットを使用するクライアント・アプリケーションをサポートします。サポートしているキャラクタ・セットの詳細は、[付録 C「各国語サポート」](#)を参照してください。

各国キャラクタ・セット

データベースの各国キャラクタ・セットを指定します。これは、特別に指定した列で利用できる 2 番目のキャラクタ・セットです。デフォルトは、データベース・キャラクタ・セットで指定したキャラクタ・セットです。

SYS および SYSTEM ユーザー・パスワード

SYSTEM アカountのデフォルトのパスワードは、`manager` です。SYS アカountのデフォルトのパスワードは、`change_on_install` です。この時点で、これらのパスワードを変更することをお勧めします。

dba および operator グループのパスワード

Installer は、DBA および OPERATOR 権限を割り当てた UNIX グループにパスワードを設定するかどうかを問い合せてきます。パスワードを設定すると、SYSDBA および SYSOPER として接続するためのパスワード認証が有効になります。

SYSDBA または SYSOPER としてデータベースに接続するには、ユーザーは DBA または OPERATOR ロールを割り当てられた UNIX グループのメンバーである必要があります。また、ここで指定したパスワードを入力する必要があります。

注意： DBA および OPERATOR ロールのパスワードは、インストール後に `orapwd` ユーティリティを使用して手動で指定できます。また、`orapwd` はリモート接続を使用禁止にする場合にも使用できます。

マルチスレッド・サーバー

マルチスレッド・サーバー (MTS) を使用すると、特定のアプリケーションに必要なプロセス数とメモリー量を節約できます。MTS は、メモリーが制限されていたり、短時間でトランザクション処理が終了するオンライン・トランザクション処理 (OLTP) アプリケーションを実行するシステムに適しています。Oracle InterOffice は、MTS に適したアプリケーションの例です。

個々のトランザクションは実行中に MTS プロセスを占有するので、1 つのトランザクションの実行に長時間かかるシステム (意思決定支援システムなど) では、MTS はお薦めしません。

Oracle Parallel Server のプロンプト

Oracle Parallel Server の Installer セッションは、単一インスタンス・インストールの Installer セッションとは多少異なります。

データベース作成

Oracle Parallel Server が使用できるのは、RAW ボリュームにあるデータベース・オブジェクトのみです。データベース・オブジェクトは、ファイル・システム上では作成しないでください。

インストール中に、RAW ボリュームのパス名を入力するプロンプトが表示されます。

RAW ボリュームの作成の詳細は、[2-23 ページの「Oracle Parallel Server オプションのインストール前タスク」](#)を参照してください。

クラスタ内のすべてのノードへのインストール

一度にクラスタ内のすべてのノード上にインストールするか、または第 1 ノードのみにインストールするかを指定します。第 1 ノードのみにインストールする場合は、後続の Installer セッションで「Install Oracle8 on Cluster」オプションを使用し、その他のノード上にインストールする必要があります。

クラスタ内のすべてのノード上にインストールする場合は、リモート・ノードのホスト名および ORACLE_HOME ディレクトリを入力する（各ノードは個々に指定する）プロンプトが表示されます。「List of Nodes」画面では、リモート・ノードを入力した後に空白行を入力する必要があります。

注意： インストールがデフォルトでもアップグレード（標準）でもない場合、Installer はリモート・ノードのホスト名のみを問い合わせ、リモート・ノードのローカルの ORACLE_HOME を使用します。

ドキュメントのインストール

Oracle ドキュメントには、2つの種類があります。オペレーティング・システム固有のドキュメントと、製品ドキュメントです。オペレーティング・システム固有のドキュメントはソフトウェア CD-ROM に含まれており、ソフトウェアのインストール中にインストールできます。製品ドキュメントは、別の CD-ROM に入っており、ソフトウェアとは別の Installer セッションでインストールする必要があります。

オペレーティング・システム固有のドキュメントおよび製品ドキュメントは、両方とも HTML 形式および PDF 形式で使用可能です。

ドキュメントのインストール方法

オペレーティング・システム固有のドキュメントをインストールするには、ソフトウェアのインストール中に使用可能な製品のリストから「UNIX Documentation」を選択します。

次の手順に従って、製品ドキュメントをインストールします。

1. Installer がファイル・システム上にインストールされていることを確認します。ドキュメント CD-ROM からファイルをインストールするには、Installer をファイル・システムから実行する必要があります。Installer がファイル・システム上にインストールされていない場合は、[3-4 ページ](#)の指示に従ってください。「Software Asset Manager」画面の「Available Products」ウィンドウから、「Oracle UNIX Installer」を選択します。ステージ領域を作成した場合は、ステージ領域から Installer を実行することもできます。
2. ローカル・ディスク（CD-ROM ではない）から Installer を起動します。
3. 「Installation Activity Choice」画面から、「Install, Upgrade, or De-Install Software」オプションを選択します。
4. 「Installation Options」画面から、「Install Documentation Only」オプションを選択します。
5. HTML または PDF のどちらの形式（または両方の形式）でインストールするかを指定します。
6. 「Software Asset Manager」画面から、「Oracle8 Product Documentation」を選択します。
7. 「Install」ボタンを選択します。ドキュメントのインストールが完了したら、Installer からその旨が通知されます。

インストールしたドキュメントの表示に関する詳細は、[第 4 章「Oracle8 システムの構成」](#)を参照してください。

Installer セッション後のタスク

インストレーション後、Installer は「Software Asset Manager」画面に戻ります。選択したすべての製品が、インストール済み製品として表示されていることを確認してください。Installer を終了して、[第 4 章「Oracle8 システムの構成」](#)に進んでください。

Installer を使用してデータベースを作成するには、Installer を終了してから再起動し、「Create/Upgrade Database Objects」オプションを選択します。データベース作成プロンプトの詳細は、[3-8 ページ](#)を参照してください。

Oracle8 システムの構成

Installer セッションの終了後、特定のインストール後のタスクを実行し、Oracle8 システムを構成する必要があります。この章では、必須のタスクに加え、オプションのタスクも説明します。

- [root ユーザーで行うタスク](#)
- [oracle ユーザーで行うタスク](#)
- [個々の Oracle 製品のインストール後のタスク](#)
- [インストールしたドキュメントの表示](#)

注意： この章では、基本構成のみを説明します。高度な構成および本番システムに必要な典型的なチューニングの詳細は、オペレーティング・システム固有の管理ガイドおよびチューニング・ガイドを参照してください。

root ユーザーで行うタスク

root ユーザーでログインして、次のタスクを行います。

- ❑ root.sh スクリプトを実行する
- ❑ その他の UNIX アカウントを作成する
- ❑ データベース・ファイルのセキュリティを検証する
- ❑ oratab ファイルを更新する
- ❑ データベースの起動および停止を自動化する（オプション）

▶ root.sh スクリプトを実行する

Installer は、Installer セッション中に root.sh スクリプトを \$ORACLE_HOME/orainst ディレクトリに作成します。このスクリプトを実行すると、Oracle 製品に必要なファイル権限が設定され、他の root 関連の構成アクティビティが実行されます。

```
# cd $ORACLE_HOME/orainst
# ./root.sh
```

Oracle Parallel Server をインストールした場合、クラスタ内のすべてのノードで root.sh スクリプトを実行する必要があります。

root.sh スクリプトが表示するメッセージ

root.sh スクリプトは、アクションを実行する前に環境を確認するプロンプトを表示します。環境を再設定する必要がある場合は、root.sh スクリプトを中断してください。スクリプトを中断する場合は、そのスクリプトを再実行してください。Installer を再実行する必要はありません。

インストールした製品に応じて、root.sh の進行状況を知らせるメッセージが表示されます。また、ユーザー名を入力するプロンプトが表示され、その他の指示も表示されます。

▶ その他の UNIX アカウントを作成する

システム上のそれぞれの DBA は、OSDBA グループにアカウントを持つ必要があります。複数のユーザーを同一のアカウントに割り当てないようにしてください。

次のシステム管理ユーティリティを使用して、これらの UNIX アカウントを作成します。

DG/UX Intel の場合 : sysadm

NCR MP-RAS の場合 : useradd

SCO UnixWare の場合 : scoadmin

Solaris Intel の場合 : admintool

» データベース・ファイルのセキュリティを検証する

アメリカの NCSC C2 またはヨーロッパの ITSEC E3 と同等のセキュリティ構成を持つ Oracle8 Server を使用するサイトは、Oracle ソフトウェアのインストールの整合性を確立するために、このタスクを行う必要があります。セキュリティが問題でない場合、このタスクはオプションです。

多くのファイルは、データへの不当なアクセスから保護する必要があります。推奨するファイル・モードおよび所有者は、次のとおりです。

- `oracle` アカウントは、すべての共通システム・ファイルおよびインストール・ファイルを所有する必要があります。
- `OSDBA` グループには、すべての共通システム・ファイルおよびインストール・ファイルに対して、読み込み、書き込みおよび実行権限が必要です。
- `OSDBA` グループ以外のユーザーに、Oracle インストールのファイルまたはディレクトリへの書き込み権限を与えないようにします。

表 4-1 に、Oracle ディレクトリおよびファイルへのアクセス権限を示します。

表 4-1 Oracle ディレクトリおよびファイルへのアクセス権限

ディレクトリ/ファイル	権限	コメント
すべてのデータベース、REDO ログおよび制御ファイル（これらのファイルの拡張子は、通常 .dbf、.log および .ctl）	640	データに対する任意のアクセスを保護するために、すべてのデータベース、REDO ログ・ファイルおよび制御ファイルは、oracle アカウントおよび OSDBA グループのみが読み込みできる状態であればなりません。
\$ORACLE_HOME/bin/		
■ Oracle 実行ファイル、いくつかのネットワーク実行ファイルおよびセキュリティ実行ファイル	6751	実行したユーザーに関係なく、oracle ユーザーおよび dba グループとして実行ファイルが実行されるように、「6」によって setuid ビットを設定します。
■ その他すべての実行ファイル	751 または 755	oracle ソフトウェア所有者が書き込みでき、すべてのユーザーが実行できなければなりません。
\$ORACLE_HOME/lib/	755	oracle ソフトウェア所有者が読み込み、書き込みおよび実行でき、すべてのユーザーが読み込みおよび実行できるディレクトリ。
\$ORACLE_HOME/lib/ 内のすべてのファイル	644	すべてのユーザーに対して、読み込み専用。
\$ORACLE_HOME/rdbms/log	751	ログ・ファイルへのアクセスを oracle アカウントおよび OSDBA グループに制限します。
rdbms/lib や proc/lib などの製品サブディレクトリ、およびそのディレクトリ内のファイル	644	すべてのユーザーに対して、読み込み専用。
\$ORACLE_HOME/network/trace	777 または 730	開発時にトレース・ファイルを表示して作成する場合に、広範囲のアクセスができるように「777」に設定します。本番環境では、確実に OSDBA グループのメンバーのみがトレース・ファイルへのアクセス権を持つように「730」に設定します。
製品 admin サブディレクトリにおける管理、SQL およびシェル・スクリプトのファイル	644	通常、SQL スクリプトは SYS ユーザーで実行しなければなりません。

» oratab ファイルを更新する

Installer のかわりに Server Manager を使用して手動でデータベースを作成した場合は、システム構成が次のファイルに反映されていることを確認する必要があります。

DG/UX Intel の場合 : /etc/oratab

NCR MP-RAS の場合 : /var/opt/oracle/oratab

SCO UnixWare の場合 : /var/opt/oracle/oratab

Solaris Intel の場合 : /var/opt/oracle/oratab

システム上の Server インスタンスごとに、次の形式でエントリを追加します。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、dbstart および dbshut スクリプト（次のタスクを参照）を実行するかどうかを示します。Installer は、作成したそれぞれのデータベースに対してエントリを自動的に追加します。

» データベースの起動および停止を自動化する（オプション）

データベースの起動および停止の自動化はオプションです。しかし、停止を自動化するとデータベースが異常終了しないように保護されるので、停止を自動化することをお勧めします。

dbstart および dbshut スクリプトは \$ORACLE_HOME/bin ディレクトリにあり、データベースの起動および停止を自動化する場合に使用します。

dbstart および dbshut スクリプトは、oratab ファイルの同一エントリを参照します。そのため、このスクリプトは同一のデータベース・セットに適用されるようにする必要があります。たとえば、dbstart を使用して sid1、sid2 および sid3 データベースを自動的に起動し、dbshut を使用して sid1、sid2 のみを停止することはできません。ただし、dbstart をまったく使用せずに、dbshut でデータベース・セットを停止するには指定できます。そのように指定するには、停止ファイルに dbshut エントリを追加し、システム起動ファイルから dbstart エントリを削除してください。

参照： システムの起動および停止の手順の詳細は、ご使用のプラットフォーム固有のドキュメントを参照してください。

DG/UX Intel でのデータベースの起動および停止を自動化する

DG/UX Intel でのデータベースの起動を自動化する

システム起動時に dbstart スクリプトが呼び出されるように設定します。

1. /etc/oratab ファイルにある、起動するすべてのデータベースのエントリを検索します。そのエントリは、最初のフィールドにある *sid* で識別できます。最後のフィールドを Y に変更します。oratab ファイルのデータベース・エントリは、次の形式で表示されます。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、dbstart および dbshut スクリプトを実行するかどうかを示します。

2. 起動ファイルの最後に次の 1 行を追加します (必ず dbstart ユーティリティのフルパスを指定します)。

```
su - oracle_owner -c $ORACLE_HOME/bin/dbstart &
```

DG/UX Intel でのデータベースの停止を自動化する

dbshut スクリプトを実行します。

1. 実行できない場合は、dbstart の手順 1 の指示に従って /etc/oratab ファイルを編集します。
2. 停止ファイルの最後に次の 1 行を追加します (必ず dbshut ユーティリティのフルパスを指定します)。

```
su - oracle_owner -c $ORACLE_HOME/bin/dbshut &
```

NCR MP-RAS でのデータベースの起動および停止を自動化する

システム起動時に dbstart および dbshut スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. /var/opt/oracle/oratab ファイルを編集します。

oratab ファイルのデータベース・エントリは、次の形式で表示されます。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、dbstart および dbshut スクリプトを使用してデータベースを起動および停止するかどうかを示します。

2. 起動するすべてのデータベースのエントリを検索します。これらのエントリは、先頭フィールドの sid で識別されます。それぞれの最後のフィールドを Y に変更します。
3. /etc/init.d ディレクトリに、dbora という名前のファイルを作成します（まだ存在していない場合）。
4. このファイルの終わりに次のように入力します（まだ入力していない場合）。必ず、dbstart ユーティリティのフルパスを指定してください。

```
# Set ORA_HOME to be equivalent to the ORACLE_HOME
# from which you wish to execute dbstart and
# dbshut
# set ORA_OWNER to the user id of the owner of the
# Oracle database in ORA_HOME
ORA_HOME=/u01/app/oracle/product/8.0.6
ORA_OWNER=oracle
if [ ! -f $ORA_HOME/bin/dbstart -o ! -d $ORA_HOME ]
then
echo "Oracle startup: cannot start"
exit
fi
case "$1" in
'start')
# Start the Oracle databases:
su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbstart &
;;
'stop')
# Stop the Oracle databases:
su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbshut &
;;
esac
```

5. 次のように入力して、dbora をリンクします。

```
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc0.d/K10dbora
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc2.d/S99dbora
```

SCO UnixWare でのデータベースの起動および停止を自動化する

システム起動時に dbstart および dbshut スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. /var/opt/oracle/oratab ファイルを編集します。

oratab ファイルのデータベース・エントリは、次の形式で表示されます。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、dbstart および dbshut スクリプトを使用してデータベースを起動および停止するかどうかを示します。

2. 起動するすべてのデータベースのエントリを検索します。これらのエントリは、先頭フィールドの sid で識別されます。それぞれの最後のフィールドを Y に変更します。
3. /etc/init.d ディレクトリに、dbora という名前のファイルを作成します（まだ存在していない場合）。
4. このファイルの終わりに次のように入力します（まだ入力していない場合）。必ず、dbstart ユーティリティのフルパスを指定してください。

```
# Set ORA_HOME to be equivalent to the ORACLE_HOME
# from which you want to execute dbstart
# dbshut
# set ORA_OWNER to the user id of the owner of the
# Oracle database in ORA_HOME
ORA_HOME=/u01/app/oracle/product/8.0.6
ORA_OWNER=oracle
if [! -f $ORA_HOME/bin/dbstart -o ! -d $ORA_HOME]
then
echo "Oracle startup: cannot start"
exit
fi
case "$1" in
'start')
# Start the Oracle databases:
su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbstart &
;;
'stop')
# Stop the Oracle databases:
su - $ORA_OWNER -c $ORA_HOME/bin/dbshut &
;;
esac
```

5. 次のように入力して、dbora をリンクします。

```
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc0.d/K10dbora
# ln -s /etc/init.d/dbora /etc/rc2.d/S99dbora
```

Solaris Intel でのデータベースの起動および停止を自動化する

dbstart および dbshut スクリプトは \$ORACLE_HOME/bin ディレクトリにあり、データベースの自動起動と自動停止を正常に行います。これらのスクリプトを適切なシステムに呼び出すことで、起動および停止ファイルはデータベースの起動および停止を自動化します。

データベースの起動および停止を自動化するために、dbstart および dbshut スクリプトに同一のデータベース・セットを適用します。これは、それらのスクリプトが /var/opt/oracle/oratab ファイルにある同一のエントリ・セットを参照するからです。たとえば、dbstart を使用して sid1、sid2 および sid3 データベースを自動的に起動し、dbshut を使用して sid1、sid2 のみを停止することはできません。

dbstart をまったく使用せずに、dbshut でデータベース・セットを停止するように指定できます。この設定を行うには、システムの停止ファイルに dbshut エントリを追加し、起動ファイルから dbstart エントリを削除します。システムを起動するたびにデータベースを自動的に起動したくない場合に、この方法を使用します。

dbstart は、起動プロシーダの最後に記述します。それによって、他の起動プロシーダ（ファイル・システムのマウントなど）は、データベースの起動前に実行されます。

dbshut は、停止プロシーダの最初に記述します。それによって、他の停止プロシーダ（ファイル・システムのアンマウントなど）は、データベースの停止後に実行されます。

/etc/rc0.d および /etc/rc2.d を設定する

/etc/rc2.d ディレクトリに dbstart コマンド・ファイル、/etc/rc0.d ディレクトリに dbshut コマンド・ファイルを置きます。/etc/rc0.d ディレクトリは、通常のシステム停止処理中に実行したファイルに対して使用します。

ネーミング規則

/etc/rc2.d および /etc/rc0.d に置くファイルの名前は、JIS 規格に従って付けます。

- 先頭文字が K で、その後に 2 桁の数字が続くファイルは、停止プロシーダに予約されている。
- 先頭文字が S で、その後に 2 桁の数字が続くファイルは、起動プロシーダに予約されている。

たとえば、dbstart コマンド・ファイルには S99dbstart のような名前を割り当てます。これは、データベースを起動するスクリプトであるからです。また、データベースを停止するスクリプトの dbshut ファイルには、K99dbshut のような名前を割り当てます。

2桁の数字の順序は、ファイルが実行される順序を示します。ファイルに連続した番号を付けるのは、適切な順序でファイルを実際に起動させるためです。また、大文字のファイル名は、小文字のファイル名より先に起動されます。この規則に基づいてファイルが順序付けられた例を次に示します。

```
S05MOUNTFSYS
S10RMIMPFFILES
S20bootflags
S30autoconfig
S40addswap
S50TCP
S50netserver
S80lp
S90rpc
```

接頭辞に S50 が付いた 2 つのファイルがありますが、これらは異なるファイルです。このような名前を付けることによって、この 2 つのファイルはほぼ同じ時間に起動されます。ただし、netserver は TCP プロセスの後に起動します。netserver プロセスは TCP プロセスが起動されていないと実行できません。

Solaris Intel でのデータベースの起動を自動化する

オペレーティング・システムには、システムの実行レベルに応じた起動および停止ディレクトリがいくつかあります (/etc/rc0.d、/etc/rc2.d など)。dbstart スクリプトは、データベースの起動を自動的に実行するように設定できます。このスクリプトは、Solaris Intel の起動プロシージャの一部としてのみ実行します。

システムの実行レベルを判断してから、次の 4 つの手順を実行します。

dbstart の自動実行を設定するためには、次の手順に従います。

1. /var/opt/oracle/oratab ファイルを編集します。
oratab ファイルのデータベース・エントリは、次の形式で表示されます。

```
ORACLE_SID:ORACLE_HOME:{Y|N}
```

この場合、Y または N は、dbstart および dbshut スクリプトを実行するかどうかを示します。

2. 起動および停止するすべてのデータベースのエントリを検索します。そのエントリは、最初のフィールドにある *sid* で識別できます。最後のフィールドを *Y* に変更します。
3. システムの実行レベル（シングル・ユーザーまたはマルチ・ユーザー）を判断します。手順 4 の例では、実行レベル 2（マルチ・ユーザーの実行レベル）を使用します。
4. `/etc/rc2.d` コマンド・ファイルの最後に次の 1 行を追加します。この行は、`dbstart` ユーティリティのフルパスを指定します。

```
su oracle -c /home/oracle/bin/dbstart &
```

"S" で始まる名前のファイルに、この 1 行を追加します。

5. そのファイルを `/etc/rc2.d` ディレクトリに置きます。oracle ソフトウェア所有者で、このファイルに読み込みおよび実行権限を与えます。

Solaris Intel でのデータベースの停止を自動化する

注意： この項では、停止ファイルは `/etc/rc0.d` ファイルのことです。

`dbshut` の自動実行を設定するためには、次の手順に従います。

1. 「[Solaris Intel でのデータベースの起動を自動化する](#)」の手順 1 の指示に従って、`/var/opt/oracle/oratab` ファイルを編集します。
2. 停止ファイルに次の行を追加します。この行は、`dbshut` ユーティリティのフルパスを指定します。

```
su oracle -c /home/oracle/bin/dbshut &
sleep 10
```

"K" で始まる名前のファイルに、この行を追加します。そのファイルは、`/etc/rc0.d` ディレクトリに置きます。

3. oracle ソフトウェア所有者で、このファイルに読み込みおよび実行権限を与えます。

参照： 実行レベルの詳細は、ご使用のシステムの管理者リファレンスの `init` コマンドを参照してください。システムに適切なファイルを選択するには、同じマニュアルの `rc` コマンドを参照してください。

oracle ユーザーで行うタスク

oracle アカウントでログインして、次のタスクを行います。

- ❑ UNIX アカウント起動ファイルを更新する
- ❑ 必要な Oracle パッチを適用する
- ❑ 初期化パラメータを設定する

UNIX アカウント起動ファイルを更新する

oracle アカウントおよび oracle ユーザーの UNIX アカウントの起動ファイルを更新します。

環境変数の設定

Oracle8 Server をインストールする前に、oracle アカウントの起動ファイルに LD_LIBRARY_PATH、ORACLE_BASE、ORACLE_HOME および ORACLE_SID を定義します（定義していない場合）。これらの環境変数は、Installer セッション時に入力した値を設定します。表 4-2 に、Installer のデフォルト値（すでに変更されている場合もある）を示します。

表 4-2 環境変数の設定

環境変数	デフォルト設定
LD_LIBRARY_PATH	LD_LIBRARY_PATH には、デフォルト設定はありません。詳細は、第 2 章「環境設定」を参照してください。
ORACLE_BASE	<i>software_mount_point/app/oracle</i>
ORACLE_HOME	<i>\$ORACLE_BASE/product/8.0.6</i>
ORACLE_SID	ORACLE_SID には、デフォルト設定はありません。入力した値を覚えていない場合は、 <i>\$ORACLE_HOME/orainst/usrdfl.log</i> ファイルのリストから検索できます。
PATH	PATH には、デフォルト設定はありません。必ず新しい <i>\$ORACLE_HOME/bin</i> ディレクトリを含めてください。その他の要件の詳細は、第 2 章「環境設定」を参照してください。

oraenv (coraenv) スクリプトの初期設定

次の指示に従って、単一インスタンスまたは複数インスタンスを適切に構成します。

単一インスタンスのマシン 単一インスタンスのマシンでは、oraenv (coraenv) ファイルを初期化するために、oracle アカウントの .profile または .login ファイルの最後に次の記述を含めます。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
ORAENV_ASK=NO
. /opt/bin/oraenv
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
set ORAENV_ASK = NO
source /opt/bin/coraenv
unset ORAENV_ASK
```

複数インスタンスのマシン 複数インスタンスのマシンでは、oraenv (coraenv) ファイルを初期化するために oracle アカウントの起動ファイルの最後にインスタンス名およびコマンドのリストを含めます。Installer セッションの前に定義した ORACLE_SID 値が、デフォルトのインスタンス名になります。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
SIDLIST=`awk -F: '/^[^#]/{printf "%s", $1}' /var/opt/oracle/oratab`
echo "SIDs on this machine are $SIDLIST"
ORAENV_ASK=
. /opt/bin/oraenv
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
set sidlist=`awk -F: '/^[^#]/{printf "%s", $1}' /var/opt/oracle/oratab`
echo "SIDs on this machine are $sidlist"
unset ORAENV_ASK sidlist
source /opt/bin/coraenv
```

注意： oratab のディレクトリ・パスはプラットフォームに固有のもので、ディレクトリ・パスは次のとおりです。

DG/UX Intel の場合 : /etc/oratab

NCR MP-RAS の場合 : /var/opt/oracle/oratab

SCO UnixWare の場合 : /var/opt/oracle/oratab

Solaris Intel の場合 : /var/opt/oracle/oratab

他の oracle ユーザー起動ファイルを更新する

すべての Oracle ユーザーに対して同一の環境を作成するため、次のように各ユーザー起動ファイルを更新します。

- PATH 文に /usr/bin および \$ORACLE_HOME/bin を指定します。
- 起動ファイルの最後に次の行を入力します。
 . /usr/bin/oraenv
 (C シェル・ユーザーの場合は、source /usr/bin/coraenv)
- ORACLE_BASE および ORACLE_HOME を設定します。

必要 Oracle パッチを適用する

このマニュアルが添付されている Oracle8 Server リリースには、Server またはその他の製品に適用する必要のあるソフトウェア・パッチが提供されている場合があります。パッチが提供されている場合は、パッチのリリース・ノートの指示に従って適用します。

初期化パラメータを設定する

Oracle 初期化パラメータは、Oracle8 Server インスタンスおよび Oracle データベースへの接続の特性を定義します。初期化パラメータは、構成パラメータとチューニング・パラメータに分けることができます。

構成パラメータは、データベースとそのデータベースが構築されている環境の関係を定義するもので、configdb_name.ora ファイルに指定されます。チューニング・パラメータは、Oracle8 Server インスタンスのさまざまな特性を定義するもので、initSID.ora ファイルに指定されます。

参照： 初期化パラメータのデフォルト値については、『Oracle8 for Intel UNIX (DG/UX Intel , NCR MP-RAS , SCO UnixWare , Solaris Intel) 管理者リファレンス』を参照してください。また、すべての Oracle 初期化パラメータについては、『Oracle8 Server リファレンス・マニュアル』を参照してください。

デフォルトの `initSID.ora` ファイルをアクティブにする

Installer は、`initSID_0.ora` ファイルを作成します。このファイルは、ロールバック・セグメントの情報が含まれていない点を除けば、配布内のデフォルトの `initSID.ora` ファイルと同一です。ロールバック・セグメントはアクティブでオンライン状態になっていますが、`initSID_0.ora` ファイルのリストには記載されていません。`initSID_0.ora` ファイルは、インスタンスを停止するまでアクティブになっています。次回インスタンスを起動する際には、デフォルトの `initSID.ora` ファイルがアクティブになります。

デフォルトの `initSID.ora` ファイルは、配布から `$ORACLE_BASE/admin/SID/pfile` ディレクトリにコピーされています。そのファイルには、大、中、小規模のデータベースの設定が含まれていますが、大、中規模のデータベースの設定はコメント化されています。サイズの設定には相互関係がありますが、データベースの実際のサイズを示しているものではありません。

`initSID.ora` パラメータの変更

`initSID.ora` (`initSID_0.ora` ではなく) の初期化パラメータは、UNIX テキスト・エディタで変更できます。変更した `initSID.ora` ファイルは、データベースを停止して再起動するとアクティブになります。

パラメータ・ファイルの `ORACLE_HOME` には、疑問符 (?) などの記号文字を使用しないでください。

個々の Oracle 製品のインストール後のタスク

この項では、次の製品のインストール後のタスクを説明します。

- [Oracle ConText Cartridge のインストール後のタスク](#)
- [Oracle8 Time Series Cartridge のインストール後のタスク](#)
- [Oracle8 Server のインストール後のタスク](#)
- [Oracle Parallel Server オプションのインストール後のタスク](#)
- [JDBC のインストール後のタスク](#)
- [Pro*COBOL プリコンパイラのインストール後のタスク](#)
- [Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール後のタスク](#)
- [Pro*FORTRAN プリコンパイラのインストール後のタスク](#)
- [Oracle Net8 のインストール後のタスク](#)
- [Oracle Names Server のインストール後のタスク \(オプション\)](#)
- [Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク](#)
- [Oracle Intelligent Agent のインストール後のタスク](#)
- [Oracle Security Server \(OSS\) のインストール後のタスク](#)

インストールの必要に応じて、製品固有のタスクを行ってください。

Oracle インストールを構成する前にオンライン・ドキュメントを表示する場合は、4-29 ページを参照してください。このマニュアルで説明している構成タスクを完了するために、製品ドキュメントを読む必要はありません。ただし、高度なチューニングを実行する場合は、製品ドキュメントの情報が必要になります。

» Oracle ConText Cartridge のインストール後のタスク

Oracle ConText Cartridge には、かなりのデータベース領域が必要です。ConText Cartridge をインストールする場合は、次の領域要件に従ってください。

表 4-3 Oracle ConText Cartridge の領域要件

項目	サイズ
ConText Data Dictionary ¹	5MB
ConText Demonstration Tables ²	ごく小さい
¹ ConText Cartridge に必須	
² ConText Cartridge では任意指定	

ConText Cartridge をインストールおよび構成する手順は、次のとおりです。

1. ConText Cartridge のデフォルトおよびテンポラリ表領域として使用できる表領域があることを確認します。SYSTEM 表領域に、ConText データ・ディクショナリは置かないでください。ConText Cartridge 用の表領域がない場合は、作成してから次の手順に進んでください。

参照： 表領域の作成の詳細は、『Oracle8 Server SQL リファレンス』を参照してください。

2. データベースが実行中で、SQL*Plus がインストールされていることを確認します。
3. Installer を起動して、「Install New Product - Create DB Objects」オプションを選択します。
4. 「Software Asset Manager」画面から「Oracle ConText Cartridge」のみを選択し、「Install」ボタンを選択します。
5. ConText Cartridge のインストール中に表示される各プロンプトに応答します。
6. Installer セッションが終了したら、`inittsid.ora` ファイルを次のように変更します。
 - `TEXT_ENABLE` パラメータを `TRUE` に設定します。
 - `SHARED_POOL_SIZE` パラメータを 9000000 バイト以上に設定します。

» Oracle8 Time Series Cartridge のインストール後のタスク

これらのタスクは、「Create Database Objects」オプションを選択した際に、Installer によって行われます。

UTLREF パッケージのインストール (Oracle8 Time Series Cartridge に必要)

1. DBA で、次のように入力します。

```
SVRMGR> @ORACLE_HOME/rdbms/admin/utlrefld.sql
```

2. 必要な場合は、ORDSYS アカウントを作成します。DBA で、次のように入力します。

```
SVRMGR> create user ORDSYS identified by <ORDSYS password>;
```

3. ORDSYS アカウント用の権限を設定します。DBA で、次のように入力します。

```
SVRMGR> grant connect,resource,create library to ORDSYS;
```

4. 次のように入力して、Time Series Cartridge のタイプおよびストアド・プロシージャをインストールします。

```
SVRMGR> connect ORDSYS/<ORDSYS password>
```

```
SVRMGR> @ORACLE_HOME/ord/ts/admin/ordtinst.sql
```

すべての Time Series のタイプおよびパッケージの実行権限は、PUBLIC に与えられます。

► Oracle8 Server のインストール後のタスク

Recovery Manager

Recovery Manager は、Oracle8 Server の一部としてインストールされる、自動リカバリ・ユーティリティです。このユーティリティは、別の Oracle8 データベースのリカバリ・カタログに、情報を格納します。優れた耐障害性を提供するために、もう 1 つの Oracle8 Server を別のマシンにインストールしてください。

注意： もう 1 つの Oracle8 Server をインストールおよび管理できない場合は、Recovery Manager をリカバリ・カタログなしの制限モードでも使用できます。

リカバリ・カタログを作成する場合は、次の手順に従ってください。

1. Oracle8 Server をインストールしたマシンとは別のマシンにもう 1 つの Oracle8 Server をインストールし、リカバリ・カタログのデータベースを作成します。

カスタム・スクリプトを書き込まずにデータベースを作成する場合は、Installer でデフォルトのデータベースを作成します。このデフォルトのデータベースは、リカバリ・カタログに適しています。

2. リカバリ・カタログ・データベースに、Recovery Manager ユーザーになるユーザーを作成します。

3. Recovery Manager ユーザーで、`$ORACLE_HOME/rdbms/admin` ディレクトリの `catrman.sql` スクリプトを実行します。Server Manager のライン・モード (SQL*Plus ではなく) を使用して、スクリプトを実行します。

マルチスレッド・サーバー

MTS で構成するサーバーでは、初期化パラメータ `SHARED_POOL_SIZE` の設定を大きくする必要があります。Installer セッション中に MTS を指定した場合は、`initssid.ora` ファイルの `SHARED_POOL_SIZE` の設定を大きくしてください。通常、予想される同時ユーザーごとに 1KB ずつ追加する必要があります。

注意： データベースを起動する前に、リスナーを起動する必要があります。

▶ Oracle Parallel Server オプションのインストール後のタスク

root.sh スクリプトのリモート・ノード上での実行

Installer は、クラスタ内の各ノード上に同じインストールを実行しますが、`root.sh` スクリプトは各ノード上で個別に実行する必要があります。

Oracle Group Membership Services (OGMS) トレース・ファイル

通常、OGMS デモンは、`/tmp/.ogms` ディレクトリにトレース・ファイルを作成します。このディレクトリのファイルは診断に使用するファイルで、OGMS がアクティブである間は削除しないでください。

インスタンスの起動

Installer は共有モードでデータベースを起動できますが、インストール中に起動されるインスタンスは 1 つのみです。インストール終了後に、Server Manager を使用して他の Oracle インスタンスを起動する必要があります。

注意： DG/UX Intel では、`node_list` パラメータが OPS 構成ファイルに必須です。また、ノード番号は DG/UX クラスタ・データベースのノード番号と一致していなければなりません。詳細は、『Oracle Parallel Server Management for UNIX 構成ガイド』を参照してください。

1. マシンを再起動する際にリスナーを自動的に起動するには、`root` ユーザーでログインし、システム起動ファイルに次の行を追加します。

```
su - oracle -c "opspd log=/tmp/opspd.log"
```

前述のエントリはオプションです。デフォルトは次のとおりです。

```
/tmp/opsdlog
```

Intel UNIX の場合、起動ファイルは `/etc/init.d/dbora` です。

2. 次のように入力して、クラスタ内のすべてのノードのノード番号を決めます。

```
$ORACLE_HOME/opsm/utl/getnodelist -a"
```

3. OPS 構成ファイルおよび `opsname.conf` を作成し、各ノード上にインストールします。このファイルには、OPS インスタンスの構成および関連サービスを表示するパラメータが記述されています。

▶ JDBC のインストール後のタスク

1. 次のように入力して、JDK リリース・レベルに応じて環境変数 `CLASSPATH` を更新します。

```
$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes111.zip (または、classes102.zip)
```

2. `LD_LIBRARY_PATH` に、次の行を追加します。

```
$ORACLE_HOME/jdbc/lib
```

▶ Pro*COBOL プリコンパイラのインストール後のタスク

1. COBOL コンパイラの実行ファイルが、`PATH` に設定されているディレクトリにあることを確認します。
2. `$COBLIB` が `LD_LIBRARY_PATH` にあることを確認します。
3. 環境変数 `COBDIR` を、COBOL コンパイラがインストールされているディレクトリに設定します。

▶ Pro*C/C++ プリコンパイラのインストール後のタスク

C コンパイラの実行ファイルが、`PATH` に設定されているディレクトリにあることを確認します。

`$ORACLE_HOME/precomp/admin` にある構成ファイル `ottcfg.cfg` および `pcscfg.cfg` は、Pro*C を使用する前に環境に合わせてカスタマイズする必要があります。テキスト・エディタを使用して、これらのファイルの出荷時の内容を削除し、環境に合わせてカスタマイズします。

▶▶ Pro*FORTRAN プリコンパイラのインストール後のタスク

FORTRAN コンパイラの実行ファイルが、PATH に設定されているディレクトリにあることを確認します。

▶▶ Oracle Net8 のインストール後のタスク

Oracle ネットワークの構成の詳細は、『Oracle Net8 管理者ガイド』を参照してください。ただし、Net8 の新機能を調べる前に最低限のネットワークを構成する場合は、次の手順に従ってください。

1. Installer は、\$ORACLE_HOME/network/admin/ ディレクトリにサーバー用の基本的な listener.ora ファイルを作成します。このファイルは、ポート番号 1521 の TCP/IP リスナーを指定します。次のように入力して、リスナーの状態を確認します。

```
$ lsnrctl status
```

リスナーが実行中の場合は、lsnrctl status コマンドによって次のように出力されます。

```
Connecting to (ADDRESS=(PROTOCOL=IPC)(KEY=PNPKEY))
STATUS of the LISTENER
-----
Alias                     listener
Version                  TNSLSNR for Intel UNIX: Version 8.0.6.0.0-
Production
...
```

リスナーが停止している場合は、次のように入力して、リスナーを起動します。

```
$ lsnrctl start listener
```

2. /etc/services ファイルに次のように入力して、Net8 リスナーのポートを予約します。

```
listener 1521/tcp          #Oracle Net8 listener
```

3. Net8 Assistant を使用して、クライアント・マシン用に tnsnames.ora ファイルを作成します。

注意： NCR MP-RAS の場合、Net8 Assistant は、今回のリリースでサポートされていません。クライアント・マシンに対して tnsnames.ora ファイルを手動で作成するには、『Oracle Net8 管理者ガイド』を参照してください。

Net8 Assistant (`$ORACLE_HOME/bin/net8asst.sh`) には、DG/UX Intel では Java 1.1.7、SCO UnixWare では JRE 1.1.7、Solaris Intel では Java 1.1.7 が必要です。Net8 Assistant を使用するには、システムに Java をインストールする必要があります。

Net8 Assistant を使用するために、DG/UX Intel では環境変数 `JAVA_HOME`、`LD_LIBRARY_PATH` および `CLASSPATH` を正しく設定しなければなりません。SCO UnixWare および Solaris Intel では、設定が必要なのは `JAVA_HOME` のみです。

次に、DG/UX Intel の場合の設定例を示します。

JDK を `/usr/opt/jdk` にインストールした場合は、次のように入力して、`ksh` で環境変数を設定します。

```
export JAVA_HOME=/usr/opt/jdk
export LD_LIBRARY_PATH=$JAVA_HOME/lib/dgux_x86/native_threads
export CLASSPATH=$JAVA_HOME/lib/classes.zip:$JAVA_HOME/lib/rt.jar
```

次に SCO UnixWare の場合の設定例を示します。

JDK を `/usr/java` にインストールした場合は、次のように入力して、`ksh` で環境変数を設定します。

```
export JAVA_HOME=/usr/java
export THREADS_FLAG=native
```

次に、Solaris Intel の場合の設定例を示します。

JDK を `/usr/java` にインストールした場合は、次のように入力して、`ksh` で環境変数を設定します。

```
export JAVA_HOME=/usr/java
```

Net8 Assistant は、`$ORACLE_HOME/bin` ディレクトリにあります。

```
$ cd $ORACLE_HOME/bin
$ net8asst.sh
```


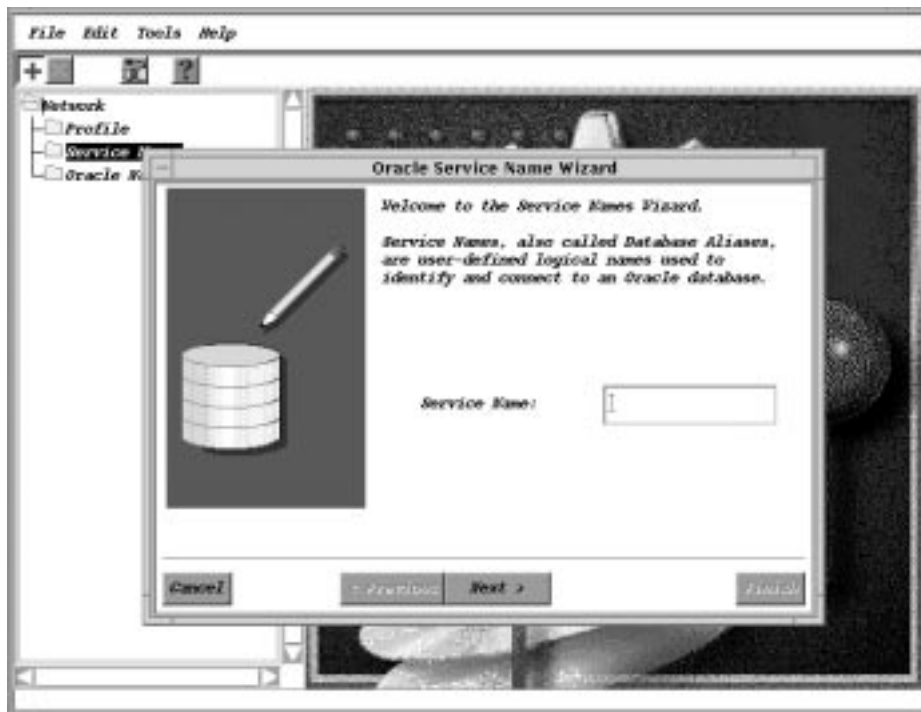
 **4-1** に、Net8 Assistant を示します。`tnsnames.ora` ファイルを作成するには、「Service Names」アイコンおよび「Create」ボタン（ツール・バーのプラス符号）を選択します。

図 4-1 「Net8 Assistant」および「Oracle Service Names Wizard」画面



4. tnsnames.ora ファイルを作成した後、クライアント・マシンの
\$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリにそのファイルをコピーします。
5. SQL*Plus をクライアント・マシンにインストールし、Oracle8 Server への接続をテスト
します。

```
$ sqlplus username/password@service_name
```

この時点で、TCP/IP を介したネットワーク接続を確立できました。さらに高度なネットワーク構成の詳細は、『Oracle Net8 管理者ガイド』を参照してください。

▶▶ Oracle Names Server のインストール後のタスク（オプション）

Oracle Names Server は、Oracle Net8 で自動的にインストールされます。ネットワークを構成して Oracle Names Server を使用する場合は、次の手順に従ってください。

1. Net8 Assistant を使用して、Oracle Names 構成ファイル `sqlnet.ora` および `names.ora` を作成します。
2. 既存の Names Server を使用する場合は、すべてのネットワーク・ノードの `/etc/hosts` ファイルに別名が正しく指定されていることを確認してください。
3. マシンをサーバーとして使用している場合は、次のように入力して、Names Server プロセスを起動します。

```
$ namesctl startup
```

4. 次のように入力して、Names Server プロセスを確認します。

```
$ namesctl status
```

▶▶ Oracle Protocol Adapter のインストール後のタスク

すべてのプロトコル・アダプタ

Oracle Protocol Adapter をインストールした後、次のタスクを行います。

1. ネットワークに必要な構成ファイルを作成およびインストールしたことを確認します。
2. マシンを再起動する際にリスナーを自動的に起動するには、`root` ユーザーでログインし、システム起動ファイルに次の行を追加します。

```
su - oracle -c "lsnrctl start"
```

Intel UNIX の場合、起動ファイルは `/etc/init.d/dbora` です。

注意： oracle アカountの `.profile` または `.login` ファイルに環境変数 `TNS_ADMIN` が設定されていなくて、`listener.ora` が次のような各プラットフォームのデフォルト位置のいずれかにない場合、この操作はできません。

DG/UX Intel の場合 : `$ORACLE_HOME/network/admin`

NCR MP-RAS の場合 : `/var/opt/oracle` または
`$ORACLE_HOME/network/admin`

SCO UnixWare の場合 : `/var/opt/oracle` または
`$ORACLE_HOME/network/admin`

Solaris Intel の場合 : `/var/opt/oracle` または
`$ORACLE_HOME/network/admin`

3. クライアント / サーバー構成の場合は、クライアント側の環境変数 `TWO_TASK` をサーバーを指すように設定します。クライアント・マシンの環境変数 `TWO_TASK` をサーバーのサービス名に設定してください (`tnsnames.ora` ファイルで設定できます)。

4. 次のように入力して、リスナー・プロセスを起動します。

```
$ lsnrctl start
```

5. 次のように入力して、リスナー・プロセスを確認します。

```
$ lsnrctl status
```

6. oracle アカountで Server Manager を起動し、次のように入力して、ループバックとの接続をテストします。

```
$ svrmgrl
SVRMGR> CONNECT username/password@service_name
```

次のように入力して、SQL*Plus からの接続をテストします。

```
$ sqlplus username/password@service_name
```

SPX/IPX (DG/UX Intel、SCO UnixWare および Solaris Intel の場合)

1. Net8 リスナーを起動する前に、次のように入力して、`ntisbsdsm` 実行ファイルを起動します。

```
$ ntspxctl startup
```

2. ntisbsdsm 実行ファイルが正しく起動することを確認します。

```
$ ntspxctl  
ntspxctl> status
```

出力結果は次のように表示されます。

```
ntisbsdsm started at Tue Jul 21 10:01:39 1998
```

注意： SPX/IPX Adapter のインストールは、oracle、svrmgr1、sqlplus および他の多くのバイナリを再リンクしません。再リンクするのは、Oracle Net8 のバイナリのみです。Oracle8 Server を ORACLE_HOME にインストールした場合は、Installer を使用するか、または次のように入力して手動で Oracle8 Server のバイナリを再リンクします。

```
$ cd $ORACLE_HOME/rdbms/lib  
$ make -f ins_rdbms.mk install
```

Oracle8 のバイナリを再リンクする前に、Oracle データベース・インスタンスが実行されていないことを確認してください。

» Oracle Intelligent Agent のインストール後のタスク

注意： Oracle Intelligent Agent のインストール後のタスクは、NCR MP-RAS および Solaris Intel には適用できません。これらのプラットフォームでは、SNMP がサポートされていないからです。次の手順は、DG/UX Intel の場合にのみ実行します。

Oracle Intelligent Agent は、シンプル・ネットワーク管理プロトコル (SNMP) を使用します。Intelligent Agent を起動する前に、Oracle SNMP サポートを構成してください。次のタスクで使用するすべての構成ファイルは、\$ORACLE_HOME/network/snmp/peer ディレクトリにあります。

マスター・エージェントの構成

CONFIG.master ファイルで、次のタスクを実行します。

1. 「MANAGER」で始まる行を検索します。

2. 130.35.10.210 というコードの `ipaddr` フィールドを、SNMP トラップ・メッセージを送りたいマシンの IP アドレスまたはホスト名に変更します。

この構成ファイルに他の変更を加えることができます。その詳細は、構成ファイルに記述されています。

カプセル化プログラムの構成

1. 次の行を `snmpd.conf` ファイルに追加します。

```
trap hostname_or_IP_address
```

この場合、`hostname_or_IP_address` は、ローカル・マシンの IP アドレスを表します。

2. `CONFIG.encap` ファイルで、ポート番号を任意に変更できます。ポート番号は、デフォルトでは 1161 に設定されています。ポート番号を変更する場合、`start_peer` スクリプトの `NEW_SNMPD_PORT` のポート番号も変更する必要があります。

`NEW_SNMPD_PORT` は、`snmpd` エージェント（ネイティブの Intel UNIX SNMP エージェント）がリスニングするポートです。このポートが、`CONFIG.encap` ファイルに指定されているポートと同一であることを確認します。`NEW_TRAPD_PORT` は、`snmpd` エージェントがトラップを送る `PEER` カプセル化プログラム・ポートです。

`start_peer` スクリプトの `NEW_SNMPD_PORT` および `NEW_TRAPD_PORT` のポート番号は、異なっている必要があります。`NEW_TRAPD_PORT` ポート番号も変更できます。

start_peer スクリプトの検証

`start_peer` スクリプトには、次のような行が含まれています。

```
SNMPD = snmpd_executable_path
```

システムの `snmpd` 実行ファイルが `start_peer` スクリプトに指定されている位置にない場合は、`snmpd_executable_path` を編集して、`snmpd` 実行ファイルの正しい位置を指定します。

SNMP コンポーネントの起動

次の手順に従って、SNMP コンポーネントを起動します。

1. 次のように入力して、SNMP コンポーネント（`master_peer`、`encap_peer` および `snmpd`）が停止していることを確認します。

```
$ ps -aef | grep peer
$ ps -aef | grep snmp
```

前述のいずれかのコンポーネントが実行されている場合は、root ユーザーでログインし、kill コマンドでこれらのプロセスを終了してから次の手順に進みます。

2. root ユーザーで次のように入力して、start_peer スクリプトを実行し、PEER マスター・エージェント、PEER カプセル化プログラムおよびネイティブの Intel UNIX SNMP エージェントを起動します。

```
# cd $ORACLE_HOME/network/snmp/peer
# ./start_peer -a
```

警告： ご使用のシステムにネイティブの Intel UNIX SNMP エージェントがない場合は、PEER カプセル化プログラム (PEER Encapsulator) を使用する必要はありません。マスター・エージェントのみを起動するには、start_peer -m を実行してください。

3. 次のように入力して、SNMP コンポーネントが実行されていることを確認します。

```
# ps -aef | grep peer
# ps -aef | grep snmp
```

データベース・サブエージェントの構成および起動

データベース・サブエージェント (Oracle Intelligent Agent) の構成および起動の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

» Oracle Security Server (OSS) のインストール後のタスク

OSS のインストール後、起動できない場合は、インストール中にエラーがなかったかどうか、\$ORACLE_HOME/orainst/install.log ファイルを確認してください。

OSS を後続の Installer セッションでインストールする場合は、OSS リポジトリを手動で作成する必要があります。Oracle Net8 の README ファイルの指示に従って作成してください。

インストールしたドキュメントの表示

ドキュメントは、HTML 形式または PDF (Adobe Acrobat) 形式でインストールできます。ドキュメントを表示するには、ドキュメント階層の一番上の `index.htm` または `index.pdf` ファイルをオープンします。Installer は、次の規則に従ってドキュメント・ファイルをインストールします。

- 現在の環境に `ORACLE_DOC` が定義されている場合、Installer はそこにファイルをインストールします。
- `ORACLE_DOC` は定義されていないが、`ORACLE_BASE` が定義されている場合、Installer は `$ORACLE_BASE/doc` ディレクトリにファイルをインストールします。
- 現在の環境に `ORACLE_DOC` または `ORACLE_BASE` のどちらも定義されていない場合、Installer は `$ORACLE_HOME/doc` ディレクトリにファイルをインストールします。

共通ドキュメントは、`ORACLE_DOC` ディレクトリに直接インストールされます。オペレーティング・システム固有のドキュメントは、`$ORACLE_DOC/server.806` ディレクトリにインストールされます。

CD-ROM から直接ドキュメントを表示することもできます。

参照： CD-ROM からのドキュメント表示に関する詳細は、『ドキュメント CD-ROM の手引き』を参照してください。

Oracle Information Navigator

Information Navigator は、Oracle ドキュメント CD-ROM で提供される Java ベースの検索およびナビゲーション・ユーティリティです。Java が使用できるブラウザを使用すれば、`index.htm` をオープンすると、Information Navigator が自動的に起動されます。Information Navigator は、CD-ROM から参照するか、インストールしたファイルから参照するかにかかわらず、Oracle 製品ドキュメントで使用できます。オペレーティング・システム固有のドキュメントは、オペレーティング・システム固有のドキュメントおよび製品ドキュメントの両方がインストールされている場合にのみ、Information Navigator からアクセスできます。

Text Viewer

今回の Oracle 配布では、キャラクタ・モードに 1 つ、Motif モードに 1 つの合計 2 つのブラウザが提供されています。ご使用のシステムに使用可能なブラウザがない場合は、これらのブラウザをインストールして使用できます。これらのブラウザは、Java をサポートしていません。

これらのブラウザをインストールするには、「Software Asset Manager」画面から「Oracle Online Text Viewer」を指定して、Installer を実行します。Installer は、Text Viewer を `gtr` (Motif モード) および `gtrc` (キャラクタ・モード) として、`$ORACLE_HOME/orainst` ディレクトリに置きます。

ブラウザを起動するには、`$ORACLE_HOME/orainst` ディレクトリに移動して、次のように入力します。

```
$ ./oraview
```

`oraview` スクリプトは、環境に適合するブラウザを起動します。

アップグレードおよび移行

この章では、Intel UNIX で Oracle Server インストレーションをアップグレードする手順について説明します。この章は、『Oracle8 Server 移行ガイド』と併せて参照してください。そのドキュメントでは、新機能、下位リリースとの互換性、およびアプリケーションの移行問題について説明しています。

- [アップグレード方法の選択](#)
- [アップグレード前のタスク](#)
- [Oracle Server のアップグレード](#)
- [アップグレード後のタスク](#)

アップグレード方法の選択

アップグレードとは、以前のリリースの Oracle Server から新しいリリースへ移行することです。これによって、ソフトウェアは必ずアップグレードされます。アップグレード対象の Oracle Server リリースによっては、データベース・オブジェクトのアップグレードとデータベースの移行が必要な場合もあります。ご使用のシステムに必要なその他の手順の詳細は、[図 5-1](#) を参照してください。

定義

ソフトウェアのアップグレード

ソフトウェアをアップグレードすると、以前のリリースの Oracle Server がインストールされていたシステムに、今回のリリースの Oracle8 ソフトウェアがインストールされます。ソフトウェアのアップグレードには、製品データベース・オブジェクトのアップグレードが必要な場合もあれば、必要でない場合もあります。ソフトウェアのアップグレードによって、データベースに保存されているデータやデータ・ディクショナリが変更されることはありません。

注意： パッチ・インストレーション以外の場合は、既存のインストレーションとは別の ORACLE_HOME ディレクトリでソフトウェアのアップグレードを行うことをお勧めします。

データベース・オブジェクトのアップグレード

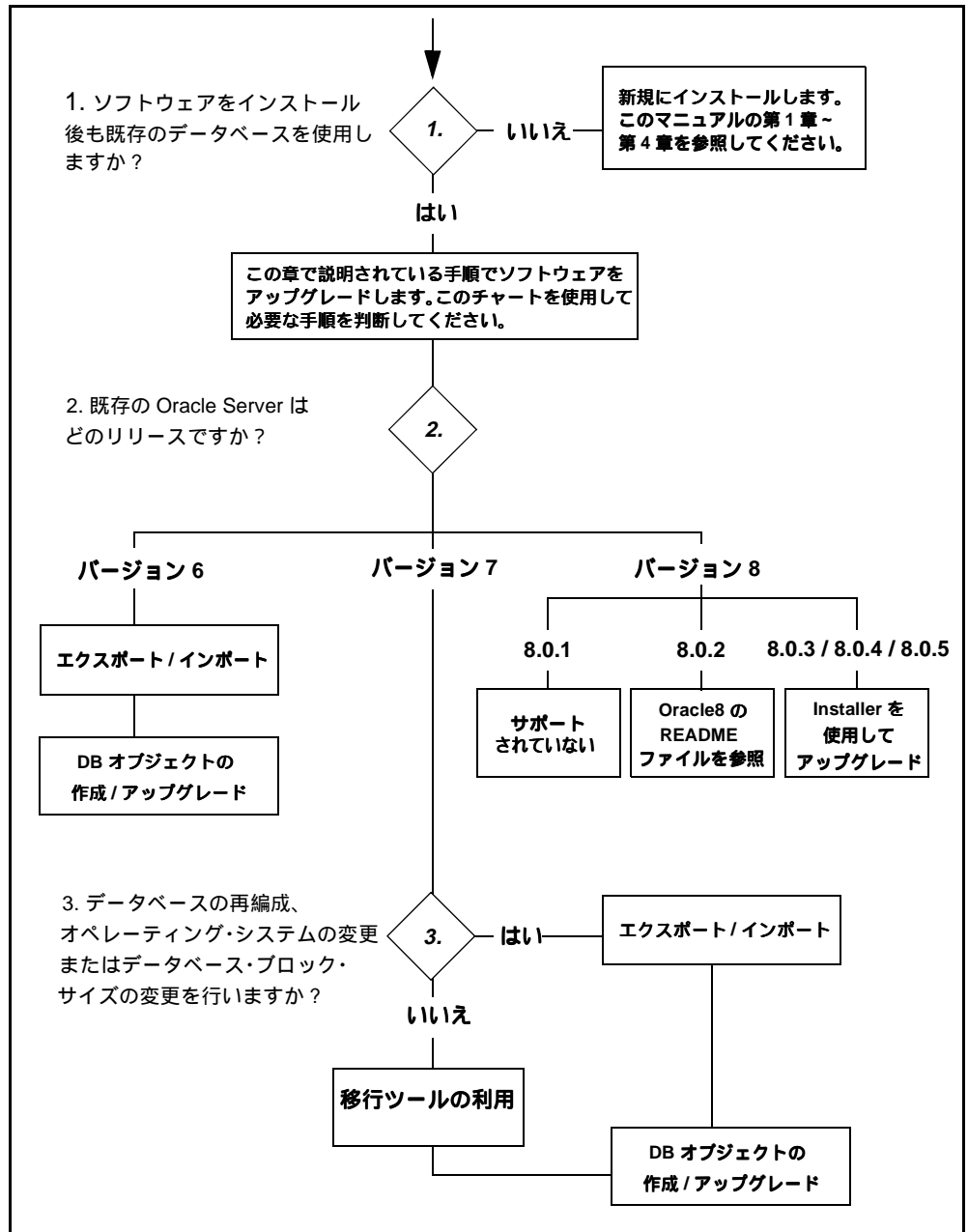
Oracle 製品の中には、内部用のデータベース・ロール、ビュー、表または索引が使用されている場合があります。そのため、これらのデータベース・オブジェクトは、通常、主要なアップグレード（たとえば、ビューがもっと多くの情報を提供するように変更された場合）と同時にアップグレードする必要があります。データベース・オブジェクトをアップグレードする必要があるかどうかを判断するには、5-19 ページを参照してください。

データベースの移行

データベースを移行すると、既存のデータベースを異なるリリースの定義に準拠させるため、データ・ディクショナリおよびその他の制御構造体に変更されます。Oracle7 から Oracle8 のように異なる Oracle Server バージョン間で移行する場合、移行とともにソフトウェアのアップグレードも行われます。Oracle8 リリース間では、移行できません。

移行するには、Migration Utility を使用して既存データベースの構造を変換するか、またはエクスポート／インポートを実行して、あるデータベースから別のデータベースの構造にデータをコピーします。

図 5-1 適切なアップグレード方法の判断



制限事項およびその他の考慮事項

アップグレードおよびダウングレード・スクリプトの新しいネーミング規則

Oracle8 リリース 8.0.6 から、アップグレードおよびダウングレード・スクリプトのネーミング規則が新しくなっています。スクリプト名には、CAT*.SQL 形式を使用しません。新しいネーミング規則のスクリプトを使用すると、あるリリースから別のリリースへ直接移行することができます。新しい名前は、アップグレード用のスクリプトには U*.SQL 形式、ダウングレード用のスクリプトは D*.SQL 形式です。次の 2 つの表に、アップグレード用およびダウングレード用の新しいスクリプト名を示します。

表 5-1 アップグレード・スクリプト

8.0.6 へアップグレードする対象	実行するスクリプト
8.0.2	U0800020.SQL
8.0.3	U0800030.SQL
8.0.4	U0800040.SQL
8.0.5	U0800050.SQL

表 5-2 ダウングレード・スクリプト

8.0.5 からダウングレードする対象	実行するスクリプト
8.0.3	D0800030.SQL
8.0.4	D0800040.SQL
8.0.5	D0800050.SQL

Oracle Server バージョン 6 からのアップグレード

バージョン 6 の Oracle Server から Oracle8 Server に直接移行することはできません。バージョン 6 から Oracle8 へ移行する場合は、まず Oracle7 リリース 7.1.4 以上に移行する必要があります。

移行およびブロック・サイズ

Migration Utility を使用するには、Oracle7 Server と Oracle8 Server のデータベース・ブロック・サイズが同じである必要があります。Oracle7 の initsid.ora ファイルに DB_BLOCK_SIZE パラメータのエントリがある場合は、その設定を変えないでください。Oracle8 Server の DB_BLOCK_SIZE を変更する場合は、エクスポート / インポートを行う必要があります。

オペレーティング・システム間での移行

Oracle Server バージョン間のみでなく、オペレーティング・システム間で移行する場合も、エクスポート / インポートを行う必要があります。移行元と移行先のオペレーティング・システムが異なる場合、Migration Utility は使用できません。

所要時間

エクスポート / インポートは、既存のデータベースから新しいデータベースへデータをコピーするため、Migration Utility より処理速度が遅くなります。特に大規模データベースの場合は、既存データベースのデータ・ディクショナリのみを変更するため、Migration Utility の方が高速です。高い可用性が必要なデータベースの場合は、Migration Utility が最適です。

システム・リソース

エクスポート / インポートを行うには、移行する場合よりも多くのシステム・リソースが必要になります。これは、エクスポートしたデータをディスクに書き込んで、エクスポート・バッファ用にメモリーを割り当てる必要があるからです。

DG/UX Intel 上の移行

DG/UX Intel 上で、Oracle7 リリース 7.3.4 から Oracle8 リリース 8.0.6 へ移行する場合、移行の前に Oracle7 リリース 7.3.4 にリスナー・パッチ #619509 を適用しておく必要があります。リスナー・パッチは、Oracle8 リリース 8.0.6 の CD-ROM の中の patch_bug619509 ディレクトリの README ファイルに含まれています。

アップグレード前のタスク

Oracle8 Server にアップグレードする前に、次のタスクを行います。

- ❑ Oracle8 Server の環境設定を確認する
- ❑ 既存 Oracle データベースのバックアップを取る
- ❑ Oracle 製品のインストール前のタスクを行う
- ❑ Oracle8 へ移行するために必要なパッチを適用する (DG/UX Intel の場合)
- ❑ アップグレード前のタスクを行う
- ❑ Migration Utility を準備する
- ❑ データベース全体をエクスポートする

▶ Oracle8 Server の環境設定を確認する

Oracle8 Server をインストールする環境が、インストールの要件を満たしていることを確認します。

1. 第 1 章「要件および機能」に記載されているシステム要件、および第 2 章「環境設定」の要約表を参照して、環境が Oracle8 のすべての要件を満たしていることを確認します。

注意： 同じ oracle アカウント下に複数の Oracle Server がインストールされているシステムでは、環境がアップグレード対象の Oracle Server 用に設定されている必要があります。環境変数 ORACLE_HOME、ORACLE_SID および PATH は、特に重要です。

2. 現在インストールされているすべての製品のリストを作成します。このリストは、アップグレードの後半で必要です。インストールされている製品のリストを作成するには、\$ORACLE_HOME/orainst/unix.rgs ファイルを印刷します。Installer は、このファイルを、インストールされている製品およびバージョン番号のレジストリとして使用します。

注意： Installer を使用せずにインストールした製品名は、unix.rgs ファイルに保存されません。

» 既存 Oracle データベースのバックアップを取る

アップグレードを行う前に、Oracle データベースのフルバックアップを取ります。完全にバックアップを取っておくと、アップグレード中にエラーが起きてもデータベースを回復できます。

警告： オラクル社では、部分バックアップの使用をお勧めしません。また、サポートもしません。

バックアップは、正常に停止されたデータベースから取ってください。SHUTDOWN IMMEDIATE または SHUTDOWN ABORT を使用して、システムを強制的に停止させる必要がある場合は、データベースを制限モードで再起動した後、NORMAL で停止してください。バックアップを取り終わっても、移行が終了するまでは Oracle8 Server を再起動しないでください。

参照： 詳細は、『Oracle8 Server 管理者ガイド』の「データベースのバックアップ」を参照してください。

» Oracle 製品のインストール前のタスクを行う

リリース 8.0.6 で提供される製品と、インストールの制限事項および要件については、[表 1-9](#) ~ [表 1-20](#) を参照してください。

» Oracle8 へ移行するために必要なパッチを適用する（DG/UX Intel の場合）

DG/UX Intel システムで、Oracle7 リリース 7.3.4 から Oracle8 リリース 8.0.6 へ移行する場合は、Oracle7 の環境にリスナー・パッチ #619509 を適用してください。詳細は、[patch_bug619509](#) ディレクトリの README ファイルを参照してください。パッチを適用した後、リスナーを含むすべてのクライアント実行ファイルを再リンクする必要があります。

» アップグレード前のタスクを行う

既存の Oracle8 Server をアップグレードする前に、アップグレード前のタスクをすべて行います。

Oracle8 Server

Oracle Server は、アップグレードする前に停止する必要があります。停止しないと、アップグレードを開始したときに Installer が Oracle Server を自動的に停止します。

Installer は、ご使用の環境に基づいてアップグレードするデータベースを決めます。環境変数 ORACLE_HOME および ORACLE_SID が、アップグレードするデータベースに設定されていることを確認してください。

参照： リリース 8.0.6 にアップグレードする際の問題点および制限事項の詳細は、『Oracle8 Server 移行ガイド』を参照してください。

Oracle Parallel Server

Oracle Parallel Server をアップグレードする場合は、この章の指示に従って、まず第 1 ノードをアップグレードします。第 1 ノードをアップグレードした後に、今回のリリースの Installer セッションを起動して「Install Oracle8 on Cluster」オプションを選択し、その他のノード上にある製品のソフトウェアをアップグレードします。

Oracle Net8

既存の SQL*Net または Oracle Net8 のリスナーを停止してから、インストレーションを開始します。

► Migration Utility を準備する

Migration Utility を使用してデータベースを移行する場合は、このタスクを行う必要があります。Migration Utility を使用するべきかが分からない場合は、5-2 ページの「アップグレード方法の選択」を参照してください。エクスポート / インポートによってデータベースを移行する場合は、5-18 ページの「エクスポート / インポート」を参照してください。

Migration Utility のインストール

今回のリリースで提供されている Installer を使用して、Migration Utility を Oracle8 配布から既存の ORACLE_HOME ディレクトリにインストールします。

1. 今回のリリースで提供されている Installer を起動して、「Installation Options」画面で「Migrate from ORACLE7 to ORACLE8」オプションを選択します。
2. プロンプトが表示されたら、Oracle7 の ORACLE_HOME ディレクトリのパス名を入力します。
3. 「Migration」画面から「Install Migration Utility」オプションを選択します。
4. 「Software Asset Manager」画面から「Migration Utility: ORACLE7 to ORACLE8」を選択し、「Install」ボタンを選択します。Installer によって、次の製品がインストールされます。
 - Migration Utility の実行ファイル mig (\$ORACLE_HOME/bin ディレクトリ内)
 - migrate.bsq スクリプト (\$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリ内)
 - 必須の NLS ファイル (\$ORACLE_HOME/migrate/nls/admin/data ディレクトリ内)
5. Migration Utility のインストールが終了すると、Installer はその旨を通知します。

注意: root.sh スクリプトを実行する旨のメッセージは無視してください。

6. インストールされている Oracle7 製品のリストがない場合は、「Software Asset Manager」画面の「Installed Products」ウィンドウを使用してリストを作成します。このリストは、移行作業の後半に役立ちます。
7. Installer を終了します。

SYSTEM 表領域の領域の検証

Oracle8 データベースの SYSTEM 表領域には、同等の Oracle7 データベースの 1.5 倍の領域が必要です。データベースを移行する前に、Oracle7 データベースに十分な大きさの SYSTEM 表領域があることを確認してください。

`initSID.ora` がデフォルト・ディレクトリの `$ORACLE_HOME/dbs` にある場合は、次のようにコマンド行から Migration Utility を実行して、使用可能な領域を確認できます。

```
$ mig SPOOL='filename' CHECK_ONLY=TRUE
```

`initSID.ora` がデフォルト・ディレクトリの `$ORACLE_HOME/dbs` にない場合は、移行コマンドでパラメータ `PFILE` を指定する必要があります。

```
$ mig PFILE='initSID.ora_file' SPOOL='filename' CHECK_ONLY=TRUE
```

■ データベース全体をエクスポートする

エクスポート / インポートによってデータベースを移行する場合のみ、このタスクを行います。

移行前のデータベースで提供されている Export ユーティリティを使用して、データベース全体をエクスポートします。Export ユーティリティおよび使用可能なコマンド行オプションの詳細は、『Oracle8 Server ユーティリティ』の第 1 章「Export」を参照してください。

注意： 異なるオペレーティング・システム上のデータベースにエクスポートする場合は、`exp` コマンドに `RECORDLENGTH` パラメータを指定する必要があります。Intel UNIX の場合、デフォルトのレコード長は 32,768 バイトです。

Oracle Server のアップグレード

Oracle Server をアップグレードするには、次のタスクを行います。

- ❑ 新しい Oracle8 Server の環境変数を設定する
- ❑ 新しい ORACLE_HOME ディレクトリに Oracle8 Server をインストールする
- ❑ パラメータ・ファイルを更新する
- ❑ データベースを移行する（必要な場合）
- ❑ Oracle8 Server をアップグレードする（NCR MP-RAS の場合）
- ❑ データベース・オブジェクトをアップグレードする
- ❑ OFA 準拠のディレクトリ構造にデータベース・ファイルを再配置する

▶ 新しい Oracle8 Server の環境変数を設定する

oracle アカウントの .profile または .login ファイルに、次の環境変数を設定します。

LD_LIBRARY_PATH

新しい Oracle8 Server の /usr/lib および \$ORACLE_HOME/lib ディレクトリを追加します。

ORACLE_HOME

新しい ORACLE_HOME ディレクトリ（ディレクトリが存在しない場合は Installer によって作成される）のパス名を設定します。OFA 準拠の場合、新しいディレクトリを既存の ORACLE_HOME ディレクトリと同じディレクトリ構造レベルで作成する必要があります。たとえば、既存の ORACLE_HOME が /u01/app/oracle/product/8.0.5 の場合、今回リリースの ORACLE_HOME は /u01/app/oracle/product/8.0.6 に設定します。

ORACLE_SID

Oracle8 のインスタンスおよびデータベースの名前を変更しない場合は、既存の Oracle Server のインスタンス名または sid を設定します。Oracle8 のインスタンス名を変更する場合は、ORACLE_SID に新しい sid を設定します。

PATH

既存の \$ORACLE_HOME/bin の前に、新しい \$ORACLE_HOME/bin のフルパス名を追加します。

ファイルを編集した後に、.profile または .login ファイルに基づいて現行の環境を更新してください。

▶▶ 新しい ORACLE_HOME ディレクトリに Oracle8 Server をインストールする

今回のリリースで提供されている Installer を使用して、新しい ORACLE_HOME ディレクトリに Oracle8 ソフトウェアをインストールします。この Installer セッション中に、データベース・オブジェクトを作成しないでください。

1. 次のように入力して、今回のリリースで提供されている Installer を起動します。

```
$ ./orainst /m
```

参照： Installer 実行の詳細は、[第3章「インストレーションのタスク」](#)を参照してください。

2. 「Installation Activity Choice」画面で、「Install, Upgrade, or De-Install Software」オプションを選択します。
3. 「Install New Product - Do Not Create DB Objects」または「Add/Upgrade Software」のどちらかを選択します。
4. プロンプトが表示されたら、新しい Oracle8 Server の ORACLE_HOME ディレクトリを入力します。
5. 「Software Asset Manager」画面で、インストールする製品を選択します。「Install」ボタンを選択して、インストレーションを開始します。
6. 続いて表示されるプロンプトに答えて、作業を続けます。
7. ソフトウェアのアップグレードが終了したら、Installer を終了します。

▶▶ パラメータ・ファイルを更新する

既存のデータベース・ファイルと比べて、Oracle ソフトウェアの新しいディレクトリに合わせて、Oracle Server パラメータ・ファイルを変更します。

1. `initsid.ora` ファイルを、既存のディレクトリから適切な Oracle8 ディレクトリ構造の位置へコピーします。

このマニュアルの OFA 推奨事項に従っている場合、新しいディレクトリは `$ORACLE_BASE/admin/sid/pfile` になります。データベースが OFA に準拠していない場合、ディレクトリは、`$ORACLE_HOME/dbs` になります。

インスタンス名を変更する場合は、`initsid.ora` ファイル名も変更します。データベース名 (DB_NAME) は変更できません。

2. `initSID.ora` ファイルに記述されたパス名に含まれているすべての疑問符 (?) または アットマーク (@) を、`ORACLE_HOME` ディレクトリのフルパス名に変更します。たとえば、次の行を変更するとします。

```
USER_DUMP_DEST = ?/admin/udump
```

前述の行を次のように変更します。

```
USER_DUMP_DEST = /u01/oracle/admin/udump
```

疑問符は `ORACLE_HOME` の現在の設定値として解釈されるため、`initSID.ora` ファイルにそのまま残しておくと、Oracle8 Server は更新後の環境でファイルを見つけることができなくなります。

3. `CONTROL_FILES` パラメータ・エントリが、次の形式になっていることを確認します。

```
CONTROL_FILES = (location_of_control_files)
```

`CONTROL_FILES` パラメータを作成または変更して、Oracle8 制御ファイルが保存されるディレクトリのフルパス名を設定します。ここでは、Oracle8 Server の制御ファイルのディレクトリを指定しているだけなので、既存の制御ファイルを移動または変更しないように注意してください。

注意： データベースを移行する場合、指定する制御ファイルのディレクトリは空である必要があります。実際の制御ファイルは、データベース移行時に再作成されます。

4. `initSID.ora` ファイル内に `ifile` (インクルード・ファイル) エントリがある場合、`ifile` エントリは確認が必要な別のファイル (通常は、`configdbname.ora` ファイル) を指定します。`ifile` エントリに指定されているファイルを検索し、`initSID.ora` ファイルと同じディレクトリにコピーします。`ifile` エントリが新しいバージョンのファイルを指定するように更新します。`ifile` エントリは、相対パスではなく絶対パス名を指定してください。

`initSID.ora` ファイルと同様に、`ifile` (インクルード・ファイル) を編集します。

- パス名にあるすべての疑問符 (?) を `ORACLE_HOME` ディレクトリのフルパス名に変更します。
- すべての `CONTROL_FILES` エントリに新しい制御ファイルのフルパス名を設定します。
- データベース名を変更する場合は、`DB_NAME` パラメータおよびファイル名を変更します。

5. Oracle8 の `initSID.ora` ファイルの他の変更点については、『Oracle8 Server 移行ガイド』の付録 D「Oracle8 INIT.ORA の変更点」を参照してください。

■ データベースを移行する（必要な場合）

データベースを移行する必要がある場合は、Migration Utility またはエクスポート / インポートのどちらかを使用します。両方は使用しないでください。データベースを移行する必要がある場合は、5-19 ページの「データベース・オブジェクトをアップグレードする」へ進んでください。

Migration Utility

Migration Utility の実行 Oracle7 の ORACLE_HOME ディレクトリにインストールされている Migration Utility を実行します。Migration Utility は、コマンド行から、または今回の Oracle8 リリースで提供されている Installer を使用して実行できます。Installer を使用して Migration Utility を実行する場合は、次の手順に従います。

1. 環境変数 ORACLE_HOME、ORACLE_SID および PATH を、Oracle7 インストレーションを参照するように設定します（ソフトウェアをアップグレードする前に、これらの環境変数を今回の Oracle8 インストレーション用に設定したことを思い出してください）。
2. 環境変数 ORA_NLS33 を、\$ORACLE_HOME/migrate/nls/admin/data ディレクトリに設定します。
3. 制御ファイルおよび `initSID.ora` ファイルの位置を確認しておいてください。
4. 今回のリリースで提供されている Installer を起動します。「Installation Activity」画面で、「Install, Upgrade, or De-Install Software」オプションを選択します。
5. 「Installation Options」画面で、「Migrate from ORACLE7 to ORACLE8」オプションを選択します。
6. 「Migration」画面で、「Run Migration Utility」オプションを選択します。
7. プロンプトが表示されたら、移行するデータベースの ORACLE_SID を入力します。
8. 「Software Asset Manager」画面で「Migration Utility: ORACLE7 to ORACLE8」を選択し、「Install」ボタンを選択します。

プロンプトが表示されたら、Migration Utility を起動するために必要な情報を入力します。表 5-3 に、プロンプトおよびプロンプトに関する追加情報を示します。

表 5-3 Migration Utility のプロンプト

プロンプト	情報
Enter <i>sid</i>	移行するデータベースのインスタンス名または <i>sid</i> を入力します。
Do you want to be prompted for all command options?	すべてのデフォルト値が使用できることを確認している場合以外は、Yes と応答します。
Spool output?	Migration Utility の出力をスプールすると、移行時に実行した処理が記録されます。このオプションを指定しない場合、標準出力にのみ出力されます。
Space-check only?	Migration Utility では、SYSTEM 表領域に十分な領域があるかどうかを確認できます。このオプションを指定すると、Migration Utility は領域を確認するのみで、移行は実行しません。
DB_NAME = <i>sid</i> ?	データベース名が <i>sid</i> と同じ場合（通常、単一インスタンスでは同じ）に指定します。
Changing database name?	移行時にデータベース名を変更する場合に指定します。
PFILE	<i>sid</i> データベースで使用される <code>init.ora</code> パラメータ・ファイルのパスおよびファイル名を入力します。
NLS_NCHAR	NLS_NCHAR の値と作成したデータベースの値が異なる場合は、正しい NLS_NCHAR の値を入力します。
MULTIPLIER	MULTIPLIER の値と作成したデータベースの値が異なる場合は、正しい MULTIPLIER の値を入力します。
Change character set?	移行時に格納キャラクタ・セットを変更する場合は、新しいキャラクタ・セットを入力します（有効なキャラクタ・セットは、 付録 C「各国語サポート」 を参照）。
Skip space checking?	SYSTEM 表領域に Oracle8 データ構造を入れるだけの十分な領域があることを確認している場合は、Migration Utility が領域を計算しないように指定できます。

表 5-3 Migration Utility のプロンプト

プロンプト	情報
Information	Installer によって、Migration Utility の起動に使用するコマンドがすべて表示されます。コマンドの一部を変更したい場合は、「Back」ボタンを選択して、この表のプロンプトへの応答を再入力してください。
Last chance...	移行処理を確認または中断します。このプロンプトの後でも移行処理は中断できますが、警告が表示されます。ALTER DATABASE 文を発行した後（5-17 ページ）は、移行処理を中断できません。
Information	Installer によっては、Migration Utility が正常に実行されたかどうか通知されます。
Information	ORACLE_HOME ディレクトリに他にもデータベースがある場合は、「Software Asset Manager」画面に戻り、Migration Utility を選択してもう一度「Install」ボタンを選択すると、データベースを移行できます。
Rename or remove control files.	Installer によって、Oracle7 データベースで使用したすべての制御ファイルを改名または削除するように指示されます。
Run the root.sh script.	このプロンプトを無視して、データベース移行後に root.sh スクリプトを実行できます。

移行の終了 Oracle7 データベースを Oracle8 へ移行する処理を終了するには、次の手順に従います。

参照：『Oracle8 Server 移行ガイド』では、Migration Utility およびそのコマンド・オプションの詳細を説明しています。『Oracle8 Server 移行ガイド』の第 5 章「データベースの移行後」を参照してください。

1. 変換ファイル convsid.dbf を、Oracle7 の \$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリから Oracle8 の \$ORACLE_HOME/dbs ディレクトリへ移動します。Oracle8 の sid が Oracle7 の sid と異なる場合は、変換ファイルを改名します。他の方法で変換ファイルを変更しないでください。
2. パラメータ・ファイルの CONTROL_FILES エントリが、制御ファイルのあるディレクトリを指定していないことを確認してください。

3. データベースを変換します。

DG/UX Intel、SCO UnixWare および Solaris Intel の場合

```
SVRMGR> STARTUP NOMOUNT
SVRMGR> ALTER DATABASE CONVERT;
SVRMGR> ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS;
SVRMGR> @$ORACLE_HOME/rdbms/admin/cat8000.sql
```

NCR MP-RAS の場合

```
SVRMGR> STARTUP NOMOUNT
SVRMGR> ALTER DATABASE CONVERT;
SVRMGR> CREATE CONTROLFILE REUSE DATABASE database
LOGFILE [SPECS]
RESETLOGS
DATAFILE [DATAFILE SPECS]
[ MAXLOGFILES integer
| MAXLOGMEMBERS integer
| MAXLOGHISTORY integer
| MAXDATAFILES integer
| MAXINSTANCES integer
| {ARCHIVELOG | NOARCHIVELOG} ] ...
SVRMGR> ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS;
SVRMGR> @$ORACLE_HOME/rdbms/admin/cat8000.sql
```

警告： データベースの変換は、やり直すことができません。また、Oracle8 から Oracle7 への移行はできません。

エクスポート / インポート

新しいデータベースの作成 Installer で作成したデータベースは、テスト目的で設計されているため、機能が制限されています。オラクル社では、Server Manager を使用してデータベースを手動で作成することをお勧めします。データベース作成の詳細は、『Oracle8 Server 管理者ガイド』を参照してください。

エクスポートされたファイルのインポート 以前にエクスポートしたファイルをインポートするには、インポート対象のデータベースに提供されている Import ユーティリティを使用します。Oracle8 Server にデータをインポートする場合の詳細は、『Oracle8 Server ユーティリティ』の第 2 章「Import」を参照してください。

注意： 異なるオペレーティング・システム上のデータベースからインポートする場合は、`imp` コマンドで `RECORDLENGTH` パラメータを指定します。レコード長は、エクスポート時に使用したレコード長と一致している必要があります。Intel UNIX の場合、デフォルトのレコード長は 32,768 バイトです。

▶ Oracle8 Server をアップグレードする（NCR MP-RAS の場合）

警告： NCR MP-RAS の場合、8.0.3 から 8.0.6 へのアップグレードは、やり直すことができません。下記のステップを行う前に、必ずシステムのフルバックアップを取っておいてください。

Oracle8 Server を、Oracle 8.0.3 からそれ以上のリリース（リリース 8.0.6 など）へアップグレードした後に、NCR MP-RAS システムでは次の追加ステップを実行する必要があります。

```
SVRMGR> STARTUP NOMOUNT
SVRMGR> CREATE CONTROLFILE
SVRMGR> CREATE CONTROLFILE REUSE DATABASE database
LOGFILE [SPECS]
RESETLOGS
DATAFILE [DATAFILE SPECS]
[ MAXLOGFILES integer
| MAXLOGMEMBERS integer
| MAXLOGHISTORY integer
| MAXDATAFILES integer
| MAXINSTANCES integer
| {ARCHIVELOG | NOARCHIVELOG} ] ...
SVRMGR> ALTER DATABASE OPEN RESETLOGS
```

注意： 8.0.4、8.0.5 または 8.0.6 へ変換する場合は、前述のステップの実行は必要ありません。

■ データベース・オブジェクトをアップグレードする

Oracle 製品には、データベースを使用して情報を保存および処理するものがあります。たとえば、Oracle ConText オプションは、データベース表にディクショナリを保存します。内部的に Oracle 製品で作成した表、索引およびその他のオブジェクトを、データベース・オブジェクトと呼びます。データベース・オブジェクトは、製品のソフトウェアがアップグレードされた時点でアップグレードする必要があります。

データベース・オブジェクトをアップグレードしない場合

通常、リリース 2.1.1 からリリース 2.1.2 など小幅なアップグレードの場合、データベース・オブジェクトはアップグレードする必要はありません。2.1 から 2.2 または 3.0 など大幅なアップグレードの場合は、データベース・オブジェクトをアップグレードする必要があります。この一般的な規則に従わない製品には、アップグレード・ノートに特別な指示が記載されています。詳細は、表 1-9 ~ 表 1-12 を参照してください。

データベース・オブジェクトのアップグレード方法

データベース・オブジェクトをアップグレードするには、「Installation Activity Choice」画面で「Create/Upgrade Database Objects」オプションを選択します。

1. 今回のリリースで提供されている Installer を起動します。
2. 「Installation Activity Choice」画面で、「Create/Upgrade Database Objects」オプションを選択します。
3. 「Database Options」画面で、「Upgrade Database Objects」オプションを選択します。
4. プロンプトが表示されたら、新しい ORACLE_HOME ディレクトリを入力します。
5. プロンプトが表示されたら、アップグレードするデータベースの ORACLE_SID を入力します。
6. 「Software Asset Manager」画面でデータベース・オブジェクトをアップグレードする製品を選択して、「Install」ボタンを選択します。
7. 「DB Upgrade」画面で、アップグレードするデータベースのバージョンを選択します。
8. 「Database Action」画面で、次のように選択します。
 - 以前のリリースでインストールされた製品ではなく、今回初めてインストールする製品の場合は、「Create Product DB Objects」オプションを選択します。

- 以前のリリースでインストールされた製品の場合は、「Upgrade Existing Product DB Objects」オプションを選択します。

警告： 以前のリリースでインストールされた製品の場合は、「Create Product DB Objects」オプションを選択しないでください。アップグレードの準備中に作成したインストール済みの製品リストを、必要に応じて参照してください。

データベース・オブジェクトのアップグレードが終了したら、Installer を終了します。ORACLE_HOME ディレクトリにあるすべてのデータベースに対して、このタスクを行います。その場合、Installer を再起動するたびに、適切な ORACLE_SID を指定してください。

▶ OFA 準拠のディレクトリ構造にデータベース・ファイルを再配置する

このタスクは必須ではありませんが、今後のメンテナンスおよびアップグレードを簡素化するために行うことをお勧めします。このタスクを行うと、ディレクトリ構造の中で、データベース・ファイルをソフトウェア・ファイルおよび管理ファイルから分離できます。こうしておけば、将来アップグレードするときにソフトウェアを新しいディレクトリにインストールしたり、`initSID.ora` ファイルを使用してインスタンスを既存のデータベース・ファイルに指定したりできます。アップグレードした本番環境が整ったら、以前の Oracle ソフトウェアを削除して、ディスク領域を再利用します。

警告： 以前の Oracle ソフトウェアを保持している場合は、アップグレードしたデータベースをそのソフトウェアを使用して絶対に起動しないでください。起動すると、データベース・ファイルが破壊される場合があります。アップグレードしたデータベースを起動する場合は、必ず、新しい ORACLE_HOME ディレクトリの実行ファイルを使用してください。

データベース・ファイルを再配置するには、次の手順に従います。

1. 新しい ORACLE_HOME ディレクトリに移動します。
2. Server Manager を起動し、次の SQL コマンドを実行してデータベース・ファイルおよびログ・ファイルのリストを生成し、ファイル（次の例では `file.list`）にファイル名を書き込みます。

```
SVRMGR> CONNECT INTERNAL
SVRMGR> SPOOL file.list
SVRMGR> SELECT * FROM v$dbfile;
SVRMGR> SELECT * FROM v$logfile;
```

3. SHUTDOWN NORMAL コマンドを使用して、データベースを停止します。
4. アップグレードしたデータベースのバックアップを取ります。アップグレードの準備中に取ったバックアップは、バックアップを取ってからデータベースをオープンしていい限り利用できます。
5. 制御ファイルを新しいディレクトリにコピーします。このマニュアルの OFA 推奨事項に従っている場合、新しいディレクトリは `db_mount_point[1-3]/oradata/db_name` です。ファイルを新しいディレクトリにコピーする構文は、次のとおりです。

ソフトウェアの マウント・ポイント	1 番目のデータベース・ マウント・ポイント	データベース名
\$ cp /u01/oracle/dbs/cntrlprod.dbf	/u02/oradata/prod/control01.ctl	
既存の Oracle7 制御ファイル		OFA 準拠の 新しいファイル

フルパス名を使用します。新しいディレクトリを指定する場合は、`$ORACLE_HOME` または `$ORACLE_BASE` などの環境変数をパスに使用しないでください。

6. パラメータ・ファイル (`init.ora` または `configdbname.ora`) の `CONTROL_FILES` エントリを変更して、制御ファイルの新しいディレクトリを反映します。
7. データ・ファイルおよびログ・ファイルを新しいディレクトリにコピーします。新しいファイルのあるディレクトリは、省略せずにフルパス名で指定します。

このマニュアルの OFA 推奨事項に従っている場合、新しいディレクトリは `db_mount_point[1-3]/oradata/db_name` です。コピーするファイルのリストについては、`file.list` を参照してください。

今後の参照用に、新しいファイルのフルパス名も記録しておいてください。

8. Server Manager から STARTUP MOUNT コマンドを実行して、データベースがマウントされて、クローズされたことを確認します。
9. ALTER DATABASE コマンドを実行して、データベースを新しいファイル位置で更新します。`file.list` を参照して、名前を変更するファイルを確認します。新しいファイル名は、手順 7 で記録したファイル名のリストを参照してください。

ALTER DATABASE RENAME FILE コマンドの構文は、次のとおりです。

```
SVRMGR> ALTER DATABASE
2> RENAME FILE '/u01/oracle/dbs/log1.dbf'
3> TO '/u02/oradata/prod/log01.dbf';
```

再配置する必要があるすべてのファイルに対して、このコマンドを繰り返します。
RENAME FILE 句には、完全なフルパス名を指定する必要があります。

10. ALTER DATABASE OPEN コマンドを実行して、データベースをオープンします。

11. すべてのデータベース・ファイルおよびログ・ファイルの名前が、指定した新しい名前になっていることを確認します。

手順 2 で file.list を作成したときと同じ方法で、newfile.list ファイルを作成します。file.list 内のすべてのデータベース・ファイルおよびログ・ファイルは、新しい位置で newfile.list ファイルに出力されます。

参照： 詳細は、『Oracle8 Server 管理者ガイド』の「データファイルの管理」を参照してください。

12. データベース・ファイルが正常に再配置されており、init`sid`.ora ファイル、ログ・ファイルおよび制御ファイルが新しいディレクトリに保存されていることを確認して、以前のデータベース・ファイルを削除します。

アップグレード後のタスク

- インストール後のタスクを確認する
- ユーザーに通知する

▶ インストール後のタスクを確認する

1. `root.sh` スクリプトを実行して、アップグレードを終了します。

参照： 詳細は、[第 4 章「Oracle8 システムの構成」](#)を参照してください。

2. ソフトウェアをアップグレードした段階で終了していないインストール後のタスク（オンライン・ドキュメントのインストールなど）をすべて実行します。詳細は、[第 4 章「Oracle8 システムの構成」](#)を参照してください。

▶ ユーザーに通知する

ユーザーに対して、オペレーティング・システムからログアウトし、再びログインするよう通知します。これによって、アップグレードしたデータベースの新しい ORACLE_HOME のディレクトリが有効になります。同時に `oraenv` プログラムが実行され、新しい `oratab` ファイル・エントリが読み込まれます。これによって、ユーザーは、アップグレードしたデータベースにアクセスできるようになります。

Oracle Installer の使用

この付録では、初回のインストール以外で Installer を使用方法を説明します。初回のインストールの詳細は、[第 3 章「インストールのタスク」](#)を参照してください。

- [データベース・オブジェクトの作成](#)
- [デフォルトおよびリピート・インストール](#)
- [アップグレードおよびパッチ・セット・インストール](#)
- [Installer のその他の機能](#)
- [トラブルシューティング](#)

データベース・オブジェクトの作成

Installer を使用して、Oracle 製品のデータベース・オブジェクトを作成することができます。データベース・オブジェクトとは、データベース内に保存される表、表領域、ロール、ビュー、索引などの論理構造のことです。Oracle8 Server の場合、データベース・オブジェクトとは、データベースおよびデータ・ディクショナリのことです。

ソフトウェアのインストールとデータベース・オブジェクトの作成は、別々の Installer セッションで行うことをお勧めします。この方法は、両方の作業を同じ Installer セッションで行う場合に比べると複雑にみえますが、Installer セッション中に問題が発生した場合にデバッグが簡単になります。

Installer によって作成されるデータベース・オブジェクト

データベース・オブジェクトは、Installer を使用せずに手動で作成することもできますが、Installer を使用することをお勧めします。それは、Installer を使用すると、オブジェクトが正しく作成され、適切なデータが移入されるためです。

注意： 前述の推奨事項は、データベース（Oracle RDBMS のデータベース・オブジェクト）を作成する際には当てはまりません。データベースを作成する際の推奨事項は、[A-3 ページ](#)の「[Installer によって作成されるデータベース](#)」を参照してください。

デフォルトの使用

一部の製品には、データベース・オブジェクトの作成に関連するプロンプトがあります。データベース・オブジェクトに関連するプロンプトは、通常、次の 3 つのカテゴリに分類されます。

- [オブジェクト位置](#)
- [オブジェクト・サイズ](#)
- [スキーマ所有者](#)

オブジェクト位置

オブジェクト位置は、すべてのデータベースに共通する 1 つの表領域として、SYSTEM 表領域がデフォルトとして指定されます。ただし、SYSTEM がそのままの位置で使用できることはほとんどありません。急速に拡大する表や複数の行の追加および削除が行われる表では、断片化が起きます。その断片化が SYSTEM 表領域で起きますと、パフォーマンスが大幅に低下します。

オブジェクト・サイズ

オブジェクト・サイズは、通常、予想されるサイズおよびシステムの使用方法に応じて決めます。Installer が表示するデフォルト・サイズは、テスト・データベースに適しています。

スキーマ所有者

スキーマ所有者には、特別な理由がない限り、デフォルト値を使用してください。

Installer によって作成されるデータベース

Installer によって作成されたデータベースは、テストのためだけに使用することをお勧めします。デフォルトのデータベースの構造は非常に単純です。OFA に準拠していますが、小型で、特定の環境や使用方法について最適化されていません。作成時には、表領域位置およびサイズをさまざまな値に指定できますが、作成できる表領域は、SYSTEM、ROLLBACK、TEMP、TOOLS および USERS の基本的な 5 種類のみです。

デフォルトおよびリピート・インストール

Installer には、インストール・セッションを簡素化および自動化するために、次の 2 種類の方法が準備されています。

- **デフォルト・インストール・パス**
- **Silent Mode (リピート・インストールの場合)**

デフォルト・インストールでは、初回の Installer プロンプトに対して自動的にデフォルト値を選択するため、応答する回数が最少になります。Silent Mode では、以前の Installer セッション中に記録された応答を使用して、現行のインストールのプロンプトに応答します。この方法は、同様のインストールを何度も実行するときに便利です。

デフォルト・インストール・パス

デフォルト・インストール・パスでは、ORACLE_BASE、ORACLE_HOME および ORACLE_SID の値を求めるプロンプトが表示されます。必要な情報を入力すると、Installer によって「Software Asset Manager」画面が表示され、インストールする製品を指定できます。

表 A-1 に、デフォルト・インストール中に表示されないプロンプト、および Installer が使用する値を示します。

表 A-1 Installer のデフォルト値

Installer プロンプト	デフォルト値
Installer log location	\$ORACLE_HOME/orainst/install.log
SQL log location	\$ORACLE_HOME/orainst/sql.log
Operating system log location	\$ORACLE_HOME/orainst/os.log
Make log location	\$ORACLE_HOME/orainst/make.log
Installation source	CD-ROM
Language	American/English
Root actions	既存の root.sh ファイルへの追加（存在する場合）

Installer を起動する前に、環境変数 DEF_INSTALL を TRUE または FALSE に設定して、デフォルト・インストールを行うか、カスタム・インストールを行うかを指定することもできます。

Silent Mode（リピート・インストールの場合）

リピート・インストールを実行するには、最初のインストール中にレスポンス・ファイルを作成します。後続のインストールで Installer を Silent Mode で実行すると、そのレスポンス・ファイルの応答を使用してインストールが行われます。

注意： Silent Mode は、最初のインストールでインストールした製品と同じ製品またはそのサブセットをインストールする場合にのみ使用します。

Installer を Silent Mode で使用するには、次の手順に従います。

- 最初のインストール時に、Installer が実行中のプロンプトに対する応答をレスポンス・ファイルに記録するように設定します。

\$./orainst /rspdest filename

filename には、Installer が記録するレスポンス・ファイルのフルパス名を指定します。oracle アカウントに書き込み権限があるディレクトリを必ず指定してください。
- 最初のインストール後、レスポンス・ファイルを編集して必要な項目の値を変更します（たとえば、パス名、マウント・ポイント、ORACLE_SID など）。編集には、UNIX テキスト・エディタを使用します。

- レスポンス・ファイルおよびインストールする製品を指定して、Installer を起動します。

```
$ ./orainst /m /rspsrc filename /install products /silent
```

各項目の意味は、次のとおりです。

<i>filename</i>	あらかじめ作成したレスポンス・ファイルのフルパス名を指定します。
<i>products</i>	インストールする製品をコンマで区切って（空白は使用しない）指定します。使用可能な製品およびコマンド行で使用する製品名は、Oracle 配布の <code>orainst/unix.prd</code> ファイルに記述されています。

Installer を Silent Mode で起動するかどうかにかかわらず、環境設定の値を変更して、Installer が README ファイルを表示しないようにできます。README ファイルを表示しないようにするには、Installer を起動する前に、環境変数 `NO_README` を `TRUE` に設定します。

Installer を起動してレスポンス・ファイルを作成し、作成したレスポンス・ファイルを使用して後続のインストールを行うコマンド例を次に示します。例で指定した製品は、Oracle8 Server、Server Manager および Oracle Names Server です。

```
$ ./orainst /m /rspdest resp_806.rsp  
$ ./orainst /m /rspsrc resp_806.rsp /install rdbms,svrmgrl,NAMES /silent
```

アップグレードおよびパッチ・セット・インストール

表 A-2 に、各 Oracle リリース・タイプに対応するリリース・レベルおよびリリース範囲を示します。リリース・タイプに関係なく、アップグレードには Installer を使用します。

表 A-2 アップグレード用語およびリリース・レベル

リリース・タイプ	リリース・レベル	リリース範囲
新規リリースまたは大幅なアップグレード	第 1 レベルおよび第 2 レベル：7.2、7.3、8.0	機能または構造上の大きな変更
アップグレードまたはメンテナンス・アップグレード	第 3 レベル：7.3.2、7.3.3	バグ修正および小さな新規機能
パッチ・セット	第 4 レベル：7.3.3.1、7.3.3.2	バグ修正のみ

新規のリリースおよびメンテナンス・アップグレードは、常に完全なソフトウェア配布となるため、既存の Oracle Server とは別の ORACLE_HOME ディレクトリにインストールする必要があります。パッチ・セットは完全なソフトウェア配布ではないので、常に既存のリリース上にインストールする必要があります。

パッチ・セット

オラクル社パッチ・セット

オラクル社のパッチ・セットは、テストを完全に行って統合した製品修正プログラムで、定期的に配布されます。パッチ・セットでは、バグ修正が提供されるのみで新規の機能は含まれません。そのため、ターゲット・システム上で再評価する必要はありません。

パッチ・セットの内容

パッチ・セットには、セット内のバグ修正によって影響するライブラリのみが含まれます。パッチ・セット内の修正プログラムはすべてテスト済みで、併用できることが検証されています。パッチ・セットに含まれる RDBMS および PL/SQL ライブラリのパッチは影響が小さいので、Oracle Server に対してアプリケーションまたはツールを再評価する必要はありません。

パッチ・セットは累積方式なので、どのプラットフォーム用のパッチ・セットにも同じ一般修正のセットが含まれます。たとえば、パッチ・セット 7.3.3.2 には、パッチ・セット 7.3.3.1 およびそのセット以降のバグ修正が含まれます。Hewlett-Packard 用のパッチ・セット 7.3.3.2 で修正されるバグは、Digital UNIX 用のパッチ・セット 7.3.3.2 で修正されるバグと同じです。ただし、パッチ・セットには、リリースされたプラットフォーム固有のパッチが少数含まれる場合があるので注意してください。

配布されるパッチ・セットに、Installer (orainst) は含まれません。たとえば、パッチ・セット 7.3.3.2 をインストールする場合、基本リリース 7.3.3 の Installer を使用する必要があります。

パッチ・セットのインストール

他のメンテナンス操作と同様に、Oracle ソフトウェアを変更する前にバックアップを取ることをお勧めします。

1. oracle アカウントでログインして、ORACLE_HOME および ORACLE_SID が適切に環境設定されていることを確認します。
2. ダウンロードしたパッチ・セット・ファイルを圧縮解除および復元します。
3. 既存の Oracle Server インスタンスを NORMAL で停止します。
4. 基本リリースで提供された Installer を起動します。ご使用のシステムにインストールされている場合は、\$ORACLE_HOME/orainst ディレクトリに保存されています。インストールされていない場合は、基本リリースの CD-ROM から実行できます。
5. 「Installation Options」画面で、「Add/Upgrade Software」オプションを指定します。
6. プロンプトが表示されたら、再リンクを指定します。
7. 「Software Asset Manager」画面で、「From」ボタンを使用してファイル・ブラウザを表示し、復元したパッチ・セットが保存されているディレクトリに移動します。
8. 「Oracle Server (RDBMS)」を選択してから、「Install」ボタンを選択します。
9. Installer が終了すると、root.sh スクリプトの実行を求めるプロンプトが表示されます。パッチ・セットをインストールした後に、root.sh スクリプトを実行する必要はありません。

注意： Oracle Parallel Server を使用している場合、クラスタのすべてのノード上にパッチ・セットをインストールする必要があります。

パッチ・セットの削除

パッチ・セットを削除する手段は提供されていません。パッチ・セットを削除できるかどうか分からない場合は、パッチ・セットを適用する前に、インストールしたソフトウェアのバックアップを取っておきます。

パッチ・セットを削除する必要がある場合、次のいずれかの手順で行うことをお勧めします（推奨する順に示します）。

- バックアップから ORACLE_HOME ディレクトリを復元します。
- 以前のリリースを再インストールしてから、以前に適用したすべてのパッチ・セット（ただし、削除するパッチ・セットは含まない）を再インストールします。

パッチ・セットを削除した方法に関係なく、発生した問題が次のパッチ・セットで対処されるように、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

Installer のその他の機能

クライアント共有ライブラリの再構築および再リンク

リリース 8.0.3 から対応していますが、ほとんどの Oracle 製品では共有ライブラリが使用されます。共有ライブラリを使用すると、製品に必要な領域が少なくなります。また、再リンクが必要な状況も非常に少なくなります。環境によっては、再リンクのかわりにクライアント共有ライブラリ `libclntsh.so` の再構築が必要になります。

クライアント共有ライブラリの再構築

次の場合、クライアント共有ライブラリの再構築が必要です。

- TCP/IP 以外のプロトコル・アダプタをインストールまたは削除した後
- 暗号コードを使用するために Oracle 製品をリンクする場合（たとえば、Advanced Networking Option をインストールした後は、Advanced Networking Option とサーバーおよびクライアントのアプリケーションを再リンクする必要があります）

Installer は必要に応じて、製品の再リンクおよびクライアント共有ライブラリの再構築を行います。

製品の再リンク

次の場合も再リンクが必要です。

- ソフトウェア・パッチを適用した後
- OSDBA または OSOPER グループの名前のデフォルト (dba) を変更した場合

製品の再リンクを行うには、次の手順に従います。

1. Installer を起動します。
2. 「Installation Activity Choice」画面で、「Perform Administrative Tasks」オプションを選択します。
3. 「Relink Product Executables」オプションを選択します。
4. 「Software Asset Manager」画面が表示されたら、再リンクするすべての製品を選択して「Install」ボタンを選択します。
5. 「Oracle Parallel Server」システムで再リンクを行う場合、すべてのノード上の製品を再リンクする必要があります。

製品の削除

製品を削除する場合、Installer は製品のファイルのみを削除します。データベース・オブジェクト、ディレクトリまたは他の製品によって共有されるライブラリは削除されません。削除する製品のみに必要なライブラリは、Installer によって削除されます。

ステージ領域の作成

ステージ領域は Oracle 配布のローカル・コピーなので、そこから何度でもインストールを実行できます。ステージ領域を作成すると、ソフトウェアを固有のフェーズでインストールおよびロードできます。CD-ROM から直接インストールする場合は、Oracle 配布製品を 1 つのセッションでロードおよびインストールします。

インストールを 1 回のみ実行する場合、またはインストールされている Oracle8 システムの他にステージ領域を作成する十分なディスク領域がない場合は、CD-ROM から直接インストールします。永続ステージ領域から作成およびインストールするには、CD-ROM からインストールするときの約 2 倍のディスク領域が必要です。テンポラリ・ステージ領域はサポートしていません。

ステージ領域を作成した後にファイルを追加することはできません。たとえば、ソフトウェア・パッチのファイルを追加した既存のステージ領域からインストールすることはできません。

トラブルシューティング

インストールの問題は、通常、次のカテゴリのいずれかに分類されます。

- [表示上の問題](#)
- [不十分なディスク領域](#)
- [再リンク時のエラー・メッセージ](#)
- [ステージ領域の問題](#)
- [ユーザー・エラー](#)

表示上の問題

Installer をキャラクタ・モードで OpenWindows のシェルツール (`shelltool`) またはコマンドツール (`cmdtool`) から実行する場合、表示が読みにくい場合があります。

シェルツールの表示を修正するには、次のように入力します。

```
$ shelltool -B Offset_x
```

コマンドツールの表示を修正するには、次のように入力します。

```
$ cmdtool -B Offset_x
```

表示上の問題を永続的に解決するには、`.xdefaults` ファイルに次のように指定します。

```
term.boldStyle: Offset_X
```

画面の再表示

Installer のセッション中に Installer の画面を再表示するには、次のキーを押します。

```
[Ctrl]+[r]
```

不十分なディスク領域

インストール中に領域不足が原因でセッションが終了した場合は、`ORACLE_HOME` ディレクトリを確認して、インストールが中断する前にインストールされたファイルを調べます。インストールした製品のファイルは、削除してください。

`ORACLE_HOME` ディレクトリ内の不要なファイルを削除したら、`df` コマンドを使用して使用可能なディスク領域を確認します。ディスク領域不足の問題を解決するには、既存のディスク領域を解放する、ディスク領域を追加する、またはインストールする製品のサブセットをインストールするという方法があります。

ORACLE_HOME の領域

Installer は、ファイルを ORACLE_HOME に転送するために必要な領域を計算するとき、製品の依存関係も考慮します。十分な領域がない場合は、警告を表示します。

ファイルは、ORACLE_HOME に転送されると、圧縮解除されます。

シンボリック・リンク

Oracle 配布の一部を保存するために ORACLE_HOME 内にシンボリック・リンクを作成した場合、Installer は領域要件を算出する際にこれらのリンクを考慮しません。

シンボリック・リンクが正しく設定され、ORACLE_HOME 内に Oracle 配布をインストールするための十分な領域が確実にある場合、Installer が表示する不十分な領域についての警告は無視してもかまいません。リンクされるディレクトリには、oracle アカウントに読み込みおよび書き込み権限があることを確認してください。

スワップ領域

使用可能なスワップ領域には、物理 RAM の 2 ~ 4 倍の大きさが必要です。UNIX システムで再リンク用にスワップ領域を使用する場合は、スワップ領域のサイズを増やす必要があります。製品の実行ファイルの再リンク中にスワップ領域が不足した場合、Installer はエラー・メッセージを表示し、セッションを中断します。この場合、再インストールの必要はありませんが、スワップ領域のサイズを増やして再リンクしなければなりません。

再リンク時のエラー・メッセージ

再リンク中に、次のエラー・メッセージが表示される場合があります。

メッセージ:	sh: make: Not found
原因:	オペレーティング・システムのプログラム (make) が使用できません。インストールするか、パスの通っている位置に移動してください。
メッセージ:	sh:sh(echodo):cc:Not found
原因:	オペレーティング・システムのプログラム (cc) が使用できません。インストールするか、パスの通っている位置に移動してください。
メッセージ:	ld: fatal error: library not found: <i>library_name</i>
原因:	オペレーティング・システムのライブラリがロードされていません。 <i>library_name</i> に表示されるライブラリをインストールしてください。

未定義シンボル

再リンク時のエラーの多くは、未定義シンボルが原因です。適切なネットワーク・プロトコルなしで Oracle Net8 Protocol Adapter をインストールした場合、シンボルが定義されないことがあります。

たとえば、Oracle SPX/IPX Protocol Adapter のインストールを選択したにもかかわらず、SPX/IPX がインストールされていない場合は、`putmesg` と `getmesg` の未定義シンボルが生じます。

Oracle システムを削除してから、インストールされていないネットワーク・ソフトウェア用のプロトコル・アダプタを選択せずに、Oracle システムを再インストールすると、エラーのほとんどは解決します。

ステージ領域の問題

ステージ領域からインストールする場合、次の問題が発生することがあります。

ファイルの追加

既存のステージ領域にファイルを追加しないでください。既存のステージ領域に製品を追加する場合、またはステージ領域を再作成する必要がある場合は、最初にすべての既存ファイルを削除してから、Installer を使用して新規のファイルをインストールしてください。

ユーザー・エラー

次に、発生しやすい問題および対処方法を示します。

「ファイルを作成できない」

Installer がファイルを作成できないという旨のメッセージを表示した場合、`oracle` アカウントに書き込み権限がないディレクトリにインストールしようとしたことに原因があります。シェル・ウィンドウを使用してインストール先のディレクトリ権限を変更してから、操作し直してください。または、Installer セッションを再起動して、`oracle` アカウントに書き込み権限がある別のディレクトリを指定してください。

「ファイルが見つからない」

Installer がファイルを見つけられない場合、インストール元となる CD-ROM、ステージ領域またはリンク・ディレクトリの位置が正しく指定されているかどうかを調べてください。特に、`ORACLE_HOME` ディレクトリ（インストール先ディレクトリ）をインストールセッション・ソース・ディレクトリに指定していないことを確認してください。

インストールセッション・ソースが正しく指定されていて、リンク・ディレクトリまたはステージ領域からインストールする場合、インストールセッション・ソースを再作成してみてください。

「接続できない」

ネットワーク環境で、マシンにリモート・ログインして Installer を実行すると、次のようなメッセージが表示されることがあります。

```
Xlib: connection to "unixdoc8:0.0" refused by server
Xlib: Client is not authorized to connect to Server
```

この場合、ローカル・マシンにログインしている端末ウィンドウで、次のように入力して接続を認可します。

```
$ xhost + machine_with_Installer
```

次に、リモート・マシン上の Installer を再起動してください。それでも接続できない場合は、Installer を Motif モードではなくキャラクタ・モードで実行してください。

「データベースの作成に失敗した」

Installer がデータベースを作成できないという旨のメッセージを表示した場合、Oracle インスタンスが、インストール中に指定した *sid* (インスタンス名) と同じ *sid* で実行されていないかどうかを確認してください。

```
ps -ef | grep _sid
```

\$ORACLE_HOME/orainst/sql.log ファイルを参照して、他に発生する可能性のある問題がないかを調べます。

「libXm.so...」

次のメッセージは、環境変数 LD_LIBRARY_PATH が正しく設定されていないことを示します。

```
ld.so.1: ./orainst.motif: fatal: libXm.so.3: can't open file: errno=2
Killed
```

LD_LIBRARY_PATH に、\$ORACLE_HOME/lib、および Motif ライブラリを含むディレクトリを設定して、Installer を再起動します。

表示上の問題

画面、ナビゲーション・ボタンまたはコマンドに問題がある場合、環境変数 ORACLE_TERM が正しく設定されていることを調べてください。ORACLE_TERM の設定値は、[第 2 章「環境設定」](#)を参照してください。

「所有者ではない」

\$USER が、現在のユーザー (oracle アカウント) のユーザー ID と同じであることを確認してください。同じであれば、次の 2 つのコマンドを実行したときに、同じユーザーが表示されます。

```
$ echo $USER
$ id
```

Oracle8 をインストールするための UNIX 基礎知識

この付録では、Oracle8 をインストールするための基礎的な UNIX 概念を説明しています。詳細は、ご使用のプラットフォームに固有のオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

- [UNIX 概念のポイント](#)
- [基礎的な UNIX コマンドの概要](#)
- [Oracle8 をインストールするための基礎的な UNIX コマンド](#)
- [基礎的な UNIX の構文と説明](#)

UNIX 概念のポイント

大文字と小文字の区別

UNIX では、大文字と小文字を区別します。ほとんどの UNIX コマンドは小文字で入力します。たとえば、Email.Log および email.log は、UNIX では異なる 2 つのファイルを指します。そのため、ファイル名とディレクトリ名の指定および検索には注意が必要です。

実行スクリプト

スクリプトを実行するには、次のように入力します。

```
./script_name
```

たとえば、root.sh スクリプトを実行する場合、次のコマンドを入力します。

```
./root.sh
```

ワイルド・カード

UNIX では、複数のファイル名およびファイル・タイプの指定が簡単にできる、ワイルド・カードと呼ばれる特殊文字が使用できます。ワイルド・カード「*」は、任意の文字を文字数に関係なく表すことができるので、大変便利です。たとえば、ファイル拡張子が .ora であるすべてのファイルを一覧表示するには、次のように入力します。

```
$ ls *.ora
```

これによって、init.ora、oapref.ora、tnsnames.ora などが表示されます。

```
$ rm *
```

これによって、現行ディレクトリからすべてのファイルが削除されます。

シンボル

スラッシュ

UNIX では、スラッシュ「/」に 2 つの意味があります。スラッシュ「/」のみの場合、またはパス名の先頭にある場合は、`root` ディレクトリを表します。また、長いパス名のディレクトリ名とファイル名を区切るためにも使用されます。

ドル記号

ドル記号「\$」は、UNIX では 2 つの使用方法があります。

環境変数にドル記号を付けると、その変数の値を示します。たとえば、`ORACLE_SID` が「`test`」に設定されている場合、`echo $ORACLE_SID` と入力すると、オペレーティング・システムはその値（`test`）を表示します。

次に例を示します。

```
$ echo $ORACLE_SID
test
```

ドル記号を付けずに `echo ORACLE_SID` と入力すると、オペレーティング・システムは `ORACLE_SID` を表示します。

次に例を示します。

```
$ echo ORACLE_SID
ORACLE_SID
```

また、ドル記号は前述の例のように、Bourne シェルおよび Korn シェルのプロンプトとしても使用されます。

基礎的な UNIX コマンドの概要

第 1 章「要件および機能」で使用する基礎的な UNIX コマンド

オペレーティング・システムのパッチおよびパッケージ

インストールされているパッケージおよびパッチを参照するには、次のように入力します。

DG/UX Intel の場合

```
$ /usr/bin/sbin/dg_sysreport -g dgux
```

NCR MP-RAS および Solaris Intel の場合

```
$ pkginfo -i [package_name]
```

SCO UnixWare の場合

```
$ pkginfo
```

「-i」を指定すると、完全にインストールされたパッケージのみが一覧表示されます。任意指定の *package_name* を省略すると、インストールされたすべてのパッケージが一覧表示されます。

第 2 章「環境設定」で使用する基礎的な UNIX コマンド

Server Manager

Server Manager を使用して、SQL コマンドを実行できます。

ライン・モードで Server Manager を起動するには、次のように入力します。

```
$ srvmgr1
```

root ユーザーとしてログインする

root ユーザー権限では、ユーザー作成や他のユーザーが所有するファイルの権限変更など、root ユーザーのみができるシステム機能を実行できます。また、root ユーザーはスーパーユーザー・アカウントとも呼ばれます。

root アクセスは特殊な権限を持つため、通常は、システム管理者に限定されています。

root アクセスの詳細は、システム管理者にお問い合わせください。

dba および oper グループ

データベース管理機能を特定のユーザーのみに制限するには、オペレーティング・システム管理ユーティリティ（`sysadm` または `groupadd`）を使用して、`/etc/group` ファイル内に `dba` グループおよび `oper` グループを作成する必要があります。これらのグループは、Oracle DBA 権限および OPER 権限をオペレーティング・システムのグループに基づいて割り当てるため、Oracle ドキュメントではこれらのグループを `OSDBA` および `OSOPER` と呼びます。

groupadd

`groupadd` コマンドを使用して、グループ ID (GID) が 101 の `dba` グループを作成する方法を、次に示します。

```
$ groupadd -g 101 dba
```

umask

`umask` コマンドは、作成されたファイルにデフォルトのアクセス権を設定します。値を 022 に指定すると、グループのメンバーおよび他のユーザーは、読み込み（およびディレクトリ検索）はできますが、書き込みはできません。

`umask` の値を 022 に設定するには、`oracle` アカountの `.profile` または `.login` ファイルに次の項目を追加します。

Bourne シェルまたは Korn シェルの場合は、次の行を `.profile` に追加します。

```
umask 022
```

C シェルの場合は、次の行を `.login` に追加します。

```
umask 022
```

環境変数

すべての UNIX シェルは、シェル変数または環境変数と呼ばれる現行セッションを定義付ける値を持っています。環境変数は、使用するプリンタ、ファイル権限の設定、モニターに表示される色など、必要な機能を設定します。

Oracle Server の環境変数は、通常、`oracle` アカountの `.profile` または `.login` ファイルに設定します。ログイン時に、適切なファイルが自動的に読み込まれます。

Bourne シェルで環境変数を設定するには、次の構文を使用します。

```
variable_name=value; export variable_name
```

次に例を示します。

```
ORACLE_HOME=/u01/app/oracle/product/806; export ORACLE_HOME
ORACLE_SID=test; export ORACLE_SID
LD_LIBRARY_PATH=$ORACLE_HOME/lib:$LD_LIBRARY_PATH; export LD_LIBRARY_PATH
```

C シェルで環境変数を設定するには、次の構文を使用します。

```
setenv variable_name value
```

次に例を示します。

```
setenv ORACLE_HOME /u01/app/oracle/product/806
setenv ORACLE_SID test
setenv LD_LIBRARY_PATH $ORACLE_HOME/lib:$LD_LIBRARY_PATH
```

chmod

chmod コマンドは、ファイルおよびディレクトリの読み権限、書き権限および実行権限を変更します（読みは `r`、書きは `w`、実行は `x`）。ファイルのモードを変更できるのは、そのファイルの所有者（または `root` ユーザー）のみです。権限は、ユーザー（そのファイルの所有者）、UNIX グループのメンバーおよび他のユーザーに対して変更できます（ユーザーは `u`、グループは `g`、他のユーザーは `o`）。

たとえば、ユーザー、グループ・メンバーおよびその他のユーザー（すべてのユーザー）に、読み、書き、実行権限を与えるには、次のように入力します。

```
$ chmod ugo+rw filename
```

環境の更新

`.profile` または `.login` 内の環境変数を変更した後は、現行セッションで有効になるように、`.profile` または `.login` ファイルを必ず実行してください。

Bourne または Korn シェルの場合は、次のように入力します。

```
$ . .profile
```

C シェルの場合は、次のように入力します。

```
% source .cshrc
```

ネットワーク・プロトコルのテスト

SPX/IPX DG/UX Intel 上でトランスポート・プロトコル・スタックが動作しているのを確認するには、次のように入力します。

```
$ ps -ef | grep sapd
```

このコマンドを実行した後に、プロセス・リストの中に sap デーモンが含まれていることを確認してください。

インストールの前に SPX デバイスに適切な権限があることを確認するには、root ユーザーとしてログインして、次のように chmod コマンドを使用します。

```
# chmod +rw /dev/nspx
```

これにより、すべてのユーザーに対して読み込みおよび書き込み権限が与えられます。

Solaris Intel 上でトランスポート・プロトコル・スタックおよび TotalNET Advanced Server (TAS) の Netware Service が動作しているのを確認するには、ブラウザから TAS の Web インタフェースを使用して、Netware Service の状態を確認します。

Oracle Parallel Server Option のインストール

Oracle Parallel Server のインスタンスは、分散ロック・マネージャ (DLM) を使用して互いに通信を行い、ブロックの修正を調整します。

DLM が起動していることを確認するには、次のように入力します。

```
$ ps -ef | grep dlmd
```

このコマンドを発行すると、現在起動中の DLM プロセスのリストが表示されます。このコマンドを実行した後に、プロセス・リストの中に DLM プログラムが含まれていることを確認してください。

UNIX グループの確認 OSDBA がクラスタのすべてのノード上にある /etc/group ファイルで定義されていることを確認するには、次のように入力します。

```
$ more /etc/group
```

すべてのノード上に同一（たとえば、dba という名前）のグループが存在することを確認してください。

oracle アカウントの作成 クラスタの各ノード上に `oracle` アカウントを作成します。次の内容を確認してください。

- `oracle` アカウントが OSDBA グループのメンバーである
- Oracle ソフトウェアをインストールおよび更新するためだけに使用する
- `oracle` アカウントにリモート・ディレクトリへの書き込み権限がある

マウント・ポイント・ディレクトリの作成 ノードごとにマウント・ポイント・ディレクトリを作成して、それが Oracle ソフトウェアのディレクトリ構造の先頭になるようにします。次の内容を確認してください。

- 各ノードのマウント・ポイント名が第 1 ノードのマウント・ポイント名と同一である
- `oracle` アカウントがマウント・ポイント・ディレクトリに対して、読み込み、書き込みおよび実行権限がある

たとえば、`ls -l` コマンドで表示される内容は、すべてのノードで同一でなければなりません。表示は、次のようになります。

```
drwxr-xr-x  1  oracle  dba          98 May 21 12:13 u01
```

ユーザー等価 ユーザー等価を設定して、`oracle` アカウントがすべてのノードにアクセスできるようにします。ユーザー等価を設定するには、`oracle` アカウントの `.rhosts` ファイルまたは `/etc/hosts.equiv` ファイルに、クラスタ上の他のノードのエントリを追加します。

第 3 章「インストレーションのタスク」で使用する基礎的な UNIX コマンド

Installer を起動する

次のコマンドのいずれかを入力して、Installer を起動します。

```
./orainst /m (Motif モードの場合)
```

```
./orainst /c (キャラクタ・モードの場合)
```

第 4 章「Oracle8 システムの構成」で使用する基礎的な UNIX コマンド

root.sh スクリプトを実行する

`root.sh` スクリプトを実行するには、次のように入力します。

```
# cd $ORACLE_HOME/orainst
# ./root.sh
```

Oracle8 をインストールするための基礎的な UNIX コマンド

表 B-1 基礎的な UNIX コマンド

ユーザー・コマンド	説明
cat	ファイルの中身を連結および表示します
cd	作業ディレクトリを変更します
chgrp	ファイルの所属グループを変更します
chmod	ファイルの権限モードを変更します
chown	ファイルの所有者を変更します
cp	ファイルをコピーします
echo	引数を標準出力に出力します
env	コマンドを実行するための環境変数を取得または変更します
find	名前または他の特性を指定してファイルを検索します
grep	文字列または正規表現を指定してファイルを検索します
groupadd	ユーザー・グループを作成します
kill	プロセスに信号を送信、またはプロセスを終了します
ls	ディレクトリの内容を一覧表示します
man	UNIX リファレンス・マニュアルのページを表示します (キーワードを指定してリファレンス・ページを検索します)
mkdir	ディレクトリを作成します
more	テキスト・ファイルを表示またはページ送りします
mv	ファイルを移動または改名します
page	テキスト・ファイルを表示またはページ送りします
passwd	ローカルまたはネットワーク情報システム (NIS) のパスワード を変更します
ps	現行プロセスの状態を表示します
pwd	現行の作業ディレクトリのパス名を表示します
rlogin	別のマシンにリモート・ログインします
rm	ファイルまたはディレクトリを削除 (リンク解除) します
rmdir	ディレクトリを削除 (リンク解除) します

表 B-1 基礎的な UNIX コマンド

ユーザー・コマンド	説明
set	すべてのシェル変数の値を設定します
setenv	環境変数を設定します
umask	デフォルトでファイルに与えられる権限を表示します
uname	現行システムの名前を表示します

基礎的な UNIX の構文と説明

cat *filename*

filename の内容を画面に表示します。cat コマンドを使用すると、UNIX が画面に表示できるテキストを含むファイルが連結して表示されます。

例

```
cat filename
filename の内容が画面に表示されます。
cat filename1 > filename2
filename1 の内容が filename2 の内容に上書きされます。
cat filename1>> filename2
filename1 の内容が filename2 の内容に追加されます。
```

cd

現行の作業ディレクトリを変更します。

例

```
自分のホーム・ディレクトリに移動するには、次のように入力します。
cd
1 つ上のディレクトリに移動するには、次のように入力します。
cd ..
指定したディレクトリに移動するには、次のように入力します。
cd /usr
```

chgrp group_name filename

ファイルまたはディレクトリにアクセスできるグループを変更します。

例

```
chgrp dba tools.dbf
```

dba グループが tools.dbf ファイルの所有者になります。

chmod code_name + code_name filename

filename に対してユーザー（所有者）、グループおよびその他のユーザーの読み込み、書き込み、実行権限を変更します。

例

```
chmod ugo+rwx filename
```

ユーザー（*u*）（ファイル所有者）、グループ・メンバー（*g*）およびその他のユーザー（*o*）に、読み込み（*r*）、書き込み（*w*）、実行（*x*）権限が与えられます。

```
chmod go-r filename
```

グループ・メンバーおよび他のユーザーの読み込み権限がなくなります。

chown username filename

filename の所有者を、指定したユーザー（*oracle*）に変更します。

例

```
chown oracle/temp/foo
```

cp filename1 filename2

filename1 を *filename2* にコピーします。*filename2* が存在しない場合は、そのファイルが作成されます。

例

```
cp filename1 filename2
```

cp -i * directory_name

現行ディレクトリ内のすべてのファイルを、指定した *directory_name* にコピーします。「*-i*」を指定すると、同じ名前のファイルがターゲット・ディレクトリに存在する場合に、それを上書きするかどうかを尋ねるプロンプトが表示されます。

echo *\$variable_name*

指定した変数に設定されている値を表示します。たとえば、現行のライブラリの検索パスを調べるには、次のように入力します。

Bourne または Korn シェルの場合

```
$ echo $LD_LIBRARY_PATH
```

find . -name '*string*' -print

string で始まるファイルを、現行ディレクトリおよびすべてのサブディレクトリ内で検索します。検索されたファイルは、フルパスで画面に表示されます。

grep *string filename*

指定したファイルを検索して、特定の文字列を見つけます。

例

jwilson がパスワード・ファイル内に登録されている有効なユーザー名かどうかを調べるには、次のように入力します。

```
grep jwilson /etc/passwd
```

kill *process_number*

指定した *process_number* のプロセスを終了します。最初に `ps` コマンドを使用して、実行中のプロセス番号を一覧表示してください。

例

```
kill 1351
```

通常の `kill` コマンドが機能しない場合、次のように入力します。

```
kill -9 process_number
```

この構文はプロセスを強制終了するため、必ず正しいプロセスを指定してください。

ls

現行ディレクトリ内のファイル名を一覧表示します。`ls` に `-a` オプションを指定した場合は、ドット・ファイル（`.login` など）が一覧表示されます。`ls` に `-l` オプションを指定した場合は、ファイルのユーザー ID、サイズ、作成日付および名前が表示されます。

ls -al *directory*

指定したディレクトリ内のファイルを表示します。

man *command_name*

command_name が解説されているオンライン・ドキュメントのページが表示されます。

man who で、UNIX の who コマンドの使用方法が表示されます。

mkdir *directory*

現行ディレクトリの下に新しいディレクトリを作成します。

例

```
mkdir letters
```

mv *filename directory*

このコマンドを使用して、ファイルがある位置から別の位置に移動したり、またはファイルを改名して元のファイルを削除したりします。

例

```
mv filename /usr/opt/
```

現在のディレクトリにある *filename* を /usr/opt/ ディレクトリに作成して、元のファイルを削除します。

passwd

現在ログインしているユーザーのパスワードを変更します。

ps

実行中の現行プロセスを一覧表示します。

pwd

作業中の現行ディレクトリを表示します。

rlogin *host_name*

ネットワーク上の別のマシンに接続して作業できるようになります。

例

```
rlogin hostb
```

rm filename

削除するかどうかを確認せずに、*filename* をディスクから削除します。

例

```
rm filename
```

rm -i filename

削除するかどうかを確認してから、*filename* を削除します。

例

```
rm -i filename
```

rmdir directory

ディレクトリが空のときのみ、そのディレクトリを削除します。

例

```
rmdir directory  
rmdir: Directory not empty
```

rm -rf directory

削除するかどうかを確認せずに、ディレクトリ、そのディレクトリ内のサブディレクトリ、およびすべてのファイルを削除します。

例

```
rm -rf directory
```

su

パスワード・プロンプトが表示された後、`root` ユーザーに切り換わります。

各国語サポート

この付録では、Oracle がサポートしている次の内容について説明します。この付録では、Oracle の各国語サポート (NLS) の詳細は説明していません。

- サポートしているソート順
- サポートしているキャラクタ・セット
- サポートしている言語および地域

サポートしているソート順

言語は、次の順でソートできます。

Arabic	German_Din	Italian	Spanish
Czech	XGerman	Latin	XSpanish
Danish	XGerman_Din	Norwegian	Swedish
XDanish	Greek	Polish	Swiss
Dutch	Hebrew	Russian	Turkish
Finnish	Hungarian	Slovak	Turkish
German	Icelandic	XSlovak	West_European

サポートしているキャラクタ・セット

Oracle NLS は、次のキャラクタ・セットをサポートしています。

7 ビット・キャラクタ・セット

US7ASCII	U.S.7 ビット ASCII (デフォルト)
D7DEC	DEC ドイツ語 7 ビット
F7DEC	DEC フランス語 7 ビット
S7DEC	DEC スウェーデン語 7 ビット
E7DEC	DEC スペイン語 7 ビット
AR7ASMO449PLUS	アラビア語 / ラテン語 ASMO-Plus 7 ビット
TR7DEC	DEC トルコ語 7 ビット
SF7ASCII	フィンランド語 7 ビット ASCII 拡張
NDK7DEC	DEC ノルウェー語 / デンマーク語 7 ビット
I7DEC	DEC イタリア語 7 ビット
NL7DEC	DEC オランダ語 7 ビット
CH7DEC	DEC スイス語 7 ビット
SF7DEC	DEC フィンランド語 7 ビット

8 ビット・キャラクタ・セット

US8ICL	ICL EBCDIC 8 ビット US
WE8ICL	ICL EBCDIC 8 ビット西ヨーロッパ
EE8PC853	IBM PC 8 ビット東ヨーロッパ - コード・ページ 852
LT8PC772	IBM PC 8 ビット・リトアニア - コード・ページ 772
LT8PC774	IBM PC 8 ビット・リトアニア - コード・ページ 774
DK8EBCDIC277	EBCDIC 8 ビット・デンマーク - コード・ページ 277
WE8DEC	DEC 西ヨーロッパ 8 ビット
WE8HP	HP 8 ビット西ヨーロッパ
US8PC437	IBM PC 8 ビット U.S. - コード・ページ 437

WE8EBCDIC37	EBCDIC 8 ビット西ヨーロッパ - コード・ページ 37
WE8EBCDIC500	EBCDIC 8 ビット西ヨーロッパ - コード・ページ 500
EL8EBCDIC875	EBCDIC 8 ビット・ギリシャ - コード・ページ 875
WE8PC850	IBM PC 8 ビット西ヨーロッパ - コード・ページ 850 (HFT 端末で使用)
WE8ISO8859P1	ISO 8859-1 西ヨーロッパ 8 ビット
EE8ISO8859P2	ISO 8859-2 東ヨーロッパ 8 ビット
SE8ISO8859P3	ISO 8859-3 南ヨーロッパ 8 ビット
CL8ISO8859P5	ISO 8859-5 キリル 8 ビット
CL8MSWIN1251	Windows キリル 8 ビット (CL8MSWINDOW31 に替わるもの)
CLMACCYRILLIC	Mac キリル 8 ビット
EL8ISO8859P7	ISO 8859-7 ラテン / ギリシャ 8 ビット
IW8ISO8859P8	ISO 8859-8 ラテン / ヘブライ (Iwriet) 8 ビット
WE8ISO8859P9	ISO 8859-9 西ヨーロッパ / トルコ 8 ビット
EL8DEC	DEC ラテン / ギリシャ 8 ビット
TR8DEC	DEC トルコ 8 ビット
EL8PC437S	IBM-PC アメリカ / ギリシャ・キャラクタ・セット
EEC8EUROPA3	EEC's EUROPA3 西ヨーロッパ / ギリシャ 8 ビット・ キャラクタ・セット
RU8BESTA	ラテン / キリル BESTA 8 ビット
RU8PC866	IBM-PC ラテン / キリル 8 ビット - コード・ページ 866
RU8PC855	IBM-PC ラテン / キリル 8 ビット - コード・ページ 855
D8EBCDIC273	EBCDIC 8 ビット・オーストリア / ドイツ - コード・ ページ 273/1
I8EBCDIC280	EBCDIC 8 ビット・イタリア - コード・ページ 280/1
N8PC865	IBM PC 8 ビット・ノルウェー - コード・ページ 865
TH8TISASCII	タイ工業規格 620-2533 ASCII 8 ビット
TH8TISEBCDIC	タイ工業規格 620-2533 EBCDIC 8 ビット

TR8PC857	IBM-PC トルコ 8 ビット - コード・ページ 857
NEE8ISO8859P4	ISO 8859-4 北および北東ヨーロッパ
AR8ISO8859P6	ISO 8859-6 ラテン / アラブ
AR8ASMO708PLUS	アラブ / ラテン ASMO-Plus 8 ビット (格納キャラクタ・セットとしては無効)
TR8ISO8859P9	トルコ版 ISO 8859-9 西ヨーロッパ

マルチバイト・キャラクタ・セット

JA16VMS	日本語 VMS 漢字
JA16EUC	日本語拡張 UNIX コード
JA16EBCDIC930	日本語
JA16SJIS	日本語シフト JIS
JA16DBCS	日本語 IBM
KO16KSC5601	韓国語 KSC5601
KO16DBCS	韓国語 IBM
ZHS16CGB231280	中国語 GB2312-80
ZHS16GBK	中国語 GBK
ZHT32CNS11643-86	台湾中国語 (繁体字)
ZHT16BIG5	BIG5 中国語 (繁体字)
ZHT32EUC	中国語 (繁体字) 拡張 UNIX コード

サポートしている言語および地域

表 C-1 に、言語、地域およびそれらに対応する NLS 値を示します。また、言語 / 地域の組合せごとに推奨するキャラクタ・セットも示します。

表 C-1 言語、地域および推奨するキャラクタ・セット

言語	NLS 値	地域	NLS 値	推奨する キャラクタ・セット
アメリカ英語	american	アメリカ合衆国	america	US7ASCII
アラビア語	arabic	アラブ首長国連邦	"united arab emirates"	AR8ISO8859P6
ブラジル・ポルトガル語	"brazilian portuguese"	ブラジル	brazil	WE8DEC
カナダ・フランス語	frc	カナダ (ケベック)	frc	WE8DEC
チェコ語	czech	チェコ	czechoslovakia	EE8ISO8859P2
デンマーク語	danish	デンマーク	denmark	WE8DEC
オランダ語	dutch	オランダ	"the netherlands"	WE8DEC
フィンランド語	finnish	フィンランド	finland	WE8DEC
フランス語	french	フランス	france	WE8DEC
ドイツ語	german	ドイツ	germany	WE8DEC
ギリシャ語	greek	ギリシャ	greece	EL8DEC
ハンガリー語	hungarian	ハンガリー	hungary	WE8ISO8859P2
アイスランド語	is	アイスランド	is	WE8ISO8859P1
イタリア語	italian	イタリア	italy	WE8DEC
日本語	japanese	日本	japan	JA16EUC
韓国語	korean	韓国	korea	KO16KSC5601
リトアニア語	lt	リトアニア	lt	NEE8ISO8859P4
メキシコ・スペイン語	esm	メキシコ	esm	WE8DEC
ノルウェー語	norwegian	ノルウェー	norway	WE8DEC
ポーランド語	polish	ポーランド	poland	EE8ISO8859P2
ポルトガル語	portuguese	ポルトガル	portugal	WE8DEC

表 C-1 言語、地域および推奨するキャラクタ・セット

言語	NLS 値	地域	NLS 値	推奨する キャラクタ・セット
ロシア語	russian	CIS	cis	CL8ISO8859P2
中国語（簡体字）	"simplified chinese"	中国	china	ZHS16CGB231280
スロバキア語	slovak	スロバキア	slovakia	EE8ISO8859P2
スペイン語	spanish	スペイン	spain	WE8DEC
スウェーデン語	swedish	スウェーデン	sweden	WE8DEC
タイ語	th	タイ	th	TH8TISASCII
中国語（繁体字）	"traditional chinese"	台湾	taiwan	ZHT32EUC
トルコ語	turkish	トルコ	turkey	WE8ISO8859P9

数字

7 ビット・キャラクタ・セット, C-3
8 ビット・キャラクタ・セット, C-3

A

Advanced Networking Option
 インストールの要件およびタスク, 1-18 ,
 1-20, 1-21, 1-22
 インストール前のタスク, 2-26
 クライアント専用のマシン, 2-26
 サポートされている認証アダプタ, 1-23
Advanced Replication Option
 今回のリリースでの新規作成, 1-28
ALTER DATABASE コマンド, 5-21

B

bin ディレクトリ
 作成方法, 2-17
 要件, 2-2

C

CD-ROM
 装置, 1-3, 1-4, 1-5, 1-6
chmod, B-6
CONNECT INTERNAL
 operator パスワード, 3-10
 Server Manager, 3-10
ConText Cartridge
 「ConText オプション」を参照
 インストール後のタスク, 4-17

 インストールの要件およびタスク, 1-10 ,
 1-11, 1-13
ConText オプション
 データベース領域要件, 4-17
 パラメータ要件, 4-17
CONTROL_FILES パラメータ
 アップグレード, 5-13
coraenv スクリプト, 4-12

D

DB_BLOCK_SIZE, 5-4
DB_NAME 初期化パラメータ, 3-9
dba グループ
 Oracle Parallel Server 用に作成, 2-24
DBA ロール, 2-15
dbora ファイル, 4-7, 4-8
dbshut スクリプト, 4-5
dbstart スクリプト, 4-5
DBT パッケージ, 1-7

E

Enterprise Backup Utility, 1-29

G

groupadd コマンド, B-5
GUI 要件, 1-6, 1-7, 1-9

I

Identix 認証アダプタ, 1-23

Image Cartridge
インストールの要件およびタスク, 1-10,
1-11, 1-13
init.ora ファイル
パラメータの変更, 4-15
Installer, 3-4
Net8 製品の再リンク, A-9
Parallel Server オプション, B-7
一般的な回復, A-10
インストール位置の決定, 3-5
起動, 3-2, B-8
キャラクタ・モード, B-8
使用方法, A-1
製品の削除, A-9
ソース, 3-6
データベース・オブジェクトの作成, A-2
デフォルトまたはリピート・インストール,
A-3
デフォルト・データベース, 3-9
トラブルシューティング, A-10
表示上の問題, A-10
プロンプトの応答, 3-4
Intelligent Agent
インストール後, 4-26
インストールの要件およびタスク, 1-18,
1-20, 1-22

J

Java Database Connect
インストール前のタスク, 4-20

K

Kerberos 認証アダプタ, 1-23

L

LD_LIBRARY_PATH
説明, 2-19
要件, 2-2
listener.ora ファイル, 4-21

M

Migration Utility
インストール, 5-9

実行, 5-14

N

Net8
「Oracle Net8」を参照
インストールの要件およびタスク, 1-18,
1-20, 1-22
Net8 Assistant, 1-29
NetWizard
「Net8 Assistant」を参照
Network Manager, 1-29

O

Online Text Viewer, 4-30
operator
パスワード, 3-10
OPERATOR ロール, 2-15
ORA_NLS
説明, 2-20
ORA_NLS33
要件, 2-3
Oracle Names
インストール後のタスク, 4-24
インストールの要件およびタスク, 1-18,
1-20, 1-21, 1-22
インストール前のタスク, 2-27
Oracle Net8, B-7
アップグレード前のタスク, 5-8
インストール後のタスク, 4-21
インストール前のタスク, 2-26
Oracle Parallel Server
oracle ソフトウェア所有者の作成, 2-24
rcp コマンド, 2-25
アップグレード前のタスク, 5-8
インスタンス数の設定, 3-11
インストール後のタスク, 4-19
インストールの要件およびタスク, 1-10,
1-11
基礎的な UNIX コマンド, B-7
構成, 4-19
設定タスク, 2-23
等価の設定, 2-25
ファイル権限, 2-24
Oracle Security Server
インストール後のタスク, 4-28

Oracle Server

- インストール後のタスク, 4-18
- インストールの要件およびタスク, 1-12
- クリーンに再起動する, 4-7, 4-8
- クリーンに停止する, 4-7, 4-8
- セキュリティ, 2-15
- ロール, 2-15

Oracle TCP/IP Protocol Adapter

- 設定タスク, 2-31

ORACLE_BASE, 1-25

- 説明, 2-19
- 要件, 2-3

ORACLE_HOME, 1-25

- oracle アカountのホーム・ディレクトリ, 2-16
- 説明, 2-19
- 要件, 2-3

ORACLE_SID

- Installer のプロンプト, 3-5
- アップグレード, 5-19
- 説明, 2-19
- 要件, 2-3

ORACLE_TERM

- 共通の設定, 2-20
- 説明, 2-20
- 要件, 2-3

Oracle8 Time Series Cartridge

- インストールの要件, 1-10, 1-11, 1-13

oracle アカount

- Oracle Parallel Server 要件, 2-24
- インストール後のタスク, 4-12
- インストール前のタスク, 2-18
- 作成方法, 2-16
- セキュリティ, 2-16
- ホーム・ディレクトリ, 2-16
- 要件, 2-16

oracle ソフトウェア所有者

- 「oracle アカount」を参照

Oracle パッチ, 4-14

oraenv スクリプト, 4-12

oratab ファイル

- インストール後のタスク, 4-5
- 作成, 2-17
- プロンプト, 3-5

OSDBA グループ, 2-15, 3-7

OSOPER グループ, 2-15, 3-7

OSS

- 「Oracle Security Server」を参照

P

Parallel Query Option

- 今回のリリースでの新規作成, 1-28

Parallel Server

- インストール後, 4-19
- インストール前のタスク, 2-23
- 構成, 4-19
- プロンプト, 3-11

Parallel Server 管理コンポーネント

- インストールの要件およびタスク, 1-18, 1-20

Partitioning Option

- インストールの要件およびタスク, 1-10, 1-11, 1-13

PATH

- 説明, 2-21
- 要件, 2-3, 2-21

PL/SQL

- インストールの要件およびタスク, 1-10, 1-11, 1-13
- 要件, 1-10, 1-11, 1-13

Pro*Ada Precompiler, 1-29

Pro*C/C++

- インストールの要件およびタスク, 1-14, 1-15, 1-17
- インストール前のタスク, 4-20

Pro*COBOL

- インストールの要件およびタスク, 1-14, 1-15, 1-16
- インストール前のタスク, 2-25, 4-20

Pro*FORTRAN

- インストールの要件およびタスク, 1-14
- インストール前のタスク, 4-21

Protocol Adapter

- SPX/IPX, 4-25
- インストール後のタスク, 4-24

R

RAW デバイス

- 必要な場合, 3-8

RAW ボリューム

- 作成, 2-24

RECORDLENGTH

- デフォルト値, 5-10, 5-18, 5-19

Recovery Manager
 設定, 4-18
REDO ログ・ファイル
 デフォルトの位置, 3-9
RENAME FILE
 アップグレード時にオプションを使用, 5-22
ROLLBACK 表領域
 サイズおよび位置, 3-9
root.sh スクリプト
 oraenv (coraenv), 2-17
 アップグレードおよび移行後, 5-23
 クラスタのリモート・ノード上で実行, 4-19
 実行, 4-2
 追加と新規作成の比較, 3-6
root ユーザー
 インストール後のタスク, 4-2
 インストール前のタスク, 2-4
 基礎的な UNIX コマンド, B-4

S

SecurID 認証アダプタ, 1-23
Server Manager
 CONNECT INTERNAL, 3-10
 Motif モード, 1-29
 基礎的な UNIX コマンド, B-4
setuid
 シングルタスク・プログラムのリンク, 1-25
SGA
 「システム・グローバル領域」を参照
SHARED_POOL_SIZE パラメータ, 4-17
sid
 「インスタンス名」を参照
snmpd 実行ファイル, 4-27
Software Asset Manager
 製品のグループ化, 3-6
Spatial Cartridge
 インストールの要件およびタスク, 1-10, 1-11, 1-13
SPX/IPX Protocol Adapter, 4-25
 インストールの要件およびタスク, 1-22
SQL*Module for C, 1-29
SQL*Net
 「Oracle Net8」を参照
sqlnet.ora ファイル, 4-21

SRCHOME
 説明, 2-21
 要件, 2-3
start_peer スクリプト, 4-27
SYSTEM 表領域, 3-9
 ConText オプション・データベース・オブジェクト, 4-17
 移行領域の検証, 5-10
 サイズおよび位置, 3-9

T

TCP/IP Protocol Adapter
 インストールの要件およびタスク, 1-19, 1-20, 1-22
TEMP 表領域, 3-9
 サイズおよび位置, 3-9
Text Viewer
 「Online Text Viewer」を参照
TEXT_ENABLE パラメータ, 4-17
Time Series Cartridge
 UTLREF パッケージのインストール, 4-18
 インストール後, 4-17
 インストールの要件およびタスク, 1-10, 1-11, 1-13
 リリース 8.0.6 の新製品, 1-26
Time Series Cartridge 用の UTLREF パッケージ, 4-18
TMPDIR
 説明, 2-21
 要件, 2-3
tnsnames.ora ファイル, 4-21
TOOLS 表領域, 3-9
 サイズおよび位置, 3-9
TWO_TASK
 設定, 4-25
 説明, 2-21
 要件, 2-3

U

ulimit, 1-7, 1-8
umask
 設定, 2-18
 要件, 2-2
umask コマンド, B-5

UNIX アカウント

インストール後の更新, 4-12

作成方法, 2-16

要件, 2-2

UNIX カーネル

構成方法, 2-4

パラメータ設定, 2-2, 2-4

UNIX 環境

要件, 2-2

UNIX グループ, 2-15

作成方法, 2-15

要件, 2-2

USERS 表領域, 3-9

サイズおよび位置, 3-9

V

Visual Information Retrieval Cartridge

インストールの要件およびタスク, 1-10, 1-11, 1-13

リリース 8.0.6 の新製品, 1-26

あ

アカウント

oracle アカウントの作成, 2-16

アップグレード

ALTER DATABASE コマンド, 5-21

init.ora ファイルのデフォルト位置, 5-12

init.ora ファイルの編集, 5-13

ORACLE_SID, 5-19

RENAME FILE オプション, 5-22

新しい製品のインストール, 5-19

アップグレード前のタスクの実行, 5-7

既存データベースのバックアップを取る, 5-7

既存の製品, 5-20

今回のリリースをインストールする, 5-12

データベースのオープン, 5-22

データベース・オブジェクト, 5-19

データベース・ファイルの再配置, 5-20

データベース・ファイルの削除, 5-22

バージョン 6 から, 5-4

破壊されたデータベース・ファイル, 5-20

方法の選択, 5-2

用語, 5-2

「移行」を参照

い

移行

SYSTEM 領域の検証, 5-10

「アップグレード」を参照

定義, 5-2

バージョン 6 から, 5-4

変換ファイル, 5-16

方法の選択, 5-2

ユーティリティ実行後, 5-16

移行の終了, 5-16

インクルード・ファイル, 5-13

インスタンス名

db_name との関連, 3-9

ORACLE_SID との関連, 3-7

説明, 2-19

インストール・ソース

指定, 3-6

インストール

Installer の使用, 3-2, A-1

インストール後のタスク, 4-1

インストール前のタスク, 2-1

概要, 1-2

制限事項, 1-25

要件

サーバー, 1-12

製品固有, 1-12

インストール後

Parallel Server オプション, 4-19

インストール後のタスク

Intelligent Agent, 4-26

Oracle ConText Cartridge, 4-17

Oracle Names, 4-24

Oracle Security Server, 4-28

Oracle Server, 4-18

Oracle8 Time Series Cartridge, 4-17

Protocol Adapter, 4-24

root.sh の実行, 4-2

Time Series Cartridge, 4-17

製品固有, 4-16

データベースの起動および停止の自動化, 4-5

インストールの概要, 1-2

インストールのための UNIX コマンド, B-8

インストール前のタスク

Advanced Networking Options, 2-26

JDBC, 4-20

Oracle Names, 2-27

- Oracle Net8, 2-26
- Oracle Parallel Server, 2-23
- Parallel Server, 2-23
- Pro*C/C++, 4-20
- Pro*COBOL, 2-25, 4-20
- Pro*FORTRAN, 4-21
- RAW ボリューム, 2-24
- root ユーザー, 2-4
- インストール要件
 - 製品固有, 1-10

え

- エクスポート / インポート
 - Oracle8 データベースの作成, 5-18
 - 必要なリソース, 5-5
- エラー・メッセージ
 - 再リンク, A-11

お

- オブジェクト・オプション
 - インストール要件およびタスク, 1-10, 1-11, 1-13
- オプション
 - 「Oracle Server」を参照
- オペレーティング・システム
 - パッチ, 1-6, 1-7, 1-8, 1-9, B-4
 - 要件, 1-6, 1-9
- オンライン・ドキュメント
 - 今回のリリースでの新規作成, 1-28
- オンライン・トランザクション処理
 - メモリーの節約, 3-10

か

- カーネル
 - パラメータ設定, 2-2
- カーネル・パラメータ
 - 設定, 2-4
- 各国語サポート, 3-4
 - 格納キャラクタ・セットの指定, 3-9
 - 言語, C-2
 - サポートしているキャラクタ・セット, C-3
 - ソート順, C-2
 - 地域, C-2
 - メッセージ用言語の指定, 3-6

- カプセル化プログラムの構成
 - 構成
 - カプセル化プログラム, 4-27

- 環境
 - 共通の環境の作成, 2-17, 4-12
 - 現行セッションの更新, 2-22
 - 設定, B-4

- 環境変数
 - 基礎的な UNIX コマンド, B-5
 - 説明および設定, 2-18
 - 要件, 2-2

- 管理
 - 共有環境による簡素化, 2-17

- 管理者
 - UNIX アカウント, 2-2
 - UNIX グループ, 2-2

き

- 基礎的な UNIX コマンド
 - 環境設定のためのコマンド, B-4
 - 構成, B-8
 - 構文, B-10
 - 説明, B-9

- 既存の Names Server, 4-24

- 起動
 - Installer, B-8

- 起動および停止, 4-5
- 起動および停止の自動化, 4-5

- 機能
 - 基礎的な UNIX コマンド, B-4

- キャラクタ・セット
 - 7 ビット, C-3
 - 8 ビット, C-3
 - マルチバイト, C-5

- キャラクタ・モード
 - インストール, B-8

- 共有環境
 - 作成, 2-17

- 共有メモリー
 - 構成, 2-4

く

- クライアント共有ライブラリ
 - パスの設定, 2-2

グループ

Oracle Parallel Server 用に作成, 2-24

け

権限

umask による設定, 2-18
ファイル作成, 2-2

こ

構成

マスター・エージェント, 4-26

コマンド

chmod, B-6
groupadd, B-5
umask, B-5
UNIX 構文, B-10
インストールのためのコマンド, B-8
環境設定のためのコマンド, B-4
基礎的な UNIX コマンド, B-9
機能, B-4
構成, B-8
要件のためのコマンド, B-4

今回のリリースでの新規作成

Advanced Replication Option, 1-28
Oracle*XA Library, 1-29
Parallel Query Option, 1-28
SQL*Net, 1-28
オンライン・ドキュメント, 1-28
分散データベース・オプション, 1-28, 1-29

さ

サイズが大きなファイルのサポート, 1-25

最適フレキシブル・アーキテクチャ, 1-25

Oracle Parallel Server, 3-11
ソフトウェア・インストール・オプション,
3-5

データベース・ファイルの再配置, 5-20

複数ドライブの使用, 3-8

再リンク, 2-15

エラー・メッセージ, A-11

手動, A-9

必要な場合, A-9

参照ドキュメント, vii

し

システム識別子

「インスタンス名」を参照

システム要件, 1-3

システム・グローバル領域

init.ora ファイル, 4-15

シングルタスク・プログラムのリンク, 1-25

システム・グローバル領域 (SGA)

共有メモリーの設定, 2-4

使用されなくなった製品, 1-29

初期化パラメータ

ConText オプション, 4-17

DB_NAME, 3-9

チューニング, 4-14

シングルタスク・プログラム

リンク, 1-25

シンボリック・リンク

Installer の制限事項, A-11

シンボル

未定義, A-12

す

スクリプト

cat8000.sql, 5-17

catrman.sql, 4-19

dbshut, 4-5

dbstart, 4-5

migrate.bsq, 5-9

oraenv (coraenv), 4-12

root.sh, 4-2

start_peer, 4-27

ステージ領域, 3-6

作成方法, A-9

制限事項, A-9

説明, A-9

トラブルシューティング, A-12

スワップ領域

要件, 1-3, 1-4, 1-5, A-11

せ

制御ファイル

更新時, 5-13

デフォルト・データベース, 3-9

製品固有

- インストール後のタスク, 4-16
- 要件, 1-10

製品の削除, 1-29, A-9

- Enterprise Backup Utility, 1-29
- Multi-Protocol Interchange, 1-29
- Server Manager Motif, 1-29

製品の変更, 1-28

- Advanced Replication Option, 1-28
- Parallel Query Option, 1-28
- SQL*Net, 1-28
- オンライン・ドキュメント, 1-28
- 分散データベース・オプション, 1-28

セキュリティ, 2-15

- operator パスワード, 3-10
- ファイルの検証, 4-3
- リモート・ログイン, 3-10

そ

ソーシング

- ファイル, B-6

ソフトウェア, 1-10

- アップグレード, 5-2
- マウント・ポイント, 2-15

た

単一インスタンスのマシン, 4-13

端末タイプ

- ORACLE_TERM 設定, 2-20

て

停止および起動, 4-5

ディスク領域

- 不十分なディスク領域, A-10

ディスク・ドライブ

- 要件, 1-3, 1-5, 1-6

データベース

- Installer が作成したデータベース, 3-9
- オブジェクトのアップグレード, 5-2
- 起動, 4-5
- 停止, 4-5
- デフォルト・ファイルの位置およびサイズ, 3-9
- バックアップ, 5-7
- マウント・ポイント, 2-15

データベース・オブジェクト

- アップグレード, 5-19
- 作成, A-2
- デフォルト設定値, A-2

データベース・ブロック・サイズ

- アップグレード時の制限事項, 5-4

データ・ファイル

- サイズおよび位置, 3-9

デフォルト・インストール

- 実行方法, A-3

デフォルト・データベース

- 表領域, 3-9
- 要約, 3-9

と

ドキュメント

- アクセス, 4-29
- インストール位置, 4-29
- インストールの方法, 3-12
- 製品とオペレーティング・システムの比較, 3-12
- ナビゲーション・ファイル, 4-29

トラブルシューティング

- Installer, A-10
- 再リンクのエラー, A-11
- ステージ領域, A-12
- 表示上の問題, A-10
- ユーザー・エラー, A-12

に

認証アダプタ

- Advanced Networking Option のサポート, 1-23
- Identix, 1-23
- Kerberos, 1-23

ね

ネットワーク

- 構成ツール, 1-29

ネットワーク製品

- ソフトウェア要件, 1-23

は

バージョン 6, 5-4

- パスワード
 - 設定, 3-10
 - デフォルト値, 3-10
- パスワード認証, 3-10
- パッチ
 - Oracle, 4-14
 - インストールされているパッケージの確認, 1-9
 - オペレーティング・システム, 1-6, 1-7, 1-9, B-4
- パッチ・セット
 - インストールの方法, A-7
 - 削除方法, A-8
 - 説明, A-6
- パラメータ
 - init.ora ファイル, 4-15
 - アップグレードおよび移行時の変更, 5-12

ひ

- 非同期 I/O, 1-7, 1-8
- 表領域
 - サイズおよび位置, 3-9
 - デフォルト・データベース, 3-9

ふ

- ファイル
 - dbora, 4-7, 4-8
 - init.ora の変更, 4-15
 - listener.ora, 4-21
 - Net8 構成, 4-21
 - oratab, 4-5
 - sqlnet.ora, 4-21
 - tnsnames.ora, 4-21
 - インクルード・ファイル, 5-13
 - サイズが大きなファイルのサポート, 1-25
 - 作成の権限, 2-2
 - 作成の権限の設定, 2-18
 - 制御ファイル, 3-9
 - セキュリティ, 4-3
 - チューニング・パラメータ, 4-14
 - デフォルト・データベースのサイズと位置, 3-9
 - 複数マウント・ポイント間での分散, 3-11
- フォルト・トレラント, 3-11
- 複数インスタンスのマシン, 4-13
- ブラウザ
 - 「Online Text Viewer」を参照

- プリコンパイラ
 - ソフトウェア要件, 1-13, 1-16, 1-10
- プロンプト, 3-4
- 分散データベース・オプション
 - および Oracle*XA Library, 1-29
 - 今回のリリースでの新規作成, 1-28
- 分散ロック・マネージャ, 1-6

へ

- 変換ファイル, 5-16

ほ

- ホーム・ディレクトリ, 2-16

ま

- マウント・ポイント
 - 作成, 2-4
 - 説明, 2-15
 - ネーミング規則, 2-15
 - 要件, 2-2
- マスター・エージェント構成, 4-26
- マルチスレッド・サーバー
 - 使用する場合, 3-10
 - 説明, 3-10
- マルチバイト・キャラクタ・セット, C-5

み

- 未定義シンボルのエラー, A-12

め

- メモリー
 - 要件, 1-3, 1-4, 1-5, 1-6

も

- 問題点および制限事項, 1-25

ゆ

- ユーザー等価
 - 確認, 2-25

よ

要件, 1-3

GUI, 1-6, 1-7, 1-9

oracle アカウント, 2-16

UNIX 環境, 2-2

オペレーティング・システム, 1-6, 1-7, 1-9

基礎的な UNIX コマンド, B-4

製品固有, 1-10, 1-12

ディスク領域, 1-24

メモリー, 1-24

り

リピート・インストール

実行方法, A-3

リモート・ログイン

パスワード, 3-10

ユーザー等価, 2-25

リリース 7.3.2 からの製品の変更, 1-28

リリース 8.0.6 の新製品, 1-26

リンク

シングルタスク・プログラム, 1-25

れ

レスポンス・ファイル, A-4

ろ

ローカル bin ディレクトリ

作成方法, 2-17

要件, 2-2

ロール, 2-15

ログ・ファイル

インストール, 3-5

論理ボリューム, 3-11